
幼馴染との付き合い方

吉岡 遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染との付き合い方

【Nコード】

N1234E

【作者名】

吉岡 遥

【あらすじ】

桜舞い散るこの春、わがままでつんつんしていた幼馴染の小早川ユカリが、おしとやかではのかに俺想いな女の子になりはじめるという史上最大の奇跡がやってきた。しかし、これがとてつもない超常の始まりを告げる序章であったことは、もちろんその時の俺には知る由もなかったのだ……。【SF、ファンタジー風味のラブコメです】

プロローグ

「ナルのばーかつ！ ふん！」

この界限一帯に冷気を呼びよせるような視線を投げかける女の子。そんな口調からも分かるように、キツツイ性格でほとほと手を焼いてしまう。

女の子の名は小早川 こはやかわ 紫 ゆかり。

がんがんと太陽が照りつける八月一日の生まれで星座はしし座、誕生石までは分らない。

そして、俺にとっては幼馴染兼腐れ縁。だが容姿端麗、才色兼備、ナデシコ候補、一般的なイメージを挙げればきりが無いほど完璧な女の子だ、あいつは。

でも、ホントのところはわがままで、つんつんとしていて、好き勝手に、ばかりっていうのが口癖で、それでいて妙に世話焼きな女の子だったんだぜ。

しかし――。

この春、彼女はイメージチェンジをしちまったんだ。

それもこれまでとはまるで正反対の、慎ましくおしとやかで雪の国からやってきたような純情少女になってしまったみたいだった。

最初はふざけているのか、ネコをかぶっているのか、と。

誰でもそう思うようにさ、俺も思ったよ。

だけど、ユカリは心の底から真剣だったんだ。

俺の知らないうちにそう思い、どうやらその影響でこの世界が不思議で満ちあふれていることに気づかされていたらしいんだ。

それは、俺と小早川だけの関係を繋いでいた幼馴染という絶対的な一つの線のプロセスが破線となつてうねりだし、その線が元の直線に戻った時にはそれぞれの始点から別の方向に線を延ばし始める合図であつて、さらにその延びた線の続きは鋭角な角度をつけて変化していった――。

やがて、その線は複雑に交わりあい、気がつけば俺達は五つの点から構成されている星型になつていったと言えるのだろうか。

そう、このメビウスの輪で紡がれたみたいな同時進行別多角的スパイラル現象は、目前の問題が解決した今となつても、これから先の未来が何を示唆しているのかは分からない。

俺達と、その俺達に深く関係するであろうその三人。

まだ分からない。卯月の4月から皐月の5月に移り変わるこの季節。これから何かが始まるのだろうかとまたもや考える。

けど、とにもかくにもだ。あんなにも望んでいたはずの超常が実際に起こってしまったこと。それだけが唯一無二の事であつた、といえるのだろうか。

ただ、そのおかげで物凄く普遍的であり、とても大事な事に気がついたのである。なかった。

まあ、今となつてはだから言えるんだけどな、小早川よ。

1-1 獅子にバラを配した幼馴染

人生とはオカルティックなもの。

こういう真理を見抜けない大人がこの世の中には多いのではないだろうか。ただ流れるままに人生のレールに乗っかって過ごし、できるだけ波風立てずにやり過ごしていく日々。それはまるで永遠にたゆたい続ける水面のように安らかであるかもしれない。

だがそれとは反対で、波乱万丈に満ちた嵐のような人生を望むのだって悪くはないだろうと思うんだ。

人は嵐がきて初めて自分の身の危険、その悲惨さに気づくというならば、その前に自分から起こしちまえばいいんじゃないか、と。なぜって？

だって生あるものには必ず死が訪れる。ならば、その間に人生をいろいろと楽しめたものの勝ちじゃないか。

とどのつまり、俺が言いたいのは人生とはオカルティックであるのが当然であって、結局は健全な未来に安定したレールなんてなく、人の禍福なんてものは変転し定まりのないものだということである。だから、未来の自分の平和ばかりを気にしても仕方ないのだよ、と世の懸命に働く大人に毒づいてみたりもしたくなるね。

そして、こんな俺とやらは、きっと面白いであろう宇宙人の存在も信じていたいと思っではいるし、この世にファンタジーとやらが存在しているなら全てに首を突っ込みたいとも思っているんだ。世の中の不思議な事を探索したいのも当然で、奇妙な話の本があればのめり込んでしまうほどに魅了されてしまうともいえる。

だからこそ、こうやっていつ面白いことが起きていいように準備はしているのである。いろいろな知識を蓄えたり、実際にそういうことが起こったときのシュミレーションをしてみたりとか。それが何の準備だ？なんて邪推なことを考える輩が多いのはもちろんいただけないし、特に俺の幼馴染のお嬢さんは「何いつてるのよー」と

でもいいような勢い（というか言っている）で仕方がない。

例えば昔の事を挙げると、この幼馴染のお嬢さんとはこんなことがあった。

中学の時、俺はテストの裏にいろいろな空想事を記して紙ひこきを飛ばしていた。よく夢を乗せて空に飛ばそうみたいな話だ。そしてさまざまな事を計画通りに、なんか面白いことが起これーなんて願いを込めて飛ばしていたのだが、彼女はそれを拾ってきて「もう少ししっかりしなさいよっ、あんたはもっとしなければならぬことがいっぱいあるでしょー？ 学校の事とか運動の事とか、本ばかし読んでるからこうなっちゃうのよー」とか言う始末だった。せっかくの人の幸せ気分をぶち壊しにしておいて何が楽しいんだかな。そう、だからまったくもってたちが悪いと言えまいか？

何もそこまでしなくてもいいだろう、と思ってしまうわけだ。

それにな、小早川よ。おまえがそういうつもりならば本当はこっちにだって言いたいことはあるんだぜ。

そうあーだこーだと耳がタコになりそうなほどいろいろと言うけれど、俺だって常識的に考えてありえないことはありえないって心のどこかでは分かっていたりはするということをだ。

それは実際に現実ってものが厳しくて、こっちの想いがたとえ束になって世の不思議な現象に立ち向かったとしても一向に表す気配もなく、きつと屋根から来るサンタクロースぐらいの極小さか、おみくじで大吉を七回連続で引いたとしてもまだ物足りないぐらいの確率って感じだろうってことだろう、きつと。

しかし――。

それでもまだ、俺はそういう世界を求めているで踏ん切りが付かず、実はじたばたともがき苦しんでいるのかもしれない。そして、それをユカリが上から目線でのたまう。

まあ、だから結局はこういうわけだ。

こうやって必死に虚空に咲いた花を掴もうとしていた俺の想い。
それが叶わぬ今は、この鬱屈とした気分を吹き飛ばそうと自己の存在をこのクラス中の皆にアピールするために破天荒な振る舞いをして、あっはっはって笑い飛ばされて華麗なる高校デビューを飾るのもいいもんかもしれんな、ってそんなのことが一瞬だけでも思った俺を誰が責められようか。いや、まったくもって責められやしないな。

——なんて意味のない長いプロローグ張りの独白みたいなことを思いながらも、俺はただの新生でしかなかった。

そんないっぱしの大道芸人みたいな自己紹介パフォーマンスなんて絶対できやしないし、あんなふうに物事の道理を分かった気になって、懸命になって身を粉にして働いている大人を卑下してみるふりをするだけ。結局は頭の中で面白い世界がどうたらこうたらとゴネゴネ理屈をこねくり回すしか能のない自分ってわけらしい。

こうやって普通に大学へと進学できそうな——俺が努力して入れる範囲内の進学もどき校的な近くの高校へと入り、桜舞い散る入学式での長い校長先生の話に辟易として、あいさつ代わりみたいな担任のひょろんとした話の空気も難^なぐように聞き流して、あ——これが普通の高校生活なんだな——と実感しながらも、自分のキャンパスに描いてきた面白い夢は何度も何度も現実の絵の具で塗りさおなれて、そうしてこの世の中と折り合いをつけていくものかもしれない。

そう、だからこうして新年度を迎えた四月一日を過ごして、四月二日を過ごして、四月三日を過ごした俺は、今まさにここで新しいクラスのみんなに平凡な自己紹介をしてささっと席につき、傲^{うがんぷそん}岸不遜と言っ**て**はいいいすぎだがそのようにあたりの反応を窺い、別に大した変化もなく少し先に座る幼馴染の小早川 ユカリの視線がちょいときつめだなとか思いながらも、後ろの人の声がやけに響く声で自分の名前を言ったから耳をそば立てる必要もなく聞こうかと

していたんだ。

だがその後は、一向にうんとスンとも言わないわけであって、俺は思わず振り返ってしまったんだよ。

ひょいっと。

すると、自己紹介の途中だった彼女は、

その一見ただけでえらくちっこくてクールな容貌の彼女は、

五秒まえに初めて名前を知った新原にいばら紗希さきという女の子は、

耳元でこう言ったんだ。

その吐かれたセリフは、

口元をスローにでも再生して、

それでいてすりきれるほど何度もテープで確認したいセリフで、
そんなセリフを言うの彼女がとても気になって、

いやそれだけじゃなく、この先一生忘れることができないであろう入学初日の四月四日火曜日に聞かされたセリフは、

「なるせ……、あなたはあたしがまもる」という言葉だったんだ。

この瞬間、俺は冗談にもこんなことを思う。

大河もその源は觴さかすきを濫らんべるほどの小さな流れかな、という濫觴らんしょうなんて『事の始まり』を表す言葉があるんだが、それにしちゃあーインパクトが大きすぎる『事の始まり』ではないですか、と。

これは初っ端から河口付近の大きな流れじゃありませんか？

だけど、この吃驚びっくり仰天ぎやうてんしてしまいそうな彼女の囁きは、新生活の幕開けが予想をはるかに通り越して面白いものになりそーだと思わ

せるのに充分過ぎる出来事だったんだ。

そして教室中がわーわーきゅきゅと色恋沙汰的な様子で騒いでいるのだが、なぜか俺にはその新原 紗希しんしという女の子の真摯な視線が只者ではないオーラを感じさせていた。

まさにこれをきっかけとして、日常から超常に足を踏み入れているなんて冗談ごとになったら願ってもないことか思いながらもな。しかし、それ以降貝のように黙りこくってしまった彼女を席に座るように促していた。

1-1 獅子にバラを配した幼馴染（後書き）

はい、拙作に目を通していただきありがとうございます。

そこで……、もうおわかりの方もいらっしゃるかと思いますがこの小説は『涼宮ハルヒの憂鬱』をモチーフにしています。

これは自分にとって苦手な一人称を鍛えるために文体をお借りしようかと考えた次第であり、テーマやこれから出てくるキャラも似通っていくはずです。（たぶん）

そして主人公のことなのですが、原作と比較すれば15倍ぐらいうざいキャラになってしまいました。ただ、これから成長していくように話を動かしていく所存であり、試行錯誤しながらも続きを紡いでいきたいと思っています。

こんな不肖な作者ですがこれから先もよろしく願います。

結局、あの大きな騒ぎの後は担任の角川がそれを見事に鎮静させ、まさに世界の終りまで続くんじゃないかってほどの長さでこれからの学校生活でのことを話し始めた。

だがそれを聞いていると、春眠暁を覚えずってーのは大概にして間違いではないと思ってしまいうわけで、いくらあんな衝撃的な発言があつたすぐ後でもあの長さは^{まぶた}瞼がくつついちまいそで大変だつた。

しかも昨日はがつつりと深夜の恐怖番組を見ようとして、ヤバそうな場面に差し掛かったところで思わずリモコンで音を下げってしまった時に出了たオンリヨウ（怨霊）とオンリヨウ（音量）のコラボレーション文字に一人おののいてしまい、気がついたら興醒めして突如襲ってきた眠気の悔しさから意地でも最後まで起きてやる、と考えたのがいけなかった。そうまでして見たものはつまらんかったし、何事も肩に力が入りすぎると得てして結果はこうなるというのが道理というもの。

そうしてこうぐたぐたと白昼夢ではないにしろぼんやりと日常の平和を噛みしめているような思考回路でいるうちに、もう二、十分は経つたらしい。

高校での初日があっけなく終わって、そそくさと教室を出て行くやつや数少ない中学時代のなじみのある顔のところに行ったりするやつとか……。それといまだに俺と新原 紗希のを見ている奴もいるのだがそんなことはどうでもいい。

とりあえずは新原 紗希だと優先順位を決めて、真意を問いただそうと体をイスごと後ろに傾けた。

しかし、後ろを振り返った先には新原 紗希はいなかったんだ。

——どこへいった？

——ネコがいなくなったところではないだろ？

——あんな発言をしておいて、どうしてすでにいなくなっているんだ？

俺はあの時の高揚感が逃げてしまいそうで、たとえ新原 紗希の言っていることがたちの悪いジョーク（そうとは思えないのだが）であったとしても、あんな発言をする女の子は面白いに決まっていると考えているうちにもう少し言葉を交わしたかった。

すると、「ちよつとっ」という少し怒を含ませた声が聞こえてきたのだ。

もちろん振り向くこともせずに判別できるその声は、幼馴染兼腐れ縁の小早川 紫。^{ユカリ}その『紫』の漢字をユカリと読ませる所業は源氏物語から抜粋して取ってきたはずなのに、慎ましさや奥ゆかしさが名前に反映されなかったらしいんだがな。

「ねえってばっ！」

俺に近づいてきたユカリのやつは怒気を含んだ口調を続ける。

「ん……おい」

小早川よ、そうすぐおかしなことが起こると怒りたくなるのは分からないまでもないが、ここの机の上をバシバシと叩いてまでして騒がないでくれないか。

こっちはな、これから先きつと謎が謎を呼ぶ連鎖に発展するであろう出来事の序章に立っているはずだから——なーんてさ。

つまりはだな、小早川のあっちむいてほいレヴェルの遊戯には付き合ってられないんだ。

「ナル！　ちょっと聞いてよ！」

この呼び方は単に名字の成瀬からとっただけでいわゆるあだ名である。

しかし小早川が言うには、俺の性格が病的な、詩的なまでのナルシストという意味も込めているらしい。

たいしての反論？　それは断じてない。

実際俺にはうすうすとナルシストの自覚があったりはするんだがら当然と言えるだろう。

前髪の流れを極端に気にするし、ワイシャツの折り目だって絶対領域を作り出しているし、それにネクタイは一日五回はつけ直してはいたりしている、これが。

それとなにぶん運動音痴なせいか文科系の方向へと流れるのは当然であって、だからこそいろいろな書物を読みふけてきた俺はこんな大仰で詩的な言い回しをよく使ってしまうのは仕方がないのかもしれないな。

「もお」

もう何度目かの沈黙に耐えかねたのか、ついには腕をとってぶらんぶらんと動かし始めた目の前のお嬢さん。

おっ、おいっ！　いてえーよ。

ユカリは俺の腕をブン捕まえて大波小波をする大縄のごとくぐるぐる回していた。

人体の仕組みってのはそんなに器用にはできていない。だいたい三百六十度以上のひねりをいれたらそれはもう立派な関節技になる。

「やめてくれ」と堪らず叫ぶ。

「じゃああたしの話を聞いてよ、話したいことがあるのよ」

「なんだよ、しょうがねえな」

「はい、それなら決定。この後、喫茶店に行くあたしにつきあいなさい」

おいおい。

やけに眩しい笑みを浮かべているのだが、俺のフィルターから通すと嫌味以外のなにものでもない。

小早川 ユカリ。

そう、彼女は人の都合も考えずに強引に物事を決めちまうってやつだ。

自分の好みではないものの腰までの長さはある美しい黒髪、そして印象に残る大きな瞳に控え目で可愛いアヒルのような口もと。ユカリは美人の部類に入るんだろうからおしとやかにかしこまっていればいいものの、そうやって猛々しい獅子のごとく暴れたりするからダメなんだ。もし、もっとおしとやかならば、このクラスの大方の男子は今以上に貴女へとなびきますとも。男とは残念な生き物でしてそういう性分なんだからなー。まあ、かくなるうえは、小早川がこの世の生き方を絶対に間違っているのだと。そのことだけが断言できてしまうのだ。

「な、なによー、どうしてそう胡散臭い目つきであたしのことを見るわけ？」

「なあ、ユカリ。おまえさあ、もう少しおしとやかになれないか？」

「なっ?!」

「ほら、いつも柳眉を逆立てて怒ってばかりだろー。おまえにもっ

とかわいげがあれば喫茶店でもどこでも喜んでついていくけどな」

「う……、あつ、あんたなんかさいってえっー！」

この今の状況を一言で片づけちまえば、俺はものすごく睨まれていた。

やっぱり柳眉を逆立ててという表現で、遠まわしに美人さんだということを伝えてみても無駄というわけだ。

それどころか小早川は、三国志の蜀漢の初代皇帝——劉備 玄德の存在すら知らないのかもしれない。どーでもいいが、関羽と孔明が死んだときの劉備の心中にはホロリときたもんだ。

「はあ」

だからこそ基本マイペースな俺でも幼馴染のこいつにはちよつとはこたえる。あのユカリ姫のペースに惑わされて付き纏われて……。つまり、同じクラスになっちまったのはこれからの懸案事項なわけだ。

しかし、そんなことを考えて黙っていれば、

「いいっ、いいいっとかくけどね、あつ、あたしはただね、新装オープンした喫茶店……そうよ、新装オープンした喫茶店に入ってみたいただけなんだから。かんちがいしないでよね！」

顔をぷいっとそむけながら言っていた。

まったく。

ユカリは冒頭で『い』を何回いつてんだよ。それに一人であっちむいてほいはしないでくれ。

「それにあのひんまがった性格を少しでも改善させるためにも、あ

たしの話をじっくり聞かせてあげなきゃダメみたいだわ。うん」

自分に言い聞かせるように続けていたユカリ。

「それと昨日見た夢の話もしなきゃいけないし」

しかし、この言葉を聞いて思考回路が頓挫^{とんざ}した。

それは何て言っただってめずらしいのだ。小早川と夢の話の組み合わせは。

まるでマンガースとハブがフォークダンスをしているぐらいであって、そもそもあいつにはSF、ファンタジー系統な話——こんな夢みたいな話は現実だと何の影響もたらさないものという認識を持っているはずだから。

例えば中学で小早川と交わした会話にこんな一コマがあったのをふと思い出した。

「なあ、ユカリ」

「な、なによー」

「この惑星でさ、誰か一人の存在が世界を改変させるような膨大な力があつたとしたら世の中は劇的に変化して面白くなるとは思わないか？」

「はっ？」

「だから、誰か一人の存在が世界を改変させるような話と違って面白くないか？」

「……っ、このー、ばかつ、そんなことよりもっと現実的なことを

考えなさいよ」

「じゃあ、例えばなんだよ」

「た、例えば？ うーんと、えっとねー女の子をデートに誘うとか？ 男の子ならば健康的にスポーツをするとかが現実的じゃない？ ほら、良く言われるでしょ。スポーツができる男の子はもてるって。本なんか読んで無駄な知識をひけらかしてるよりはね、そっちのほうがいいの。——うん、それなら青春っぽいわ。そうだわっ！ な、なんならね、しょうがないから特別にあたしと——」

俺は自分から凡例を挙げさせといておきながらも話が切り替わるのを危惧したため、ここでユカリの発言を遮ってしまった。

「ま、待てって、少しは考えてみたら面白いんじゃないのか？」

そしたらこの時から確か、目の前のお嬢さんはぶすうーとし始めた気がする。

ぶうたれるという表現をここで使わなくてはいつ活用するんだ、
つていえるぐらいの常套句じょうとうぐくとなってしまうみたいだった。

「ナルのばかばか、ばか——っ！ なんであたしがそんなこと考えなくちゃいけないのよ！ 人の気も、人の気持ちもしらないで」

「はー？ ったく。やっぱりそれかよ、ユカリは。ユカリだって俺の気持ちも知らないで、だろー」

「う、あ……、悪かったわねー」

こういうふうに話をし始めただけでいつもは断固拒否という態度

をとっていたってーのにどういふことなんだ？　　ってわけである。
しかも、自分から話すとなればなおさらだ。

ここはそうだな、景気づけにいつもの大仰なかつつけポーズでも決め込んでやるか。

「なあユカリ、夢はさ、みるもんじゃなくて、――かなえるもんだろ？」

「……っ……ばかつ！」

そんな大仰なポーズ姿が気持ち悪かったのかひねり出した言葉が悪かったのか、ユカリのやつは流し台にある三角コーナの生ごみでも見るような目つきをしていた。どうやら俺のナルシストぶりに拒否反応が発動したようだ。

「もう、ばかなこといってないで早く行くわよ！　このナルチュー男！」

まったく、冗談が通じないやつだ。

そのキィキィーした声を優しくあまったるい声に変えて、「ナル、チュー」なんて言ってくれたら腐れ縁から可愛い幼馴染に昇格してあげてもよいんだが、って、うわっ……こんなことを一瞬だけでも胸の内に秘めてしまった自分自身に吐き気をもよおしながらも、今世間に物凄い阿呆面さうらを晒さらしているであろう成瀬なるせ 春彦はるひこってやつを張り手でブン殴る輩やからが必要であろうな。

春のうららの隅田川という歌がある。

大抵の人は歌詞をちよろちよろと思い浮かべることができたり、一度は口ずさんだことがあるだろう。こののほほんとした春の大らかさを表す歌は、厭世的、退廃的、陰鬱的といった負の思考を全て吹き飛ばしてしまうもので、春の素晴らしさを称賛してやまないものだとなんか認識しているし、世間一般でもそう言う認識はずだ。

そして春の代表格でもある桜。それは白妙しろたえの雪のごとく舞う花卉。あの不思議な軌道を描く放物線に癒されたり、これを見ながら秒速何センチメートルで落ちていくのか、なんてことを考えるのも風流ふうりゅうもののあはれを感じるもの。

あのそよ風を纏った優雅なそれは、梢こずえを揺らすたびに零れ落ちる優雅なそれは、割と儚いものだ。

なーんていうような、春の桜花爛漫の季節なのだが。

なのだが。な、の、だ、が。

この俺の目の前にいる人間爆弾チェリーブロッサム——実在戦闘機名、桜花——のような凄まじい勢いで食べまくる小早川のやつは、そう言った類のものにしか目がいかないようで、あの歌の一節や花を愛でることなんて知らないのではないかと勘繰りたくなるものだ。まあ俺の中では、四月の卯月うづきと掛けて卵付きご飯（世間一般ではオムライスというのだが）を食すのはなんとなく微笑ましいのだが、その異様なまでに盛り上がったスーパーフルティーパーフェがやはりいただけない。

しかも店員のやつは気を利かしているのか知らないが、二人分のスプーンを用意してきやがった。俺の苦手な生クリームとかチョコレートとかを一心不乱に口へと運ぶ小早川。ほっぺについてるのがかわいいなこのやろー、とか思った時点で男として負けだろうか。

いいや、小早川には負けたとしても世間には勝ったんだー!!

——ってアホか俺は。

まったくもって論点がずれてしまった。それに何と闘っているんだ？ この目の前の美少女と、さもデートしているかのように見せて世間と闘っているのか？

実際は悲惨だっていうのに。

それにな、小早川のやつ、今度はわき目もふらずにさくらんぼを食べているのだぞ。

そろそろ「あたしの胃袋はブラックホールとホワイトホールを抱えているの」とでも宣言してほしいものだな。

だいたい花より団子という言葉があるように、そういうものでも食っていればよからう。変に洒落てパフェなんて食うからいけないんだ。なぜにそのような『おいしいチェリーのつまみかた（白抜き星マーク）』的な——どこかの少女コミックの一節にでもでてきそうな、あるいは携帯小説にもでてきそうなワンシーンのようにさくらんぼをぱくつくんだよ。

「もぐ、おかわりするからねっ！」

……………。

やはり、俺は負けだな。

その天高く突き上げられたクリスタルでガラス細工な器に、あとどんぐりぐらいの甘味料を膨張させれば気が済むんだろうとか詮無いことを考えるのはダメだ。そこまできたらもう抗うわけにはいかない。あの感無量と言った顔をされたら——。

でもな、このすらっとしたスタイルが保てるのは有機生命体として不思議なくらいだとか思ってるさ。

「あと、これと、これと、これと」

「うっ、お、おまえ」

小早川が店員に再度注文したのを見て思わずボヤク。

実のところ、この喫茶店に来てからすでに一時間半が経過している。

まったくもって迷惑なのだが、まあこの場所であったことは少なくとも僥倖うわいふだといえるかもしれない。なぜなら、この都内有数を誇る桜の大樹が連つらなった公園近くの喫茶店は、外観の景色の見通しが良く目の保養にはなっていることだけは間違いはなかったからだ。ちなみにこの喫茶店の名は『葉』といって、店の名前の由来は本を読むときに休憩を挟む葉のように、お客様にとっては人生の休憩地点として欲しいという配慮からつけられたらしい。

しかし、

「休憩地点じゃねえよな」

まさにその反対で、疲れはどっとたまってしまう。

それは時を巻き戻せば、小一時間近くという表現がぴったし当てはまるほどに、新原 紗希との関係やその人なりとの人物について問い詰められていた俺だからだ。こっちだって知りたいことなのにな。

『なるせ……、あなたはあたしがまもる』

そう、これが彼女と交わした唯一の言葉。いや、交わしたというよりは一方的にそう言われたただけだ。これ以上は何も分からん。ユカリは、『新原 沙希は何者なのよー』というが、そもそも新原沙希が新原 沙希たる所以など誰であつてもわかるはずがない。

いやはや、見事なまでの反復同語的トートロジー。

まあ、おまえが問うていることはサクランボはなぜ赤いのかと一緒だってこと。

そんなことは誰にだってわかりはしないんだ。

「なにぼんやりしてるのよ」

「えっ？」

「ほらっ」

なぜか目前に、甘味料付きのスプーンを差し出される。

「ほら、あんまり退屈そうにしているから食べさせてあげるわよ、ひとくちだけ特別に。だから今すぐ口を開けなさいよ」

あのなあー、俺は甘いものが嫌いなんだぜ。セリフだけを聞けばとても魅力的な提案であるが、そんないかにも嫌そうな仏頂面ではこっちだって対処に困るわけだ。

しかし、俺が次に発すればいい適切な言葉を探していた時に、

「あのね」

「なんだ？」

「なに考え込んでいるのよ」

「いや、べつに」

「じゃあ言うけどね、だいたいあたしがナルになんか食べさせるわけないでしょ！　なんか邪な事を考えていたんでしょ、どうせ。あたしホントは、こうやって目の前で間抜け面して口を開けているところで、このスプーンをねー、くると方向転換させて自分で食べる予定だったんだから、って聞いているのー！」

「あー、そんなのは分かっているよ」

「……」

小早川はなぜか何らかの躊躇いを見せて、そしてこう言った。

「じゃあいい、もう本題行く」

「ん？」

「ナル、しっかり聞いてよね。ちゃんと最後まで聞いていなかったら許さないから」

おいおい。許さないって……。それに本題ってなんだ？

「あのさ、聞く気あるのー？」

小早川が疑わしそうな視線を向けて訴えかけてきた。

しかし、あれだ。と俺は言いたい。

今までずっと聞いてなかったのはユカリだろーが、どんなに何事かと問いかけてもオムライスとかパフェとかぱくついて。なにが「ジャンボパフェは女の子の夢なの」ってその真っ白なアイスクリームを純白さを穢すようにチョコレート、バナナ、さくらんぼ、キウイ、スティック状や、コンフレーク状の簡易菓子なんかでふんだんに踏みにじった代物にどれほどの付加価値があるのだと――

「ああすまん……で、なんだ？」

目線が怖かったので思わずうなずいたのね。

「ほらっ、あのはなしよ」

「だからなんだよー、ユカリ」

「あ、あのね、ナル。こんなこと絶対に言いたくなかったのに。ホントはこんなことはダメなんだけど」

小早川は自分の指と指を重ね合わせて、それでもって人指し指をくるくるーと器用にまわしていた。

「げっ、現実世界と夢世界がねっー、ほら、繋がっている？みたいな夢を見たのよっ！」

「へっ?!」

おいおい、マジでこれは地動説ではなく天動説を唱えるガリレオ的なありえなすぎる場面に出くわしちゃったんじゃないか？ あの小早川 ユカリが、こう改まってSF風味の夢話をしようと試み

るなんて。

「で、どうしたんだ？」

好奇心に駆られた俺はおもわず立ち上がってしまった。

「えっ？　んと、とりあえず座って」

起立をしたからにはなんとなく礼までして着席。

小早川はそれを訝しげに見つめていたが、しばらくするとこう言った。

「えーとそれがね、あーこの世界とまた別の世界のある空間が交差しあっているというか、あたしが異空間に吸い込まれたような話なのよ」

どうやら小早川は、今までの一時間半の無駄に対して見事に帳尻を合わせてくれたらしかった。

そしてその後の俺は普段のユカリから考えるとあり得ないことだと思いながら、または新原 紗希の件と重ね合わせて一抹の不安を覚えながらも、やはり今日は特別な日だなんて考えつつただ黙ってその話を聞いていたのだった。

——カンカンカンカン

遮断機が俺の行く手を阻むように——というか、だから遮断機なのだが当然ではある。ともかく、この都立武蔵桜高校（都立校にしては小規模の六クラスであり生徒の学力は中の上。しかし新設校の試みからか、やけに特色のある校風と部活動を基本としている。それに外観の秀麗さから人気が高まり入学試験の倍率が上昇中の学校。これが世間一般の評価である）に向かうまでの踏切はオレンジの列車が通り過ぎるまで長い間待ちぼうけというわけだ。

まあ、この踏切によって高校生になった実感を感じるのだがな。ただし。

入学してから一週間も経てばいい加減こいつが開く時間帯も分かるはずなのだが、敵もなかなかの策士でダイヤの乱れやらなんやらを頻繁に誘発させ、踏切が閉まる時間帯を微妙にずらしてきやがる。これは大問題なのかもしれない。

と、嘘ぶいてみたけれど、そんなことよりもっと大きな問題が転がっていた。

それはここ最近のユカリが普通に静かで大人しくて、俺が右を向けていったら右を向いちゃうぐらい献身的で……はいはい、そこまではありません。

でもさ。あいつ、人が変わったように静かになったんだ。

あの変な夢の話をしてから。そう、あの入学式の日に無理やり付きあわされた喫茶店での出来事以来様子がおかしいということになる。

だとしたらあの夢の内容が気になるわけですし、最初はそうたいしたもんではねえよと思ったのだが、こうやって非現実的な一週間を過ごしているとそのことが妙に気にかかるもの。

よくよく考えると、あの時の話がやけに精巧であって、緻密にプロットを立てたらSF的な小説でも作れそうなりアルティのある話と言えてしまうわけだ。

だからこそ俺は、フロイトやユングの夢解析理論を引っ張り出してみたのだが、そこには不安定極まりない夢世界に飲み込まれてしまうという話があったりしてあまり気分のいいものと言えなかった。しかもこの話は、今の現実世界の不安や憂鬱から外面世界にある抵抗原理を生み出してしまい、それを夢という内面世界に潜り込んで解決できるかどうかって話になっちまうらしい。

って、考えすぎだろう。

小早川のあの態度は、速すぎる五月病か遅すぎるエイプリルフールか。

あるいは俺と話すのはもう億劫になったとかだ、きっと。

それよりもあのときは、俺に喫茶店の代金をおごらせたことの方が酷かった。

それに対して文句を言えば、「なによ！ 男の子でしょ！ こんなところで」なんて一点張りだった方が一大事ではないか。

俺達は筒井筒ともいえる幼稚園のときからの関係。今更そんなことといわれても、少しばかり美人になろうとも駄目なわけだ。

ホントあの時は、入ってすぐにしっかりと注文を頼み、それと新原 紗希という存在がよほど疎ましいのか烈火の如く話しまくり、しまいには人の頭をポカリと叩きだす小早川だった。それに対抗したのは不用意に乱れた前髪を直す右手だけという有様。

これじゃあこっちが無理やり連れだして、はたからみればデートまがいのことをやって無理やり告白して機関銃のごとく欠点を言われまくり断られ、しつこく交際をせまろうとするもそれも叶わず殴られたみたいじゃねーか。まったくだ。

こういう頭の構造しているんだか、我が幼馴染の小早川ユカリさんは。

でも、どうしたんだろーか。

すると、「よっ！」と気の抜けた掛け声とともにどうやら背中を叩かれたみたいだった。

振り返るとそこにいたのは斎藤。中学の時少しばかり付き合いたったやつ。

こいつは常に明るくておちゃらけていて誰とでも気さくに話すやつだったな。

ちなみに付き合いといっても挨拶程度だったか？

「おー。斎藤」

「俺達同じクラスだろ？ 話かけてこいよ」

うむ。この一週間、小早川 紫と新原 紗希のことでいっぱいっぱいだった。

だがそれよりもな、斎藤。

俺がおまえと同じクラスだったとは。う、うろ覚えなのはそう責められないよな。いや、一週間もあればそんなことはないかもしれないか。

「す、すまなかった」

「はあ？」

思わず口をついて出てしまった俺の言葉に呆然とする斎藤。

だが、世の中ってのは知らなくていいことの方が多いからこれ以上のことは言えん。

しかしだ。そこからの申し訳なさというわけではないんだが、この劣悪なる朝のラッシュ地獄に開かなくなった踏切を眺めながらも

うだつの上がない話をし始めようではないか。

「なあ、斎藤、ちょっと聞きたいことがあるんだが」

「へいっ?」

「部活の話でもしていいか?」

「ああ、別に構わんけど?」

その返事を確認して、俺はあまりよく説明を聞いていなかった部活動の登録の件についてを聞いてみた。

つまり悩むことなく即決で文科系に決めたのはいいのだが、自分の中の新たな懸案事項の一つとなってしまうた文芸部の存続状況についての質問をしていたのだ。

なんでも新入生ともどもに配られた冊子とやらには、今年度初めの時点で文芸部の部員が誰ひとりいないらしい。ということは、前年度で部員だった三年生が全て卒業しちまったってわけであって、そういう場合はどうするんだろう、などと愚痴半分で話しかけていた。

そしたら斎藤は、「ああ、それは角川の先公に相談してみろよ」と言い、含みのある笑いを浮かべながらも「それよりさ、文芸部なら俺いろいろと面白い話知っているぜ」と続けたのだ。

そしてその後の斎藤は文芸部の噂の真相についてをやったためたらと話し始め、俺は話の合間に彼が何部に入るかを尋ねてみたりもしていた。

そんなことはさして興味はなかったのだが、とりあえず聞いておくだけのつもりでだ。

すると「天文部だぜー」とにやけた顔つきで言いやがったのだよ。似合わないな。女の子目当てか？ まあ、どうでもいいけど。

「じゃあさー成瀬、俺もおまえに聞きたいんだけどな、あの小早川はどうしたんだ？」

一通り眉唾話を語り終えた斎藤が次にふってきた話題は小早川のことだった。

偏屈な顔して聞いてくるがその中にはある種の好奇心が見て取れる。それは最近の小早川があまりにも静かだから、おまえが手なずけたのかとでも言いたそうな目線だった。

「あー、玉けりやんじゃねえーの？」

テキストに答えてはぐらかしてやる。まあ、概ねあおおむっているだろう。

なぜなら小早川ユカリという女の子は、あのサッカーのナデシコジャパンを目指しているのだから。あいつの容姿だったらおしとやかな大和撫子にもなれるのに。これじゃあ世のおなごの体育会系的分野にしか道がありませんでしたよ、的タイプの人間に怒鳴れちまう。選択の自由があるホントもったいないのだが。

「そうか……」

しかし、なぜか言いにくそうに口籠るふりをする斎藤。

「どうした？」

「あのな成瀬、どうも勝手が違うみたいなんだ。サッカーを止めるらしい」

「え、あ……」

マジかよ。小早川のやつ、夢の後先追いかけて道半ばで破れたり、とかか？

あーでもこれでいいのか。

おしとやかさんになれるのだろう。

——って今がそうか。いやそれよりも、

「なんで？ どうしてそれを知っているんだ？」

「あれだよ、俺と小早川、席が近いだろー。だから聞こえちまったんだよー」

こんな話を聞いてもやはり信じられなかった。

「うそだろ」

「いやホントだ。しかも、本を読みたいとまでいったぞー」

今まで生きてきた中で小早川が本（読書という目的で）を開いているところは見たことがない俺は、この踏切へと向かってずっけそうになってしまったのは仕方のないことかもしれない。

その日の昼休み。

まだ本腰とはいえないかったるい授業を野球選手の一流打者の凡打率ぐらい（まあ七割）のアウトさでさらっと流しきった俺は、世間一般であれば休憩時間とも呼べるであろう昼休みの至福な時間を迎えていた。

鞆から弁当の包みを取り出し中を開いて、そこから飛び出してきたタコさんウィンナーがやけに丹念と作られているのを感慨深げに眺め、そして精神を一点に集中させて狙いを定めたまさにその時だった。

「ちょっと、ナル」

そう、久方ぶりに小早川の声が聞こえてきたのだ。つまりは、俺の中の脳内警報が緊急事態を訴えて鳴り響いている状態になる。

ここ一週間、「それってなんかのさなぎじゃね？」ってぐらい静かだった小早川のユカリ嬢が何をしてくるかが分からないので、柄にもなく緊張していたと言ってもいいのだろう。でも、また夢の話でもしてきたら事細かに解析でもしてやるよ。

「ど、どうした？ 小早川」

とりあえずはさわやかに返事をする。
自分の心の内を晒さないように。

「おい、どうしたんだよ？」

しかし、そんなこともお構いなしにユカリのやつは俺を連行しよ

うとするのだ。

おいおい、どういふことなんだ？

「用があるからに決まってるでしょ」

そう言いながら腕をひねり上げ、てこの原理を応用した間接可動部を封じる技を繰り出した。だから、そのひねり癖はいい加減に何とかしてくれ。

「なあ、おまえいきなり何をするんだよ」

「いいの！」

そしてこんな状況にも関わらず、それを羨望の眼差しで見てくるクラスメート。なんという勘違い。

後ろの席にいた新原 紗希は置物人形ばりのノーリアクション。

なあ、小早川はあれだけど、新原よ。

あれから何一つアクションを起こさないあんたは、今こそあの耳元でクールに囁いた「あたしがまもる」を実践するときじゃないのか？

いや、そんなことはしなくてもいいが、なんであの日から誰に対しても口を利かないんだよ。今だってその唐辛子みたいな銜くわえて不思議そうな顔しているのはどういふことなんだ？

——って、あれモノホンの唐辛子じゃねえーか。

「ほら、はやく！」

「おい、ちょっと待てよ……」

まるで痴漢をした男のように連れられていくこの現状を打破しよ

うととりあえずは声を上げてみる。しかし、こうなってしまったユカリはとにかく強引なのだ。もうどうしようもないのかもしれない。

「いいから来なさい」

「待て。このウインナーぐらいは」

「ダメに決まっているでしょー。おとなしく言うことを聞きなさい！」

あーあ、すんでのとこで難を逃れたタコさんウインナーのやつは、こんな姿を見てざまーみろとでも思ってるんだろうね。きっと。

こうして俺主導の自由民権運動ないし人類三大欲求の一つを完膚なきまでに拒否した小早川は、サッカーの競り合いで培ったであろう腕力を使いこなしさらに腕を抑えつけてきた。するとこいつが諸悪の根源だというような目つきで、優雅に八本以上の足を広げる軟体動物を睨みつけている。

「おい、ユカリ、なにしてんだよ」

「ナ、ナルはあたしよりもこっちが大事なのね。だったらこんなの、ナルのウインナーなんか食べてやるんだからっ！」

「おい、止めとけそのセリフ」とそんな言葉すらを発する余裕すら与えずに言い切ってしまった小早川は、若干照れくさそうな顔していた。

——だったらしいな。それに食うな！

おかげで間違った方向にベクトルを向けている思春期真っ盛りの野郎が、この瞬間にリビドーまるだしの変な勘違いをしちまったらしい。

「ほ、ほらっ、あたしが食べてあげたからはやく行くわよ」

どうやら俺には、五十メートル走タイム分の食事時間すら与えられないのか。まったくどうしてこうなるんだよ。けど、いつもの小早川が戻ってきたからいいとするか。

んむっ？ 別に嬉しくなんかはねえけどな。

それよりもこんな後ろ髪引かれる思いで教室を後にするのは癪に障るから、タコさんウインナーに惜別の呪文ぐらいは唱えてやろう。

「その艶やかなる八本の脚よ。またの名は偉大なる触手よ。成瀬春彦の名において貴様に命じる。我が難敵の小早川に聖なる試練を与え給へ」

俺はせめてもの悪あがきと思い、先祖代々から伝わってきた古の呪文を今ここで淀みなく言葉を紡いだのだ。いにしえ

するとどうだ！

まるで真紅の竜が翼を広げるかのごとくひゅるひゅるとタコさんウインナーの足の部分が広がっていくではないか。そう、その姿はまさに大海の帝王であり、見事なまでのドラゴンソードと化した触手は、小早川 紫の体のラインを強調させるようにぐるぐると巻きついていく。そして――、

「ばっかじゃないのー！」

ああ、そうだとも。魔法なんて使えるわけないさ。誰か今すぐ俺をブン殴ってほしいぜ。

平時からナルシストを公言して憚らない成瀬春彦^{はばか}という人物。つまりは俺の事なんだが、そいつはとうとう重大なことに気がついてしまった。それは休憩という二文字から成り立つ魅惑の時間が小早川 紫という人物にことごとく蹂躪されちまうことだ。例えば、『喫茶店での人生の休憩時間然り、昼休みでの学校の休憩時間もまた然り。

だが、常に時間に追われている生きざまはかつこいい男の証だぜ！
なーんてな。

こんなあほらしいことをボヤボヤと考えているうちに小早川が連れだした場所は屋上だった。あんなにも強引に引っ張ってきたわりにはなんてことのない場所。

ていうかなんで鍵が開いているんだ？ これまた都合よくとか思いながら俺たちは十七段あった階段を登り終えた。侵入禁止と書かれたプラカードみたいなのも、富士の樹海ではあるまいしなんてせせら笑い華麗に無視をする。

とりあえずは注文通りにと屋上へ出て、『赤毛のアン』ばりの――心からお祈りをしたくなった時に、たった一人で広い原っぱか深い森にでも出かけて空を仰ぎ見る――みたいな心持ちで空を仰ぎ見た。

ふーむ。

透き通ったようなマリンブルーの空は心地よい気分にはさせてくれるね。さっきまでの自分勝手な小早川にいらついていた気持ちが見事に吹き飛んでしまったな。

そう、この優しい春の風のように世界がもっと清らかで整然としていたらどんなに素晴らしいことか、とか思ってみたりもするんだよー、ていうのはなしか？

「ハ、ハルくん……」

とここで、小早川しかいないのこの場所で俺の名前を優しく告げる声色が聞こえてきた。

「あのね」

……って、えっ？ ユカリか？

俺のことをハル君って呼んだのか？

そんなのいつ以来だよ。中二の時に寝言でうっかり聞いちゃった時以来か。それともバミューダトライアングルの見解について言い争いになったときに、意固地になってハルくんと言ってしまった時ぶりか。

様子がおかしいだろ。おかしすぎる。

こっそりと様子を窺ってみると、俺の些細ないたずらもおふざけもそして現実逃避という名の夢も全て見透かしてしまうような、そんな無駄に爛々と輝いていた双眸そうぼうがそこにはなかった。

「ハルくん、ってば」

やはり、ユカリはさっきまでの威勢の良さがすっかり影を潜め、どなり散らしていた声はかよわくおしとやかな声になっていたのだ。さらにはうるるとした瞳でこっちを見つめてたし、俺の裾のはじをちょこんとつまむようにしていた。

なあ、それだと美少女に磨きがかかってしまうじゃーありませんか。んかぁー。

しかも……おいおいユカリさん？

小早川は若干の躊躇を含ませながらも――それは葛がからみついた藤が巻きついた思考を緩慢な動作で表現してきたので分かっていたのだ――こっちに向けて差し出していたものに驚いてしまう。

「これは？」

ここに来る前から気にはなっていたものだが、まさかそこからクリーム色した可愛いお弁当の包みがでてくるとは思わなかったからであつた。目をこすって見てもまぎれもなくお弁当だった。が、まだわからん。俺をからかっているのかもしれない。

「お、おべんとー」

あーわかっている。だが、意図を聞いているんだ。

「おべんとう」

どうすればいいんだ。あれか？ おべんとおべんとうれしいな何でも食べますよくかんで。なんて音痴な歌でも披露すればいいのかね俺は。

もし仮に、砂糖と塩を間違っているようなドジっ娘ぶりを発揮しても、笑顔で頷くのがこの場合でのたしなみだろうか。すると。

「たべなさいっ」

まるでうそのようだった。

今の小早川はセリフだけで考えるとつんつんとした命令口調なんだが、本当のところは素直で優しい声色だった。まるで清純でちょっぴりおしとやかな女の子が乗りきれないもののなんとなくツンデレに挑戦してみました的な違和感。いや、外人面だが喋って見たら日本人よりも流暢な古風的日本語を話すぐらいの違和感だろうか。なんにしても、普段の小早川 紫とはかけ離れた雰囲気なのだ。

「あのね、いつ、いつしょーけんめいつくったの」

「えっ」

今度はおかしな語尾口調でもなく、正真正銘のかわいさだった。きっと今の俺は、年末ジャンボの宝くじで四等を当てた時ぐらい啞然としているであろう。ちなみに当たったことはない。アイスの当たりやガムのおまけですらない。

いや、そんなことはどうでもよくて、そんなぐらいいいつが何か施すなんてことはありえないってことを言いたいだけだ。少なくとも記憶にはごさいません、とやら政治家みたいになものぐさになっちまうじゃないか。

「ダメ、かな？」

ユカリはそう言いながらも小首を傾げた。

その男を骨抜きにしまいそうな柔らかな表情。

少し伏し目がちで恥ずかしそうに笑い、ちよこんと目が合ってしまった時に見せた屈託のない微笑み。

それは百万ドルの微笑みと形容されちまうやつだ。

年末ジャンボでは二等ぐらいか？ 百万ドル。

——いいや、そんなことよりもさ。俺、もうだめかもしれない。

たとえこのお弁当で毒殺されようとも、小早川が裏の組織に操られていようとも、夢うつつであつたとしても、こいつを食わなければ男として間違っている気がする。

「いや、そんなことないよ。でも、これって俺のためにつくつてくれたの？」

驚きのあまりこんなこと聞いてしまった俺。なんて傲慢なんだ。

「う、うん」

頬を紅色に染め軽く視線を反らしつつもそう言ったユカリは、ベンチに座ってお弁当の包みを開けるように促した。俺は迷いもなくお弁当を開けていく。

「あのね、あたしがたべさせてあげたいな」

「えっ、うそ……」

「うー、うそじゃないよおー」

あー、ダメだ。可愛すぎである。

ユカリは向日葵の種をほおぼるハムスターのようにむくれていた。そう、あえてちょぴりむくれていたという感じだ。その様子は奥ゆかしい百合の花のようで、普段の棘のある薔薇とは大違いだった。

「これね、ハウレンソウの玉子焼きなの。卵を溶いて、だし汁と砂糖で調理してね、ハウレンソウを芯にして巻いたんだ。あっ、これはタコさんウインナー。さっきのあたしは食べちゃったみたいで、でもほら、鳥のからあげも葉っぱ……じゃなくて、へたのついていないミニトマトもあるんだ」

なんて優しいげな饒舌なんだろう。トマトのへたのことを葉っぱっていうところに、なぜか心拍数が振り切れたメータのように駆け上がるぜ。

「これ、ほんとに食べていいのか？」

「——うん。それに、あーんして」

俺はユカリの言われるままに、餌を待つ小鳥のようにただ口をあんぐりと開けていた。

しかし、はたと気づく。

このお約束のような、むず痒くなるような恋人的イベントはどういうことだろうか。

何度も言うが、あの小早川ユカリだからだ。

よく考えろ、よく考えろ。ユカリが本当にそんなことするわけがないじゃないか。

例えば、例えば、そうか！

——あれは四月の初めの事でした。星の綺麗な夜にふと散歩をしたくなって外に出てみると、遙か遠くの空の彼方から不思議でスベクトルといえてしまう変な可視光線が輝いていました。まるでドップラー効果を受けたかのように波長が変化していて、赤方変移を見ているような感覚でした。宇宙膨張説が正しいのだということを確認しつつ、あたしは夢で見たその光を追いかけてしまいました。すると、たどりついた場所は学校であり、そこであたしは困惑してしまったのです。

だって、変な衝撃波を感じたのだから。

なのに上を見上げると満点の星空。その中でうごめくUFOにも似た存在。否、似た存在なんてものではなく、あれはまぎれもなくUFOでした。なぜならそれは、物理的に不可能な速度で星の咲いた空を旋回し、あたしに精神に語りかけてきたのです。

「あなたの魂を救済してあげるわ。——でもその代償として、あなたのあずかり知らぬところである行動を起こしますね。私が地球でやってみたいことをするために」

あたしはこの言葉をきいた瞬間、すーっと見えない何か自分の体の中に取り込まれていったのをここで確信しました。あーこれは宇宙人に肉体を乗っ取られるんだ。そこでふと後悔。なんであたしはこの世の中の不可思議な存在から目を逸らし続けていたんだろう。そしてはふとのナルのことが脳裏を掠め、あのほかの言っていたことが正しかったんだと思いました。

そうだ、小早川はきつと宇宙人に体に乗っ取られ、だからこうして――

「――ハルくん。あたし、恥ずかしいから、あーんはいっかいだけねっ」

しかし、そんなありえないショートショートを考えてしまったのがまことに情けなく、俺はコンクリートに頭を打ち付けたくなくなるぐらいにぶっ飛んでいたことを思い知らさせた。それは小早川が放り込んでくれたハウレンソウ入りの玉子焼きが、口の中でとろけていったからである。

このようにして、しばらくの間はユカリが作った弁当に舌鼓を打ちつつ春のこもれびのような視線を投げかけてくる彼女に、

「こはんつぶ……ついているよー。ぱくっ」とか「はい、緑茶も飲んでね」とか言われて、日本人の幸せを存分に感じながら昼食を食べ終えた。

よく見るとその右手小指の目立たない場所には、絆創膏が貼ってあった。

もしかしたら普段しない料理をやってみたのだから怪我をしたのかもしれない。

そうして、最後にユカリは最高の笑顔を浮かべてこう言った。

「――あ、あたしも、文芸部でいっしょにほんを読みたいな――」

もう脳天を痺れさせるような発言だった。

といっても別にユカリが好きなわけではないんだからな！

これはな、史上最大の奇跡を目撃した嬉しさ、ということだ。

だがその可愛い言葉聞いた瞬間は、ひらりひらりと優美な
ターンを繰り返す蝶が舞っているかのような小早川 紫の可愛い
い幻影を見ていたのかもしれないと思ってしまった。そう、つまり
は茫然自失寸前だったんだな、この俺は。

『おもしろきこともなき世をおもしろく、すみなしものはこころなりけり』。

これは明治維新の少し前、身分に囚^よらない志願兵による奇兵隊を結成した高杉晋作の辞世の句である。大まかに括れば、世の中とは心がけしだいで人生ハッピーになれるということらしい。

そして、これこそが俺のモットーなのだ。

何度も言うが、宇宙人のような別惑星の知的生命体の存在も信じていたいと思い、この世に憚^{はばか}るファンタジーとやらが存在しているなら全てに首を突っ込みたいとも考え、さらに世の中の不思議な事は探索したいし、奇譚^{きたん}な話があればのめり込んでしまうほどに魅了されてしまうとも言った所以^{ゆえん}である。

つまりは、そういうことを考えていたほうが人生面白いに決まっているということ。

これは例えばの話だが、宇宙には物質が密着して火の玉のように熱くてその概念がビックバンと呼ばれていて、このとき飛び交っていた素粒子が水素やらヘリウムやらという原子が発生したという一般常識が存在している。そのことの原因となったのは宇宙が絶え間なく膨張しているからであるのだが、そんなお堅い話よりかはどこかの特撮アニメかなんかみたい宇宙人が秘めたパワーを発揮して宇宙空間を拡大してしまったとか言う話のほうが興味が湧いてしまうものなんだよ。

だからこそ、こういうふうに楽しいことを考えるのもありんじゃないかと思うわけだ。

しかし。

けっして触れてはいけないラインってものが存在することも俺は知っている。

それは神に関することであつたり、戦争関連のことであつたりと、禁忌とかタブーしてもんは下手に踏み込んではいけないもの。あの触らぬ神にたたりなしと言われそうな現象のことである。

まあそこらへんの曖昧な考えが俺自身の中途半端であつて、面白いことを求めてやまないのにピエロに徹しきれないところなんだろう。といつても危ないところに首を突っ込んでまで楽しむ死にたがりの道化師ではないといえばいいか。

おつとつと。結局は何が言いたいかというと、その触れてはいけないことというのは今日の昼休み時のユカリの变化であつて、もう史上最大級におかしかったことだ。

あの幸福の境地とも言える屋上での出来事から一時間後、まるで惚れ薬でも飲まされてその効き目が切れちまったんだつてぐらいにいつものつんつんとした彼女に戻つた。

あれは、あの時限定で魔女の呪縛とか六星仙術でもかけられたのだろうかつてぐらい。それこそ天と地がひっくり変えてしまうほどにおかしかった。

だが俺には、これに対して心辺りがないとはいえない。

それはユカリが一週間も前から変わってしまったとも言えるからだ。あの摩訶不思議な夢を語ってから沈黙の潜伏期間を経て、そして今日の異常ともとれる行動から元通り自由奔放な小早川に戻つたことだ。

あー、何を意味しているのか全くわからん。

またこうなったらどうするんだよ俺。

どうこの謎に立ち向かえばいいんだ？

でも、あの時のユカリなら願つたりかなつたりじゃないか？

「ハルくう——ん!!」

そんなことをつらつらとベツトで寝転びながら考えていたら、大

きな声と階段を登ってくる音が聞こえてきた。そして勢いよくドアを開け放つ音まで予想通りだ。パターンと。

「ハルくんハルくん、しゅくだい教えて——っ！」

快活な声とともに俺の部屋に入ってきたのはやはり妹か。宿題か。それにしても……。

この我が妹はだいぶ昔（といっても五年ぐらい前だが）に、俺の母さんがお兄ちゃんって呼ぶことを禁止しやがってからハル君と呼ぶようになった。母さん曰く、お兄ちゃんと呼ぶ値しないらしいとさ。そんなの知ったこっちゃねえーよな。

こちとて母さんのことをママン、お母上、聖なるマリア様、母なる大地の源よ、なんて呼ぶのは、嫌いな奴に狂おしいぐらいの愛を世界の中心で叫ぶのと同じ義だ。いやそれ以上だ。

ってまあ、そんなふうには呼ばせる母親なんてこの世に存在しないから、普通に母さんって呼んでいる、というわけでもなかった。はつきり言って今の時期ってやつは、母親のことをなんて呼ぶかに困惑する時期だ。おふくろではしつくりこないし、かあさんじゃこっぱずかしい感じがする。微妙に繊細な時期ってやつか？

ていうか、そんなことはかかさまトークは置いといて、俺は思うことがある。

それは妹を持つ身として一度でいいから、「おにいちゃん」なんて『い』と小さい『や』の後をにょろって波線を引くぐらいに延ばして呼んで欲しいわけだ。あるいはちよつと舌足らず雰囲気『お』の文字が『ほ』に変換するぐらいな「ほ兄ちゃん」でもいい。それとも『ち』と小さい『や』と『ん』を排除して『い』の部分小さくして『おにい』でもいいな。

……………。

どうやら今考えたことの全ては、摩天楼よろしく三百階建ての高層マンションの屋上ぐらいからダストシュートしなければならぬ

ほどのくっだらな妄想らしいな。いやそれだけでは物足りない。ペリカン便にでも乗って太平洋のど真ん中でポイと捨てちみたいぐらいか。なんだこの喻え？

「ハルくんハルくん、助けてえー。手伝ってー。ハルくんならなんでもできる」

「おい……」

なあ、アキよ。俺は超人ハルクじゃないぞ。

見てみる。俺の血管から浮き出ている血は情熱の赤だ。

あーダメだ、もうあれだぜ。

このどこまでも続いていきそうなアホの思考回路から乖離^{かいり}させるために、それに我が妹にも人生の訓示というものを与えてやるためにもナルシストの仮面をかぶらざるをえないな。だからしっかりと決めこんで言ってるよ。

「いいかアキ、大事なのは結果より過程なんだぜ」

「へっ?!」

現実世界とやらは宿題ばかりを提示して、答えはそう簡単には教えてくれない。だがさ、そこが人生の面白いところなんだぜ、ってことを兄貴として伝えなければいけないからな。

それに、これは自分にも言い聞かせてるんだ。

最近の小早川や謎の新原、彼女たちは俺に宿題を与えているのかもしれない。だったらその結果——要するに帰結する原因を求める今の過程の方が大事なんじゃないかー？

だが、そうやってまた思考の海に溺れている間に、ちょんまげヘアーの我が妹は「あちゃー」と眩き頭を抱えてしまったわけで、俺

はもうこれ以上余計な事は考えずに目の前の宿題に没頭すること
に決めこんだ。

でもよ、全教科持ってくることはないだろー。

「だってわかんないんだもの」

そのパイナップルヘアーを切っちゃまって、ザンギリ頭にして叩い
てみればなにかわかるかもしれないぞー。我が妹よ。

昨日とは打って変わって、太陽がぎらぎらとしている一日がやってきた。

やはりガリレオとは物凄く偉大な人物で、地球が宇宙の中心にあると唱えた天動説を真っ向から疑った業績は計り知れないものだ。地球が成り立っているのは全くもって太陽のおかげであるというのに、どうして地球を中心にしてその他の衛星が周期活動を繰り返していると思ったのだろうか。

結局、人間だれしも自分が中心であると考えるように、地球が天体の中心だと考えたということだろう。

まあ話を戻すと、この異常気象的なバカ暑い日にはおかしいことが起こりそうな気配に満ちていて安穩とした空気とはいえなかったはずであったのだ、ということ。

それなのに俺が身を焦がしてまで心配した昨日の一連の出来事は、まったくもって杞憂に終わったのだった。そしてこのことは喜ばしいことだったのかとひねもす考え込んでしまったのは仕方がない所業であろう。どうせ俺がいくらうんうんと思案に暮れていようが、それでも地球は関係なく回っている。そんなちっぽけな考え事ぐらいどーでもいいのかもしれない。

というわけで、四月十二日水曜日。今日のあいつは朝挨拶を交わしてすぐに俺が知っている小早川ユカリだということに気がついた。気に食わなければすぐ文句を言い放ったり、人が寝ているところで机に蹴りをいれてきたり、俺が少しおかしいな仕草をしたら『ナルチュー男』と言い放ったり、目を合いそうになるとそっぽまで向いてしまったりする彼女だった。

それは入学式以来に見た小早川ユカリの姿だったし、あの時の少しはにかむようなしぐさを見せながらハウレンソウ入り玉子焼きを放り込んでくれたのは、黄泉の国にでも行って見てはいけない幻影

を目撃しちまったようなもんだっただろう。

だがな、小早川よ。

俺はそのおかげで昨日は悶々と過ごしちゃったわけで、それはもうあらぬ妄想（性的な意味ではないから）を繰り返し、良く見れば（いや、よく見なくとも）ユカリはスタイルもつらも良い。そして昨日は……なんていうか、ほのかに俺想いの女の子みたいな感じだった。もう、理想的な幼馴染像があったとしたら審査員のお偉さんがそろって十点を挙げるような完璧さだった。

しかし、あれは悪い夢であって、一時の気の迷いであっただのだからすっかりと正常（迷惑だが）に戻った小早川の事はほっておかなければならない。

なぜならば、ゴホンッ。

今のこの時点に置いて、新原 沙希がそれ以上に気がかりな存在に成り上がっちゃったからである。

そう、これまでの彼女の印象だと、誰が話しかけても興味を示さず放課後になると忽然と消えてしまうものだけだった。あんなことを言われた俺だって当然のごとく二、三度話しかけた。けど「はい」とか「いいえ」すら言わない後ろの席のお嬢さんは何を企んでいるのかまるで分かりはしなかった。

でも、それでも俺はいろいろと問うてみたいとも思ってしまうのだ。

例えば、あの時に言った言葉を額縁通りの意味で捉えると俺の命に危険があるということなのか？ あるいは俺と同じような遊戯的雰囲気を感じたかっただけの戯言か？ それとももっとう……ダヴィンチコード的な暗号の比喩なのか？

もうこんなことは何度自分の心の中で反芻したかは分からん。

そしてだ。

今日ここまで彼女に執着するのは、昼休みに廊下を歩いていたならクラスの女子が新原のことについて会話をしていたからである。

『ねえ、あたしさあゝ、昨日大変なもの見ちゃったんだけど』

『昨日?!　なゝに、好きな芸能人の密会現場でも見ちゃったの』

『違うよ。それも覗いてみたいけどおーもつと大変なもの見ちゃった』

『で?』

『それがね、超常現象みたいなのを見ちゃったのよ』

『えっ?』

それからその女の子は語り始めた。私が中休みにトイレに行こうとしていたら、すれ違った新原 紗希さんが何やらぶつぶつと唱えていたのを聞いて後を付けてみたという話だった。そして彼女がある角を曲がった瞬間に、まるでテレポーテーションを使ったかのようになくなってしまったらしい。

そんなことを小耳にはさんでしまった俺は腰を据えて会話をしやろうときつと馬が合わないであろう小早川の、

「あたし、ハルくんと一緒に本を読みたいな」発言をコペルニクス的転回ばりな鮮やかさで、

「なに言っているのよー、バカナル!　あたしにはサッカー部があるから入るわけないでしょー」

なんて、斎藤がしたり顔で言っていたサッカー部に入らないらしいぜー発言のどんでん返しにざまーみると感じつつも、そう言った彼女が姿を消したのを見計らってから、新原と放課後にじっくり話

し合おうなんて考えていたのだった。

だけど、やっぱり彼女はいなくなっていたんだよ。

付くくわえれば、授業終了後にこれまで新原の姿を見かけたことがないし、今日なんかひと際注意を払っていたんだが後ろを振り向いたら既にいなかった。

あー、どうすればいいのかももうお手上げだね。

そうだな。この現象から推測するに、新原 沙希という人物は放課後になると姿、形が確認できない未確認生物になっちまうんだろ。それかシンデレラみたいに魔法が解けてその辺に置いてある花瓶になっちまうとかだな。

「おーい、成瀬君」

「おー？」

この放課後の時間、相変わらず教室周辺をぶらぶらとしていた輩に声を掛けてくれたのは、マクドナルドばりにさわやかなスマイルを解き放つ比嘉^{ひが}だった。

彼とは高校に入ってからとの関係であり、この一週間でやっと席が隣同士ぐらいな間柄になれたってところか。ぶしつけだが彼の先祖は沖縄だろう。

「成瀬君、いきなりだけど大事なことを忘れてない？」

「あー、なんの話だ？」

「例えばさ、約束とかだよ」

「約束？」

「そう」

「なんかあったか？」

「忘れたの？」

比嘉は怪訝そうな顔つきをする。

「なんだよ」

「じゃあこの言葉を贈らないとな」

すると比嘉は、まるで俺の生き写しではないかというぐらいな決めポーズをしてこう言った。

「――約束を守る最上の方法は約束をしないことだぜ――」

「それ、ボナパルト・ナポレオン……」

「そう、先日君に聞かされた時の真似だよ」

あー、それを言われると俺の面目丸つぶれだ。まるで形無しのギザやろーじやーないか。まあ、まったくもって否定はできない。

「一度だけやってみたかったんだよね。で、僕が言いたいことなんだけど、角川先生が呼んでたってこと。なんか文芸室の鍵がどうたらこうたらとか言ってたよ」

えっ。あーあー、そうだった。

角川の先公と約束をしたんだ。

まったく、こんなにもうきうきしない約束はない。

だが、文芸室を見学するために鍵を渡してくれるという用事を忘れちまうのはまずいだろう。

「ありがとな、危うくトンズラしちまうところだった」

「そうだね」

「おー。だから今から急いでいくわ。なぜなら勇気ある人間つーのは皆約束を守る人間であるからな」

ナルシストの手本を見せてやろうと思い、俺は右手の甲で片目を隠して体を斜めに傾けながら言っちゃった。

「はいはい、素晴らしいナルシストをどうもー、それよりも早く行ったほうがいいよー」

そう言った比嘉は、サトウキビが似合いそうな笑顔を残して颯爽と去っていた。

でも、ありがとさん。

さて。

あの髪密度の少ない頭から光がさまざまな方向に屈折しあつていて閃光がほとばしり、もはや光頭無形こうとうむけいとなつていたことをスルーするべきではない時がやってきたのだ。むしろ、コケにしてやらなくてはいけない。

それは先ほど職員室に行った時に暗澹あんたんたる事実が発覚してしまつたわけであつて、我が担任の角川の名前は貞行さだゆきといい、しかも自分よりも二十五歳も若くクリスチャン系短大を卒業したての幼妻と手を取り合い中睦まじく暮らしているからだ。くそ、マジで自慢してやがつた。ホントいらんパーソナル情報を入手してしまつたぜ！

ならば、俺は貴様が洗礼を受けた時に与えられるクリスチャンネームでも特別に考えてやるよ。そして、その名は照光てるみつだ。どうだ、ぴったしじゃないか。さあ、感謝してくれ。もしくはギャンブルに溺れ破産して、離縁状と賠償金の証書と死の十字架でも突きつけられろ。そしてこれからは四畳半の間でフロム・ハンド・トゥ・マウスみたいなうらぶれた生活送ってくれ。

と、まあ……憎々しい彼から奪い去るようにして文芸室の鍵をブン取った後、荒唐無稽な自分の腐った思考回路を誇りながらも、それでいて新原に対する懸案事項はまたもや先延ばしにして文芸室へと向かつていた。

話の長い角川の先公曰く、この学校の規則や生徒会の所存によつて五人の部員がいない団体は部として承認されないらしい。つまりは五人未満の場合だと同好会扱いになるようだ。

しかし、よく確認すれば新人生オリエンテーション冊子にも生徒手帳にも同様の事が記してあつたのだから聞いちゃいけない。また先ほどののろけ話になつたらとんだ災難である。だから、これっぽちも後ろ髪をひかれない想いで逃げ出してきたのだつた。

そして、幾分か落ち着いた俺は少しそのことについて考えてみる。
やはり、最低限五人が揃わなければ部として成り立たないのは当然だな、と。

結局のところ最低限居場所さえ確保できれば同好会でも構わない。
部員一人だったとしても場所があれば御の字だろう。

それに斎藤があの時語ってくれた文芸室の噂だと、そこには窓辺に佇む病弱で薄幸の美少女がいて、そんな古いハリウッド映画にでもでてきそうな深窓の令嬢の微笑みを見てしまった瞬間に、メデイーサの瞳の呪いにでも掛けられたように奈落の底の異世界に連れて行かれちまうらしい。

確か魔眼に射すくめられそうになった時は、男性器を出せばその場をやり過ごせるという話を聞いたことがあるが、ん？ それは女性器だったか？

よく考えればそういう神秘的で聖なるご加護的な力は女性の専売特許じゃないか。ってまったく、何を考えているんだろうな俺は。まあそれであっても、一人で畏怖の対象となりそうな美少女を待っているのも悪くないもんだ。もちろん超自然的に社会の窓が、あるいは何らかの物理的反動でズボンのチャックが見事にご開帳していたのならばそれをやっても構わないと、考えないまでもない、ってそんなわけではない（何重否定だ？）。

「ふう……」

そろそろ程度の低いこの思考は切り捨て御免にするか。

で、斎藤の話に舞い戻るが、やはりこういう話というのは眉唾よりもさらに程度が低い都市伝説的な話なのは分かってはいる。心の片隅ではずっとそう思っているんだ。きっと学校の階段の階数が昼と夜で違ったとか、理科室の人体模型が動くとか、誰もいない音楽室でポロンとピアノの音がするとかと同じような類の話だろう。よく言われる七不思議みたいな。

だけど、万が一そこに美少女がいて俺に選択肢があったならば、異世界には行ってみたいと願ってもやまないんだけどさ。

「着いたか」

こう十把一絡じっぱひとからげな思いごとをしていれば、いつのまにか目的地にたどり着いていた。

若干プレートは傾いていたがそこにはしっかり文芸室と記してあった。

——しかし、あれだな。

この教室は三年が卒業して以来使われていないという割には、グラウンドなどが一望できそうな二階の良い場所ではないか。しかも隣の教室は女子更衣室。

あんなことやこんなことや、しまいには壁に穴——（自主規制）
それとも、キャキャキャとした嬌声なんか聞こえて——（自主規制）

いかんいかん。冗談が過ぎた。

気を取り直した俺は、秘密基地に探検でもするようにはやる気持ちを抑えてポケットから鍵を取り出す。そしてこの扉を開けた瞬間に運命的な出会いを果たすみたいな、あなたとわたしは二年ぶりの邂逅でしただけの女の子でもいればなんてちらっと思ひ、瞬時に鍵が開いてねえのにこんなアホな妄想をしている自分を猛省したくもなりながらガチャガチャッと開けた。

——キィー

——ギチギチィー

今にもくたばりそうな年老いた百舌モズの最後の嘶いななきか、すっごいおんぼろなチャリのブレーキみたいな音を出してドアが唸うなった。

スムーズにドアの開閉をするためにはワックスかなんかをかけな

くてはならないと、俺は否応なしにも思った。

中を見渡す。

本の匂いと木の匂い、それにあたたかな日差しがその場所を照らし出していた。どうやら採光は抜群である。

鄙^{ひな}びた感じのする独特な雰囲気がとても良い。それで充分だ。

俺は部屋の中央に行きぐると辺りを見回した。

あるのはボロイ机と椅子。それと本棚には、大きさもジャンルもてんでばらばらであろう堆^{うずたか}く積み上げられた山があった。その無秩序と化している本棚の端っこには折りたたんだ段ボールが積み重なっている。しきりのようなダンボールを掻き分け、もっと奥の方を覗きこんでみるとさりげなくガスコンロなんかが置いてあった。ガスが繋いであるのか。

窓の方にも行ってみた。サッシなんかを指でなぞったらホコリがついちまいそうな汚れがあった。

そうだな。まずはあるべきところにあるものを置いて、塵一つ落ちてないぐらいにしっかりと掃除でもするか。こういう部屋は丹念に雑巾がけをするにかぎるな。そして、ここにコーヒーのドリッパ——いや、少し趣向を凝らして、それにベルヌーイの定理にも敬意を表してサイフォンでも持ってくるか。雰囲気作りに一役買うだろう。

だいたい上手いコーヒーには砂糖なんて必要ない。ついでにいえば塩も酢も醤油も味噌もいらないんだ。もちろん、コーヒーの調味料に唐辛子なんてかけたら俺はその場で卒倒してしまうだろう（なぜこのような事を言うのかというと新原が唐辛子を食べていたからである）。

と、そのように俺はいたって普段どおりの心拍数を刻みながら、でも素面^{しふめん}であるとはいかんといいがたい感じでにやにやと考えていれば、一冊の本が視界に入ったのだ。

科学が信仰の対象となった十九世紀ぐらいの東欧の片田舎城に置いてありそうな古くて分厚い本。なぜだか目に入ってしまった。ま

るでその本に吸い寄せられたかのようにどうしてもページをめくって見なければいけないような衝動に駆られてしまう。

気になって一ページ目を開いてみた。

続けて二ページ目、三ページ目。

続けて四ページ目が……開かない。

「なんだ、これ」

俺は思わず唸ってしまう。

とりあえず三ページまでの文章がこれだ。

——ヴォネガットの創作講座——

一、赤の他人に時間を使わせた上で、その時間はむだではなかったと思わせること。

二、男女いずれの読者も応援できるキャラクターを、すくなくともひとりには登場させること。

三、たとえコップ一杯の水でもいいから、どのキャラクターにもなにかをほしがらせること。

四、どのセンテンスにもふたつの役目のどちらかをさせること——登場人物を説明するか、アクションを前に進めるか。

五、なるべく結末近くから話をはじめること。

六、サディストになること。どれほど自作の主人公が善良な好人物であっても、その身の上におそろしい出来事をふりかからせる——自分がなにからできているかを読者にさとらせるために。

七、ただのひとりの読者を喜ばせるように書くこと。つまり、窓をあけはなって世界を愛したりすれば、あなたの物語は肺炎に罹ってしまう。

八、なるべく早く、なるべく多くの情報を読者に与えること。サスペンスなどくそくらえ。なにが起きているか、なぜ、どこで起きているかについて、読者が完全な理解を持つ必要がある。たとえばゴキブリに最後のなんページかをかじられてしまっても、自分でその物語をしめくくれるように。

ヴォネガットの創作理論……。なんかこいつはすごい掘り出し物のような気がした。

そう考え込んだ俺は、その本を大層な動作で小脇に抱えながら窓の景色を覗き込んでみた。

するとそこから見降ろした場所は、本を読むのにうってつけなこもれびゾーンが眼下に広がっていたのであった。

1-9 (後書き)

『ユカリちゃんのゆううつ☆』

この物語は本編とは一切関係がございません。作者の気が向くままに始めたヒロイン応援プランです。

そしてここでは、あのユカリちゃん（若干幼め）が自宅の鏡の精霊ネコミーととりとめのない会話をしているだけです。

ジャンル？ 不条理なパロディーコメディーです……。どこかでみたことあるようなラノベのタイトルでありましても気にしないで頂ければ幸いです。

第一話 『オレンジと香辛料』

「ねえ……」

（ごくりっ……。）

「――ベルヘルミナ！」

（なっ、名前が変わってる……！！）

「わたし……ゆううつなの」

「どうしたんだい。ユカリちゃん」

「あのね、あたしは作者が勝手にタイトルを『小早川 ユカリの憂

鬱』から『幼馴染の付き合い方』に変えたことはほん――――
――――の少しの憂鬱さも感じないし、本編でのあたしの性格にブレがありすぎることも別に問題ないの。でもね……」

「でも？」

「お弁当なんか作れないキャラであるはずのあたしが、がんばって作ったお弁当を持っていたてもハル君が食べたがらないの」

（てめえーの弁当は死んでも食べねえーだろ）

「ほらっ、それは……お腹がいっぱいじゃないか？」

「ううー……、だってねだってね、毎日持っていたてもダメなんだよ？ 折角ね、媚薬の粉を集めてホウレンソウのたまご焼きに入れるのに食べてくれなきゃ好きになってくれない……」

（だ、だから紫色のたまご焼きができるのか……）

「うむ、紫だけに……」

「ふえーん。ベルヘルミーなんかいい方法教えてえよー」

（たっ、短縮しやがった）

「なんかないの……ベルヘル」

「そうだな、ホウレンソウのたまごやきを止めて果物にしたらどうだ？」

「果物？」

「甘い果実の誘惑だよ！」

「え、あ、うん！ ネコミーありがと！」

「そこでだ。例えばオレンジなんかどうだ？」

「オーレンジ？」

「ユカリちゃんは、オレンジの素晴らしさを知らないのか？」

「……」

「オレンジはな、カリフォルニアの太陽の恵みを浴びた……ん？
どうしたんだ？」

「わっ……」

「わ？」

「わ、わっちはりんごの方が好きじゃ……！！」

（ちえっ、憑依がはじまったか……あーめんどくせえ）

「わしは全力でオレンジを推薦しているんだぞ」

「む？ りんごりんごりんごりんごじゃー！ ぬしよ、今すぐ
あのわっちを誘惑する悪魔の身を買ってくるのじゃ」

「ユカリちゃん。早く憑依から戻ってきたら、わしの世界においての先祖代々伝わる『ホ』の字のまじないを教えてしんぜるが……」

「ほんとー？」

（なんてあつかいやすい……）

「そうだ。いいかぁー。好きな人の顔にな、ありったけの香辛料をふりかけるんだよ。するとあら不思議！　もうユカリちゃんの魅力にメロメロのメロンパンさ！」

「うん！　うん！　ありがとーネコミー！　あつ、あたしがんばつてみるね！」

「おう！」

（さてさて……、おもしろくなりそうだな……だけど大丈夫だろうか見切り発車の作者は……）

次回の『ユカリちゃんのゆううつ☆』は、
『今日だけ』『こ』のつく自由文』です！　ではっ！

2-1 錯綜する春のこもれば

入学式からはもう二週間が経ち四月の中旬になっていた。

桜はものの見事に散ってしまっただが、春爛漫で新緑若葉が溢れんばかりの勢いであることは変わらない。そして、その若葉の柔らかな色合いはたなびくような斜光を浴びて透明感のある緑を一層引き立たせていた。それは春の陽気に誘われた山の木々や街の緑が本格的に芽生えたかのようにも思わせるもので、こんな若葉の想いが人々の心にも新しい何かを芽生えさせているのかもしれない。

——なーんてな。

俺が少々エラそうに季節の移り変わりを二流（自分で三流と言っちゃまうのはそこはかとなく許せなかった）ポエマー風に語ろうともそれに呼応してくれる人はいないね。だいたい取るに足らない一介の高校生が朝っぱらからそんなことをのたまっていたら気味が悪い。まあこうやってせいぜい胸の内に感じるしかないんだな、残念ながら。

「なあ成瀬ー。どうだ？ 文芸部は誰か入ってきたのか？」

どうやら斎藤が休み時間の合間を縫って話しかけてきたようだった。

「んー」

最近の俺はこのコメディー斎藤と隣の席のさわやか比嘉とでつるんでいて、こう休憩時間となればしょっちゅう三人寄れば文殊の知恵にもとうてい及ばない普通の会話をするようになった。勉強がどうだの世間がどうだの、ドラマ、スポーツがどうだったとかとりとめもないことを話すんだが良いことには変わらない。

しかし、世の中ってーのはそう都合よくできているわけではない。人生とは微積分のグラフのように波打っていて良いこともあれば悪いことも交互に起こるものだ。

つまりは、いまだに懸案事項が続いていたことである。

まず、あれからの小早川は文芸部の下見に行った次の日からまた沈黙の羊になってしまった。そして休みを挟んでその四日後に天使のユカリがやってきた。ということはその状況が月、火と二日連続で続いているのだ。

例えば昨日の彼女の様子はこうだった。

朝挨拶を交わすときはその相手には興味があるけど話しかけられない的な微笑みを浮かべて、休み時間は昨日の一日を綴ったようなラブレター？（というよりは日記風）を渡してきて、昼休みは奥ゆかしくも恥らいながら成瀬 春彦という人物のためにお弁当を作ってくれた。その部分だけをとびつきりに誇張させて言わせてもらえば、舞踏会にでも行くかのような足取りで誰もいない屋上へと俺を優しく連れだし、これから口移しでも始めるんではないかというぐらいの勢いで物凄く照れてちよびっとだけ食べさせてくれる感じであった。

あの「ナルのバカッ！」とか「ナルチュー男」とか言いそうな雰囲気は一切影をひそめてしまったのだ。

——なあ、ここは喜ぶべきじゃねーのか？

——あんなにも素直でおしとやかな幼馴染をのぞんでいたんだぜ？

——ましてや俺をほのかに想ってくれているような感じの幼馴染だぞ？

——ただ俺は傲慢ごうまんにもこう思ってしまう。

なぜだかあまり喜べないと。

それはひとえに小早川の中に錯綜さくそうしている感情が多すぎることであった。彼女はこれまでに三種類の人格を露呈している、というよ

りも三つの自我が混在しているといえはいいのだろうか。

そう、一つ目はわがままな小早川、二つ目は沈黙のユカリ、三つ目は天使なユカリ姫。

それもふざけているとか、そういう類たぐいのもんじゃない。あの真剣な様子を見ていたらなんだか胸が苦しくなっちまうぐらいだ。

それに、妙に心地よかったかもしれないあの罵声を浴びなくなっちまったのはなんと落ち着かんもんだな。ユカリ。

この部分は失ってみて初めてわかるなんとかってやつか？

「どうした？ 成瀬ー。文芸部に誰も入ってくれる人がいなくて拗ねているのか？」

うわの空だった俺に向かってさらに話しかけてきた齋藤。

そういえば俺が始めて文芸部に足を踏み入れた日に、なぜか気になってしまったヴォネガットの創作理論とかいう本。あれは摩訶不思議なものであった。その本をよく見れば題名が記されてなく、三ページ以降は白紙であったのだ。

そして——その次の日からは行方不明になってしまった。不思議なことだが誰かの私物だったのだろう。それしかあの本が無くなってしまふ理由が思いつかないのだ。

「いいや。そんなわけはねえけどな」

気づけば俺は、齋藤の問いかけを適当にあしらっていた。

「まあまあ、そう強がるなって。誰もいないのは心細くて寂しいだろ。だからこの際、おまえも天文部に入るか？ かわいいー女の子がいるんだぜ」

齋藤があの時思った事は間違いではなかったのか。天文部に入る

理由。

「それでな、聞いてくれよ。この前なんか星をロマンチックに勉強しながら、その子が『ゆうじくんあたしの顔にも星型のホクロがあるんだー』なんて笑顔でいうんだよ。俺のこと好きなんじゃねーかその子は、と思ってしまいうけさ」

斎藤は愉快にそう言うが、俺は思う。

なんていう妄想だ。おそろく。

——いや、それよりもおまえの名が“ゆうじ”だったとはな。知っていたようで知らなかったようで、まあ結局はどっちでもいいなんてあつけない結論に落ち着きそうなので、形式だけでも謝罪という事をしてやろう。

そう、こうして奥歯に物が挟まったような口ぶりで、それでいてこれからシチュウの具にでもされちまいそうな悲壮感を漂わせて、

「す、すまなかった」

「はっ？」

「なんて……」

しかし斎藤は、何をどうはかり間違って勘違いしたのか、

「あーそういうことか成瀬……。いいよ、謝ることはないぜ。俺の幸せそうでエンジョイな部活ぶりを聞いちゃったら羨ましくなるのは当然だろ。それに世の中生きてりゃー多少見栄や意地も張りたくなる時があるからな。それにそれに人間一人では生きていけないって事は充分理解しているからな」

なにいつてんだか。まあこれでいい。

それは世の中知らなくていいことの方が多いからだ。そのうち薬学がありえないほど進歩して人の心が読めるような薬でもできちまつたらもう終わりだぜ。

ん？ 前にもこんなことがあった気がしないでもないが。

「だからな、何も一人でいることはないんだぜ」

どうだと言わんばかりの露骨な感情表現をしてくる齋藤。

その言い草は酔狂しているようだった、というよりか単にノー天気なだけだろう。

「あのな、齋藤、そうは言うけれど一人で独占できる城というのもなかなか居心地がいいもんだぜ」

まあ半分は本音なんだがな。半分は。

文芸室には入部希望者はいないものの、あそこの空間はなかなか心地よいもんだ。

「そうかあー？ 語らう相手がいたほうがいいに決まってらあー。今度、学校に居残って星を観測するんだよ。誰か知りあいでも連れてくるのがありらしいから成瀬、一緒に来いよ。小早川と仲直りもしたことだし丁度いい機会だろ」

「ん。そうか？」

あー、齋藤も齋藤なりに気を使ってんだな。

小早川とは中学の時からいつも一緒にいたからそんな仲に見えたのだろう。

それがここ最近、一切会話をしなくなったり急に従順になったり

するユカリを見てこう勘違いしているんだ、きっと。

だが、実際はどういう関係だったのだろうか。ユカリがどう思っているかは知らないけど、俺達はそれなりに上手くやっていた幼馴染だよな。

俺はあいつのわがままにさまざまな対処を施しながら付き合ってきた。そこまで家が近いというわけではないが、小学の時も中学の時も一緒に帰っていたりもしていた。

『女の子なんだから危ない目にあったら大変でしょ！』

『大丈夫だ、お前の間接技のレパートリーを駆使すれば——いてーておい』

『さいてえ——！ だいたいね、ナルは男の子のくせに女の子一人も守れないとかどういふことなの？ いつもありえない空想ばかりにかまけているからよ！』

『そんなこと関係ないだろ。だいたいおまえに關していえば誰が襲ってこようと一生大丈夫だ、っていつてーよ、やめろ、やめてくれ——それ』てな感じで。

帰りにはユカリの家で半ば強引に勉強を教えさせられたり、夕暮れの公園で馬鹿話に終始したこともあった。まあ、その雰囲気は断じてデートじゃないことはもちろん宣誓しておくが。

「しっかしなー、成瀬ーおかしいよなー。俺は確かに聞いたんだけどよー。あの時の小早川は確かにサッカーを止めて文芸部に入ってるさ。ほら、学級委員長の金井っているじゃん。あのめがねを掛けてみつあみの女の子。あーあれこそ文学少女の鑑ーなんて感じの子。彼女だってそう言ったんだから間違いないはずなんだよ」

ならばその話、俺はな本人から直接聞いた。ただし、あの時は惚れ薬を飲まされているときだったがな。

ん？

——おい、それなら成瀬 春彦よ。今はどうなんだ？ 小早川の惚れ薬状態が続いているこの二日間どうなっているんだ？ 一週間前は一時間で効果が切れたのになぜ今は二日間も続いているんだ。

俺はこの時、もう一人の冷静な自分が冷静でない自分に問いかけていた。

だけど、だけど。分からんよ。

どう考えたって納得いく答えは出てこない。

「そう思うだろー？」

それに斎藤。おまえは何度同じことを言ったら気が済むんだ。

とりあえず分かっていることはサッカー部で元気にやっている。

しかも仮入部の時点で即FWのレギュラー候補らしい。それでいいじゃないか。問題なしだ。

待てよ？

あの時に言った本が読みたいな発言を今回は聞いていないこと。

ここに前までの小早川らしさがあつたじゃないか。

「斎藤君、その話は耳にタコができるほど聞いたよ」

すると隣の席の比嘉が会話に割り込んできた。おそらく彼も同じことを思っていたんだろう。

「そうかあゝ？ そこまで俺しつこく話した？ すまんな」

ああ、話したぜ。

しかし申し訳そうな顔していた斎藤は、あんなに選挙前は公約掲げていたのに当選すると全てを投げちまう議員みたいな素晴らしい手のひら返しを見せやがってきた。

「まあ、そんなことはこれっぽっちのかけらも思っていないけどな。アハハハハッ」

おまえ、そんなに手のひらをひっくり返していたらユカリの立派な関節技になっちまう。

「でさー、そういうえば比嘉はどうだ？ 天文観測会これそうか？」

「いつ？ 斎藤君」

「来週の土曜日だよ」

「あーその日？ ダメだよ。僕だって今のクラブで忙しいからね」

そうだ。このさわやかサトウキビ少年はこの学校で一、二を争う変なクラブに仮入部していることを忘れてはいけない。

一つは弓道部。

しかし、今やっていることは弓が放たれる音を研究しているらしい。

詳細を聞いたところによれば、何種類かの共鳴する音を区別して正しい音を見極めたり、音の周波数などを調べたりしているという。これをムー大陸の発見に匹敵する謎といわずになんと呼べばいいのだろうか、なんていいすぎだが。

そして、前述したとおり比嘉の入っている部活はもう一つあって、それは弁論部である。

最近は三角形の角度について生成される言葉の意味を議論の対象にしている、と。

なんだかこれを聞いていると『トライ！ アングル！』なんていう写真部のキャッチコピーであったり、『わたしたち、そのあなたたちのトライアングルを直します！』みたいな三角関係改善計画を促すカウンセラー部みたいのがあったり、とそんな馬鹿な事が思い浮かぶがな、俺の場合は。

ただ、弁論部の皆様方は三角形の角度について生成される言葉の意味を、どこぞかのテレビ番組みたいにすちゃっかめっちゃか白熱な議論を展開するだけらしい。

なんだかなあ……。ゆえに、結局はここから導き出される結論は、

「つねづね思うけどこの学校の部活はおかしいよな」で、

「んー、それには別に異論はないなー」と比嘉の返答だった。

やはりここの学校はおかしな部活が多すぎるということ。

だいたい女子サッカー部だってそうだろう。なかなかお目にかかるものではない。

なのに文芸部はさ、俺以外一人もいないってどういうことなんだよ。

「で、成瀬君、文芸部のほうは本当に誰も入ってないのかい？」

少々涼しげな目線で文芸部の件に話題を戻してきた比嘉。

「ああ、しょうがないよな」

俺は肩をすくめて返答する。

「それならね、唐突なんだけど朗報だよ。僕が所属している弓道部の先輩で、文芸部——というよりは君に物凄い興味を示す人がいるんだ」

「えっ？　なんだ、それ？」

「近いうちにひょっこりと現れるかもしれないよ」

どうも腑に落ちないが、まあいいことじゃないか部員が増えるのは。

「ほー、よかったじゃん成瀬。ついでに後ろの席の新原も誘っちゃえばいいだろ。入学式の日はおまえら二人あやしかったからな。あつ、もう小早川とは上手くいったから余計なことを考えたらあきませんでえーてか？」

……………。

斎藤。おまえはその風貌といい、なんか西部劇にでもでてきそうな陽気なギャングそのものだぜ。

でもよ。これだけは言わせてくれ。

そもそも後ろの席に座っている新原 紗希は、初めて文芸室に足を踏み入れた次の日からだぞ。授業中でも休み時間でも見境なく本を読みはじめたのは。明らかにおかしいことだ。

それに彼女は相変わらず誰が話しかけても答えず、その人物にちらりと一瞥視線をくべるだけ。さらに放課後には存在がなくなるんだぞ。

それにな、お前は知らないのかもしれないが昼食時には唐辛子を食してもいるんだ。そう、俺はあれから一週間毎日のように一人でぼつねんと座っている新原の様子を、究極のチラリズム感覚で——例えるなら一夜一夜人見ごろ具合（ルート2である）の秒数で覗き

見て、偶然のように毎回唐辛子を目撃してしまうというわけなんだ。

「ハルくん、ちょっと」

すると小早川が話す機会を窺っていたかのように呼びだしてきた。二人は目線だけで小早川の方へと行くように促したので俺はそれに従う。戻る頃にはタイミング良くキンコカンコと予鈴がなっているだろうか、と思い学校の椅子特有のガラガラガラなんて大きな音を出して立ち上がっていたのだった。

あの時はこうやって休み時間が終わるはずだったんだ。

四月十八日火曜日、十時四十分の少し前。

あれから五時間が経ってもまだ腑に落ちない。

平凡でありきたりな。

なんてことはない。

そんなただの日常の一コマだった。

幼馴染の小早川 紫が、

無口系の新原 紗希が、

少し不思議だろうが許容範囲内の出来事であっててもまだそこまで問題はなかった。

しかし、いくら楽観的であんなにも面白いことを求めている俺でさえも――

人生とはオカルティクであって通り一辺倒の生き方では物足りないと考えていたことでさえも――

全てを覆すような出来事が起き、そんな悠長なことは言ってもらえないかもしれないということを実感したのだった。

放課後の部室。一人 佇^{たたず}みながら五時間ほど前のあれを述懐してみる。

折り重なった読みかけの本を見て、えっちらほっちらと走ってたりしているだろう運動部の声を聞いて、はたや胡桃^{くるみ}入りコーヒの香りが鼻腔をくすぐり、それを口に含んだときのなんともいえないほろ苦味を心地よくも感じながら、ぶり返すような不思議な感覚が襲

つてきているこの現状である。そんな五感と一緒に成瀬 春彦と呼ばれるバカ野郎は、世界に数ある超常現象のうちのほんの一部を体験しちまったときに起こった自己の拒否反応についてを考えていた、とでも言えればいいのだろうか。

これがホントの序章だったら大変な事になるだろうと思いつながら

時を遡る。

あの休み時間に。

あれが突然やってきたときに。

——ひゅん。

俺はあの時、小早川に廊下まで呼び出されて手紙を貰った。これは二日連続の出来事だった。相変わらずツンとした感じは一つも見せず、優しくおしとやかにそれでいて恥ずかしそうな初々しさのよくな仕草を見せていた。

二、三語さくさくつと言葉を交わし、丁度予鈴がなったため俺達は教室に向かって帰った。

何事もなく平和な世を謳歌おうかしているのは今を生きている俺達の青春だとばかりに感じる穏やかな日常だった。

廊下側に近い小早川はもう先に席に着いていた。斎藤は少し離れたところでその近辺に座る奴らと話をしていた。比嘉は次の授業の準備をしていた。新原の様子は覚えていない。

そして俺はというと、もらったばかりの可愛らしいレターを大事にかばんの中へと収め、席について一段落をしようとしていた。

そう、その時だったんだ――。

――ひゅん。

そんな空気が旋回でもしてそんな音とともに万有引力の法則、慣性の法則、浮力の法則、その他もろもろの物理的法則を全て否定することが起こった。それはごくごく小さな俺の机の上の空間だけで発生した現象だったが、まるで磁石が砂鉄さてつを吸いつけるかのように消しゴムや鉛筆といった小さな小物がくっついてきては体にのめり込んでいったのだ。しかも、それらがのめり込んでいき体内に吸い込まれていく割には全く痛みを感じないという奇妙なアイロニーにも直面していた。だが何よりもおかしいと思ったのは、誰一人としてこの現象には気がつかないことであった。

皆が平凡に日常を過ごしていて俺だけが場違いのように見える滑稽な感覚で、「にゃはは」なんて笑いながら「待ってましたよ、局地封鎖的ポルターガイストさん」と呑気に構えればいいのだろうかと感じてしまうほどであった。

結局その後は三分間近くもこの状態が続いていた。その間、俺は金縛りにでもあったかのように動けず息を潜めて見守っているだけ

だった。

この三分間の出来事をたかが三分間と思うかもしれない。でも、されど三分間なのである。

そんな長い長い超常的な感覚が抜けきった後は、体中全身に纏わりつくような悪寒と得体のしれない何か迫ってくるような戦慄が走っていた。

もちろんそれは科学では解明できないであろう未知というものを体験したことから来る恐怖だったのだろう。解らないことほど恐ろしいものはないということを身をもって体験した瞬間だった。

だがこれだけでなく――、
後ろの席からこんな呟きが聞こえてきたのだ。

「だいじょうぶ、まだヘーキ」

この新原 紗希のくちびるから零れた言葉は、どうやら俺の鼓膜まで届かせようとしたらしかった。

ただその時の様子が二週間前とは違いなんとなくアンニュイな言い草だったのと、「まだ」という言葉の部分に物凄い引っ掛かりを覚えてしまったのだった。

「だいじょーぶ、まだへーき」

この言葉がリフレインして止まない俺は、結局その日いっぱい全く授業に身が入らず、今からラクビーでも始めるのかというぐらゐの限りなくゼロに近いやる気のなさだった。

昼休みは例の如く、天使が降臨したままのユカリが弁当を作ってきてくれたっていうのにそれを食すこともできずさんざん心配された。俺の中ではあんなにウエイトを占めていたプライオリティーの一部でもあるネクタイのきっちりさも乱れたままだった（それをユカリが「あたし、男の人のネクタイいじって見たかったんだ」と言うセリフとともに結い直してくれた）。そして放課後を迎えて先ほど吐露した心情に至る気分なのだ。

でもな、そろそろそんな気分も持ちなおさねえーといけないよな。

——俺はもうオーケーだぜ、新原のマドモアゼル。

なにがオーケーだかマドモアゼルだか知らんが無理にでも樂觀的な空気を作りだすための演出だ。

俺の中にある詩的雰囲気을解除して、新原のセリフを考察するために「だいじょーぶ、まだへーき」なことを——そうだな、一般的概念で世の中の大丈夫なことを挙げてみようか。

オフサイドのルールがいまだに分からない。「だいじょーぶ、まだへーき」

フェルマーの定理を中途半端にしか知らないくせに誇らしげに語る。「だいじょーぶ、まだへーき」

なにもない所で勝手に躓いて転ぶ。「だいじょーぶ、まだへーき」
麻雀で、いつも皆テンパイなのになぜか俺だけイーシャンテン。
「だいじょーぶ、まだへーき」

空飛ぶ魔法使いの少女を下から見上げた時に露呈したもの。「だいじょーぶ、まだへーき」

いや、ほうきか？　——つと。ほかには、

俺を織田信長と勘違いして襲ってくる今川氏真の亡霊。「だいじょーぶ、まだへーき」

気の抜けたコーラ一気飲み三リットルを強要される。「だいじょーぶ、まだへーき」

今日斎藤が話していた星ボクロの女の子にコクられる。「だいじょーぶ、まだへーき」

——そうだな。それから、

好きな子の縦笛を舐めてしまうほんの一秒前。「だいじょーぶ、まだへーき」

隣の女子更衣室をのぞき見るかはまだわからないけど秘密の穴を作る。「だいじょーぶ、まだへーき」

小早川に衆人環視のもとで罵詈雑言を浴びされる。「だいじょーぶ、まだへーき」

ふー。もちろん最後の三つは軽いジョークだぜ？　いや全部ジョークだ。

特に最後の三つは隣の部屋が女子更衣室だから余計な煩惱が入り込んでくるということにしとくか？　だが、健全な男子高生たるものの煩惱に優る思考なし、だね。

どうやらこんなアホな事を考えていると少しは気が楽になってきたようだった。

だからこそ物理法則を無視した奇怪な現象だって「だいじょーぶ、まだへーき」。

——ってなわけねえよな。

だいたいユカリの様子がおかしい時はいつも何かが——ん？

そういえば小早川が夢の話をした時には新原が仰天の発言をして、俺に初めて弁当を施した時には新原がテレポーションで消えたという噂を聞いて、そして第二次ユカリ天使が舞い降りた時は、新原二度目の発言とあの奇怪な現象。なんかかぶっている気がするのは気のせいだろうか。

しかしだ。何も分からん。もう俺の中での今年の流行語大賞は「なるせ……、あなたはあたしがまもるから」か、「だいじょうぶ、まだへーき」の二作品で決定だということぐらいしか分からん。

——コンコン。

すると突然、ドアをノックする音が聞こえてきた。

心の中では百八回ぐらいはノックされたのではないかというぐらい驚いてしまう。

今度は耳の生えたキツネ的萌えキャラでもひよっこりでてくんのか？ 百八匹コンちゃんっていうのはどうだ？

と、そんなことを考えてつつも「はい、開いていますよー」と声を絞り出す。

——ガチャ。

ドアがゆっくり開け放たれる。

「……………」

驚愕だった。

俺はその入ってきた人を見た瞬間、二、三秒ほど思考が停止してしまったのだ。

なにせ健全な女子高生たるもの頭の上にキツネ耳なんて付けはしないだろう。どこをどうみても、カチューシャには見えない飾り物（飾り物とすら呼べる代物でもないのかもしれない）を付けている女の子が入ってきたのだから。

「はーいっ」

しかも目の前に立っていたのはそういうまがいものが全く似合わない感じのお姉さん。あのバランス良く整えられたロングレイヤーの髪型は、大人の色香を漂わせた美人という感じで、曲線が滑らかな卵顔をしている。ランダム制御で授けられたホクロも、十分な大人の魅力を引き出すためには欠かせない。左の口角の下で存在感を示しているホクロを、言う。マリリンモンローの影響か。でも、こつと笑った瞬間には子供らしい八重歯やえばが覗かせていたけどさ。勾まが玉たまみたいな。

「なー成瀬っちこんにちは、こんにっちは」

と、快活な挨拶をする女の子。

俺は学年の目印となる桜と竹の校章の色が違うこと（一年は赤、二年は緑、三年は黄色）に気づき先輩だと悟った。

しかし名前はなぜだ？

どうして俺の名前を知っている。少し考え、出てきた結論は……比嘉かつ！ 比嘉のやつがこの先輩に余計なことを垂らしこんだのか？ 俺が獣耳（特にキツネ！）ここイエローの蛍光ペンでマーキングするぐらい重要！）萌えてショートカットな女の子が好きだったことをあいつに話したのか？

ただ答えは考えるまでもなくすぐに出た。あーそういえば話したな、と。

だけど今はそんな気分じゃーないのになんてこったのパンナコッタである。

それにここは突っ込めばいいのか？ 称賛すればいいのか？

とりあえず「あつ、あのですね——」と。

しかし、目の前の獣耳先輩は俺がしゃべりかけたのに人指し指を人の口元にまで持っていて「しー」のポーズをする。

「成瀬っちだよねっ。わたしは比嘉っちの知り合いで君の噂を聞いたのねっ。よろしくにゃー。ふーむ、ホントにいいのかしらねっ」

あのお姉さんらしさ全てを台無しにするようなしゃべり口調に啞然としてしまう。が、なんだか先ほどまでのマイナス気分はふわふわと抜けていくようだ。

とりあえずはだな。あの耳はネコだったのねっ。それにショートカットはしなかったのねっ。すると、名前すら名乗らない獣耳先輩はこっちの視線に気がついたように自分の頭の上に乗っているネコ耳を指さした。

「ねえねえーなー成瀬っちーこれねっ、みてーみてー」

「な、なんですか、これは？」

「みてわからないのー成瀬っちは」

「ネコ耳ですか」

「はっずれー。動物の耳でしたあー」

俺は心の中で軽く毒づく。それは一緒だろうと。
しかしそんなことは意に反さず^{かえ}に、

「ほらあー、ファーストインパクトって大事でしょ？ だから成瀬
っちがこういうのを好きだって比嘉^{ひが}っちが言っていたからがんばっ
てみましたあーのねっ」と言うのだ。

そして獣耳の先輩はくると振り返り、その後ろ姿にはご丁寧に
ふさふさもふもふの尻尾までくり付けてあった。

比嘉のやつ……。言つとくならショートカットの方をしっかり注
文しとけ！ というのはピザの斜塔が真っすぐな塔だと真顔でいう
ぐらいのトンデモな冗談だけどな。だがな、この人は問題がありす
ぎじゃないか？ それにそんなにもファーストインパクトってーの
が大事ならば、こっちだってあれを発動させて即追い返してやると
も。ん？ 追い返そうとしていいのか？

「ふっ、獣耳の先輩さん。大事なのはな、ファーストインパクトじ
ゃあーねえぜ」

おいっ、何してんだよ。俺はこの人を追い返していいのだろうかと
悩み考えているうちに、言葉を発してしまい体が勝手に斜め四十
五度の姿勢で右手の甲を右目に添えてしまっていた。

ならば、もうこう思うしかない。

ここまできたらあれだ。小説や台本なんかでよく見かけるが実生活で絶対に使うことがないあのセリフ。「えーい、儘^{まま}よー」ってやつ。

「あのな、ファーストインパクトよりも大事なものがあるんだよ、先輩さん。その時の、たった一瞬の出会い、ありのままの飾らない笑顔を見せてくれた方が人生の根底を変えてしまう出会いに発展するらしいんだ。だからそのことを念頭に置いておくほうが重要だぜ。そんなことを考えるよりもな」

あーあ、やってしまった。これぞまさに覆水盆に返らず。出した言葉は引っ込められない。まったく、初対面の人になんのこっちゃだ。言っている自分自身でも訳のわからんオッペケペー節。

「……」

そして対面の御方はというと、あまりの憤怒からか瞳孔^{どうこう}が過分に開き、水っ気を多く含んだ視線を投げかけてきていた気がした。

さあ、こんな頭のいかれた俺の事なんか気にしないで今すぐブン殴るか軽蔑の視線でも向けてくれ。だが、この荒波を通り抜けたら貴様を文芸部の一員として迎えてやってもいいぞ、なんて支離滅裂で意味不明な言葉を口走りそうになりながらも相手の様子をもう一度盗み見ると、予想だにしないこととなっていたのだ。

「かかかか、かっこいい————っ！！ 成瀬っちゅー！！」

こんな嬌声とともにドアの前でへなへなと、はたから見れば青菜に塩と化していた獣耳先輩。腰から碎け落ちるようにして座り込み見事なまでにドアのストッパーとなっちまった。

その姿は、俺がまるで世界を変えてしまうような偉大なるノーベル真理学賞ものの言葉をのたまい、それを拝聴した信者が感極まったあまりに崩れ落ちてしまったようだった。

まさか俺より先輩の女の子がこんな適当な言葉に揺り動かされてしまうとは。育った環境の違いか、井の中の蛙世界で箱庭教育でも受けていたのだろうか。

「はあー」

見ると目にハートマークが浮かんでいるぐらいまでにきらきらとさせてきて、シスターポーズまでして祈りをささげているみたいな様子。

ホントマジかよ、それにしてもこのお姉さん、なんという逆効果だったんだ。おもいつきり失望させちまおうと目論んだのにこの食いつき。言っとくけど俺が超能力を使ってそう思いこませたわけじゃーない。

とりあえずはこんな所で漬物石になっても困るからどうにかしなくてとはと、結論に至り手を引っ張ってみながらも弁解を試みる。

「えっと、あー、おーい先輩。あれは、ですね、ほんのくだらないメキシカンとロシアンとアメリカンと、そうですねーバチカンジョークですよ」

「へにゃー」

あーあ、ダメだ。

そしてこれはいかんと曲りなりにも思う俺。どうやら彼女を文芸室の部屋の中に引きずりこむしか選択の余地はないみたいだった。こんなふうにはドアのまん前で――そう、ネクタイを頭に巻いたよっぱらいの末路みたいな格好をされちゃった仕方があるまい。

ということで、机の近くまで俺は「ふぐう」なんて奇妙な擬音を出しながらも一生懸命に引っ張り込んできたのだが、「うにゃ」と言う気味の悪い声が聞こえてきたのに驚かされてしまう。ちらりと視線を下に落とすと、高級な海鮮寿司を心ゆくまで堪能したような笑顔を見せて復活していやがった。

「なーっ、成瀬っち！ 今からすぐ後ろ向いてねっ」

そしていきなり大声に座り込んでまでして後ろを向いてしまったのだ。

ついでに「へいっ?!」なんていう斎藤“ゆうじ”ばりの応答もしてしまった。

「なくなるせっちい」

「なななな、なんすかぁー！ 急にー！」

なんと、獣耳の先輩（そういえばいまだに名前を聞いてない）は甘ったるい声とともにしな垂れてきたのだ。先ほど男としては当然の如く――それでいてさりげなく――あの制服に隠れるあの部分の大きさは普通ぐらいと認識していたのだが、二つの『あれ』と『あれ』がふにゃんふにゃんと押しつけられるとそう思えなくもなり、こうなんかあんな超常現象的出来事がどうでも良く思えてくる人類の性に関する偉大さを感じてしまっていた。

だがその時――？

ポタリと水滴が落下した音を聞いたような気がしたのだった。

「――あっ……………」

一人小声でつぶやきこう思う。

なんということだよ。間違ってもチョコレートの過剰摂取なんかしていないぜ。ふざけんなよ。

この見るも鮮やかなレッドポタリー。緋色の悲劇。紅の分身術。朱の慟哭。俺の体内を颯爽と流れていたはずのヘモグロビン及び白血球ないし赤血球その他もろもろが毛細血管を打ち破って、

「なー成瀬っち、こんにちは、こんにちはうだね、もう二年ぶりぐらいの邂逅かじゃー。ボクとはなかなかあってくれないもんね、成瀬っち。毎日毎日カレンダーを捲って、なー成瀬っちが会いにきてくれるのを待っていたんだよ。ボク、とっても寂しかったんだよ。えっなぜおまえはいつも真っ赤なんだって？ いやだなあ、ボクは恥ずかしがりやだからっていつもいつてるのに。だから鼻から流れる赤いものは気にしないでね、成瀬っち」

なんて鼻から出てきたあれをボクっ子に擬人化……って痛すぎるぜ。いろんな意味で。

要するにな、これは鼻血！ 医学的には鼻出血なんだ！

「いいっ？ 今から背中に文字をかきたいのねっ」

「はいっ、おおかまいなくうー！」

この場面でさすがに鼻血はありえねえという思想が頭の中を支配してしまい、ささっと出た声はうわずちまった。

しかしそんな様子に気づくことなく、たぶん小指だと推測されるかぼそい指で一心不乱に文字を書き連ねる先輩。もちろん俺はその隙に内ポケットから携帯用ティッシュを取り出す。とにかく、なんとかこの鼻血を誤魔化さなくてはいけない。

するとしばらくして、「なー成瀬っちうなんて書いたか分かる」

「？」という声が聞こえてきた。

だが当り前のごとく「わかりません」だ。

意識がまったくそっちにいかなかった。鼻血で。しかもまだ止まらん。

「え」

「すみません」

「成瀬っち」

「ごめんなさい」

「なーなるせっちい」

「アイムソーリ、です」

とにかく素直に謝るしかない。

「もうじやあしょうがないなあ、こっちむいてっ」

「え、あ……」

まずい。まだ血が止まっていないのに。

「ほらっ、わたしがわるかったからっ。あたしたち、まだ出会ったばかりだからねっ」

そう聞いた俺が、お嬢さんはなんて書いたんだろうかと邪推をしているうちに、一拍置いたようにして流暢な外国語が耳に響いた。

「――プティ・タ・プティ――」

そして「これフランス語で少しずつって意味だからねっ、成瀬っち」

と、獣耳がちょこんとぶつかってそのふわふわ具合を制服ごしに感じつつも、彼女が耳元でこちょこちょと言った瞬間に、

――コンコンコンコンコン。

このタイミングで二匹目のキツネがけたたましく鳴き始めたのだった。

2-3 (後書き)

『ユカリちゃんのゆううつ☆』

この物語は本編とは一切関係がございません。作者の気が向くままに始めたヒロイン応援プランです。

そしてここでは、あのユカリちゃん（若干幼め）が自宅の鏡の精霊ネコミーととりとめのない会話をしているだけです。

ジャンル？ 不条理なパロディーコメディーです……。どこかでみたことあるようなラノベのタイトルでありましても気にしないで頂ければ幸いです。

第二話 『今日だけ『こ』の付く自由文』

「べ、べつにあとがきなんか読んでくれなくなっちゃっていいんだからねっ！ それに感想なんか送ってくれなくていいんだからねっ！」

（ユカリちゃん！ やめとけよ、そんなこと言ったら誰も読まなくなるだろ！）

「でもね……ツベルクリーナ」

（なっ、名前が変わってる……！ なんかわしの脳裏には注射器が迫ってくるが……）

「どうしたんだい、ユカリちゃん」

「それでも読んでくれたら……」

（あれっ?! 顔を赤く染めてぷいっとそっぽを向き始めたぞ……）

「ユ、ユカリのハウレンソウ入りタマゴ焼き……作ってあげてもいいけど」

（あれは、紫だろがっー!!!!）↑すいません二度目! もうこのネタは使いません（――;）

「ユカリちゃん。それよりも君が元気でいたほうがいいんだよ」

「そうなの? ツベルクリーナ」

「そうだよ」

「でも……あたし、ゆううつなの」

「それはまた……どうしたんだい」

「あのねっ、あたしは作者がいまさらになってあたしのプロフィールに八月一日のしし座生まれと加筆修正したことはほん――――の少しも憂鬱さは感じないし、今日から『○』の付く自由業のパロディをここで組み合わせることを思いつかなかったのも別に問題ないの。でもね……」

「でも?」

「あたしの知らないところで、あのキツネ娘がハル君を誘惑しているのが憂鬱なの」

（しょーがねえーよ。主人公補正、主人公補正。あーめんどくせえ
〜）

「まあ、いいじゃないか。こっちではうまくいったんだろ？ ユカリちゃん。あのおまじない」

「それがね、こっちでも……」

「えっ？」

「ふえ〜ん。ツベルクリーナ」

「へっ?!」

「あたしねっ、サキちゃんに――あっ新原の沙希ちゃんだよ。あのアヤナミ系っぽい子。で、その子に香辛料セットもらったの。彼女のお勧めはトウガラシだったけど、あたしはオリジナルでババロア、ナツメグ、ウコン、ブラックペッパー、みょうが、サンショウウオをブレンドしたのを顔に塗りたいくらいかと思ったけど止めて。オーソドックスにコショウをふりかけたの」

「それで」

「バカ野郎って怒られた」

（おかしいなあ……）

「で、聞いてよ！ ツベルクリーナ！ ハル君がいうにはね、『なんでユカリは間接的なダメージしか俺に与えてくれないんだ。もつとムチでピシッ、とか、パシッ、とか、わたしのお靴をなめなさい

とか言ってくれないんだ』って言われちゃったの」

「で、どうしたんだ」

「何もできなかった……」

「そうか」

「だからゆううつなの、やり方を教えてほしいのー。ネコミー」

「しょうがないな、わしの世界においての先祖代々伝わる『ホ』の字の肉体的まじないを教えてしんぜよう」

「わーい。これできつと大丈夫だね……、大丈夫だねあたし……」

（なっ、なんかヤンデレっぽくなっちゃった……）

「まかせとけ。それはな、ティッシュペーパーを針状に細かくして鼻の穴にこちょこちょとねこじやらしの感覚でくすぐるんだよ」

「ホ、ホントー、ありがとーネコミー！ あっ、あたしがんばってみるね！」

「ああ、がんばれ。だがなあーひとつ聞きたいんだが……」

「なあーに？」

「弁当はどうした？」

「うぐう……」

（ユカリちゃん、本気になって鏡を睨むな）

「奴は食わなかったのだな」

「ち、ちがうのー」

「なに？」

「きききようはねっ、コネコにあげるきぶん、そう、あたし、そんな気分だったのっ！」

「で、どうだったんだ」

「コネコちゃん、のたうちまわって喜んでいたよ」

（あーあ……）

「次回からメロンパンでも持っていったらどうだ？」

「えー……」

「いいから！」

「はーい」

（なあ、作者よ。これ続けていいのか？とわしは問いたいのだが。そろそろ三角関係でもつくって話をこじれさせればどうだ？）

というわけで、次回の『ユカリちゃんのゆううつ☆』は、
『灼眼のユカリ』です。では！（ふう、本編、おまけ共に長かった。文章の精度が心配です……）

——コンコンコンコン——

一クッションも持たせない連続動作でドアが唸りをあげゆつくりと解き放たれる。

なんと！

この少しネジのずれた先輩（まあ、俺よりか幾分はマシだが）でさえ社会の一般常識に通じていて基本であるノックアンドウエイトの手順を守り通したっていうのに、扉の向こうでせわしなくしているであろう二匹目のキツネはいまにもドアを開けようとしていたのだ。

俺達はというと、ドアから背を向けて床に座り込んだままの姿勢でいたためもちろん大慌てで振り返り立ちあがろうとする。

だが、そこからが悲劇の始まりだった。

それは平素から機敏な動作が取れるような運動神経を持ち合わせていない俺が起立をしようとしたときに、運動神経系統の信号の伝達がうまく伝わらず先輩の方に向かってすっ転んでしまい、緊急避難的にポケットへと押しこもうとした紅の鮮血改めブラッディー・ティッシュノーを床におもいつきりぶちまけてしまう。

そして俺の重力抵抗を受けた先輩はというとなんとかそれをこらえようとして、近くにあった机に手をかけ自身のバランスを必死に保とうしていたが、それも見事なまでの裏目にでてしまいコーヒセツトまでもこれまたぶちまげてしまうという最悪な展開となつてしまったのだ。

まさに漫画的擬音にすればどんがらがっしゃーんという感じの音が鳴った。

しかも獣耳先輩は「キャン」とか「アーン」なんて正に本物ばりのお耳生え小動物みたいな鳴き声か、あるいは可愛らしい嬌声かの

どちらかに分類されるような悲鳴をあげ、こっちから見るとビデオ的なスローモーションで一足先に仰向けで寝ころんぢまった俺のほうへと倒れこんでくる。

こうして俺達はものの二、三秒の短い間に見事なまでの相互結合シンクロをしてしまい、まるで夜の縦四方固めみたいになっちまった今の状態は俺の人生経験においてはこの上もなく素晴らしい柔肌の感触を堪能できるユートピアタイムではあったのだが、それはピンポイントで落ちたいかずぐらい質の悪すぎるタイミ^{たち}ング。

結局、双方啞然とするお暇さえも与えてもらえず、円周率の切り捨てられた部分すらの秒単位的時間の猶予もないままにあのドアが、

——ガツチャリ、と開いちまった。

かくして賽は投げられたみたいな、どうにも弁解ができないまさにあれよ的な場面でのご対面になってしまっ

「なななな、成瀬君——っ！」という悲鳴がけたたましく鳴り響いたのである。

「はひーっ！」と獣耳先輩。

もちろん俺たちはといえば、誰だか分からない声が聞こえたか聞こえないかのうちにとりあえずは神速（誇張であるが）で、双方合意のもとで獣耳先輩とは距離をとっていた。

そしておそろおそろ俺の名前を呼んだ人物を仰視^{ぎょうし}すると、それはまさかまさかの金井さんだった。そう、今日のあの世にも奇妙な休み時間を体験する前に斎藤が話題に挙げていた人だ。

彼女は、まさに委員長ですというようなみつあみくるくるの中わけヘアースタイルに、掛けているメガネがとても似合う文学少女的な女の子。そしてやっぱり我がクラスの学級委員長でもある。

うゝむ、彼女ならば本がぴったしだ。むしろ委員長じゃなくて図書委員の方が雰囲気的に合っている。そして将来は図書館の司書になるのである。見た目だけならば司書マイスターの称号を与えても良いぐらいだ。なんて穏やかな状況ではない。

「ああああ、ああなたは、いやあなたたちはいいいい今」

「あはあはははにゃ〜？」

この鳴き声は獣耳のお嬢さん。だが「あはあはははにゃ〜」ってなんだよ。

「いやあなたたちは、いい、い今なにを」

「か、金井さん……」

「あああ、なっ、成瀬くん、は――、あのですね、ね、ゆかりちゃんという相手がいながらも斎藤君があんなにも成瀬君のことを心配していたから様子を見にやってきたはははははっはー、なananでここに、ここにこ、ここに血のついたティッシュが……うはっ！」

まさかまさかの意外性で参上しなされた金井はさらにまくし立てるよう喋り始めたが、乱雑しているティッシュを見てから急に様子がおかしくなった。さらにはどっかのあほ面みたいに今から鼻血を出すんじゃないかという勢いで顔全体が真っ赤に染まり、それを両手で必死に隠そうと不完全なしくさでいいないないばーを繰り返しながら、「しょしょしょ」と……。

はっ？ 月夜か？ ポンポンポンか？

「こここここんな、ところで、捧げ――」

って、ん？

「こ、こんな、学校のなかでふふふしだらな……ことを」

お、おいっ、金井さん！　そういう勘違いねえーぞ！！　もしや、そのメガネは視力を大幅に退化させるだてメガネであって、状況判断に重大なる支障をきたすのか？　ならば仕方がないが、それは全く持ってありえない。

「かつ、金井さん！　ちょい、ちょっと――そ、それはごか――」

俺が意図的にこんな状況に陥ったわけではないことを言いかけようとしたが、それすらも最後まで言わせない矢継ぎ早さで、

「ななあ成瀬君はきつとこういうんでしょね。キキミが見たのはほんの些細な幻さ！　キラリーンみたいな……あーあれね、あれね、懐から快刀をとりだすようにバラなんかを取り出してこんな状況でも取り繕うとするんでしょ、このナルシスタンス！　わたしなんかわたしなんかを、だってさっきまでこの人と――あー、この人のみみだ、みみ付けてる。なんと、なんとというプレイ……ネ、ネコ、ネコニヤーン。ニヤン？　ああああ、そとニヤン、ニヤンニヤンプレイなんて――っ！」と。

完璧なまでの一人合点である。彼女の俺に対するイメージと俺の彼女に対するイメージはどんどん崩れていく。ベルリンの壁が崩壊するぐらい崩れていくな。

「ううーうにゅー」

そうやってぽかーんとしていると、隣は隣で軟体動物を連想させるようなふにゃんとしたふにゃり声を挙げていた獣耳先輩。これでは彼女がますます助長してまくしたててくるのは火を見るよりも明らかだった。

「ししししかも……」

「うううう」

案の定彼女の喋りはまだ止まらなかったようで、その焦点が定まらなくなった目線は再度驚倒で見開かれていく。そしてなぜかそれに呼応するよう乞驚し始める変な輩は、もちろん俺ではなく獣耳の先輩。

「はあ……」

なんだかなあ、これ。

まるで眼球飛び出せ選手権でもしているかのごとく二人は互いに見合って競い合っているみたいだった。

そして金井は、その状況から往年のカール・ルイス——いや、モリスグリーンにも負けず劣らずの後ろ向きなスタートダッシュで去っていきこうとし始めたのだ。こちら側の積もりに積もった海よりも山よりも深い話を受け入れずに。

「あ————っ、金井。ちょっと！」

「ももおーわたしには、は、むりです、しこーのはんちゅうからいつだつしていまし——わ、わたしにはついていけな——いんですうー。ね、なな成瀬くん、だまつてるからだまつているからね、この秘密はちゅりかごから、かかばまで持っていくからっ、ごしよ

「大事に抱え込んで死に至る病として受け止めますから。ね、わたちを追わないでえ——。おわないでください、そ、そとで、そとニャンさんにんニャンニャンプレイなんて——」

「あーあー、まったく意味がわかんねえーよ、と心の内で嘆く。

俺は再度「待ってくれー」と声をあげたのだったが、それはやまびこに話しかけていた人と同様の切なさであって、去っていた金井がこれから短距離界の女神として向こう十年ぐらいは君臨してくれなければ心がまるで休まらないだろうなんて考えていた。

やがて本日何度目かになる呆然自失と言う状態が訪れ、獣耳先輩は氣を利かしたのか、

「か、彼女、まるで連続のようなマシンガンの弾丸だったねっ」

と、いったいどこに修飾が掛かっているのかも分からないジョークをぶっ放していた。こうして金井とは完璧なまでの勘違いというしこりを残したままで明日から学校で顔を合わさなければいけないと考えながら、はたまた床一面に散乱したティッシュやらコーヒセツトやら本なんかを直さなくてはと思いながらも仰々しい動作で後ろを振り向く。

「……………」

「しかしだ——。」

俺は、

獣耳先輩は、

そうやって振り向いたのだったが——、

その瞬間。これこそが一番の驚きであってそこには俺と獣耳先輩の他にもう一人の人物がいたことを本気で^{マジ}思い知らせてしまう。

——新原 紗希。

金井の「そとニャンさんにんニャンニャンプレイなんて——
————っ！」という二度と思い返したくもないような微妙な
言葉が、「三人」の部分だけを切り取ったように脳内をリピートす
る。

「……………」

俺は首を百七十度ぐらいはひんまげて考える（もちろんそんなに
は曲がらないが）。

どうしてだよ。

そこに人がいてはならないだろ？

これじゃあ密室トリックの均衡状態は成り立たんし、演繹三段論^{えんえき}
法としての推理小説的トリックが捻じ曲げられちまうじゃーないか。
つまりはだな、思弁カタルシスを得られんだろ……ってそんな問題
じゃない！

しかも服が微妙にはだけていて切り刻んだような——というのは
大げさではあるが、カリブ海に浮かぶ小さな島の民族衣装ぐらいの
制服ぐにやぐにや感は何をしていたことを表しているんだ！

——なあ、新原？ おまえはまさか、俺が無意識化状態のうちに
このようなことをしてしまい、世の中の都合の良いことしか写さな
いゴールデンタイムのテレビのように——今頃になってポンッと都
合よく俺の視界に入ってきたわけではあるまいよな。

いや、それともあれか？ これが噂のテレポーテーションという
ものか？

ああ、絶対にそうだ。こいつなら直接的にしろ間接的にしろ、あ

の十時四十分前の中休みのようにまた変なサイコキネシスでも使ったのかもしれない。

こうして俺がつれづれとなさそうでありえそうなパターンを再思三考していたら、

「でてって」と言う新原の声が聞こえた。

すると、いかにも人畜無害な感じのする――あのお姉さんっぽい風貌なのになしやべり方が子供みたいな先輩はロクに反論することもできず、むしろ新原にお辞儀でもしそうな勢いでいびつな格好となりひしゃげてしまう。

――マジかよ、新原のほうがぜってえーにおかしいはず、だぞ？
どうやら俺は先ほどの一連の出来事である獣耳先輩に一種の共犯的感情が芽生えてしまったのか、最初の時の素っ頓狂さと比べて次あったときにはもっと悠揚ゆうように構えてあげたいなんて思ってしまったようだった。

「えい、ごめんなさい」

そう言っこの場から、立つ鳥跡を濁さすを心掛けるように去ろうとする（既に見事なまでの濁し方であったが）先輩を横目で見てしまう。

「なー、なるせっちにもごーごめんなさい」

それを最後にネコ耳だけはらりと落として部屋を後にいき、刃やいばのような視線を向ける新原 紗希とがちで向かい合っていたのだ。

2-4 (後書き)

最初に比べて文体が変化してるような気が……というよりかはアドバースを受けまして、独白の部分に若干の変化をくわえてみたつもりです。(それでもまだ軽薄な素の文章が多いかもしれません)ですがどうなんでしょう、と疑問に思う今日この頃、――でした。

そうしてどのくらいはこう向かい合っていただろうか。

もしかしたら、実質的な時間になると一分にも満たないのかもしれない。

だが、あの新原 紗希のかもしれない。徹しめの雰囲気にもまれてしまった俺はもうずいぶんと長いことこうしているような気がするのだ。それに明らかに異常な発汗作用も誘発されている。

今ならば「この唐変木があー！」と罵られても否定できやしない間の抜けた状況。ただその間も、「なるせ……、あなたはあたしがまもる」とか「だいじょーぶ、まだへーき」なんて言ったあいつの姿がフラッシュバックのようによみがえってしまう。

「な、なるせ、っち——」

沈黙の中で口火を切ったのはいまだに氷河のような視線を向ける新原だった。

俺が話しかけなければ事が前に進まないと考えていたのもあった。いぶ驚かされてしまう。

それに——。

（な、なるせ、っち——？）

刹那。

そう思った矢先に。

その言葉尻が疑問になる。

今のはあの謎の小動物系お姉さん容姿八重歯ちよろりん獣耳先輩の真似だろうか、それとも。

いや——。

「あ、ああ……い」

ちくしょう。なんで母音しかでないんだ。

だが、もう一度考え直す俺。

そんなことよりかはこの場において遥かに重要なことがあるということを。それは新原 紗希という一個体がどうしてここにいるのかについてと、そのかまいたちでもくらったような制服の傷跡はなんなのかを聞かなくてはならない。

しかし、あの『考える人』の銅像より切羽詰まった顔をしている可能性の高い俺を差し置いて、彼女の方が意味の通じる日本語をつぶやいたのだ。

「——なるせは、あたしがまもらなくてはいけないとおもった」

と、言って小さな手で指さしたのは鼻。——ではなく。

「え、う、うっ——っ」

こんな聞くに堪えない声を出してしまったのはほかでもない。なんと花も恥らう乙女のはずの女子高生が指をさしたと思ったら鼻穴に突つ込んできたからである。

「おい！」

お、おまえは何しているんだ今——いや、その前からだ！

「——なるせ、ち、だからかけつけた」

ポカーン。まさにそんな表現がぴったしだった。

それは「なるせっち」ではなくて「なるせ、血」。

いや、そんなのはまさしくどうでもいいことであって、その新原紗希が取った不可解な行動が信じられなかった。正常であればこんなことをするわけがない、というか彼女は普通ではなかった。今、ここにいるという状況を鑑みても。

だが、その発言を境目に彼女を纏っていた殺伐とした空気が和らいでいった。

タッタッタッタなんて死神の道化師が去っていた、と言ってはいいすぎだろうか。

しかし、自分の指先に付いた人の血液を眺めながらも、

「有機生命体情報統合解釈連動装置が不可視状態において、まだ非正常機能だったとは想定外だった」なんて言い出した。

うっ、ちょっと待て、なんだ？ このカオスな言葉遊びは。

さっぱり訳が分からん。俺の血液はなんなんだよ。

「なるせ、>有機生命体情報統合解釈連動装置<にはもう少し適宜な時間が必要だったらしい。ということは今のなるせには危険がないのに参上してしまった」

だからまただ。あの今まで黙りこくっていた新原が物理学的、量子学的な用語をならべて漢字だけで構成されていそうな意味不明な事を口走る発言、どういうことだ？

あー、今時の女子高生はこう言う表現が波及しているのだろうか？と自分を欺く現実逃避に堕ちいりたくもなるあの台詞。さっきまでの彼女は日本語を勉強し忘れた帰国子女みたいなひらがなだけで表せるような口調だったのに。

「ただ、現在校舎状況での個人的空間範囲距離間は一瞬混在状態有無

の観点から考慮すれば必要条件はクリアはしているから、予定より一日はやめる」

また新原の声が聞こえてきた。

——そういえばなんでここにいるという問題が解決していない。
鍵もなしに。

『はやめるのか？』

はっ？ それはなんだ。

新原がコミュニケーションが取れる、イコール淀みなくベラベラとしゃべっていると言う事実。それだけでもにわかには信じられねえーが、なんだって別の声が聴こえてくる？ 宙に向かって会話をしているなんて仰天を通り越してひっくり返ってしまいそうになっちゃうだろう。

「そう」

「……………」

やはりこの時の俺は、先ほどの出来事と重ね合わせて様々な想いが錯綜する心の叫びを口にすることもなく、ただ餌を待つ淡水魚のように口をパクパクさせていた。

だけど、それとは対照的につるんとした顔をしている目の前の女の子は置物の彫刻であって、かえって安堵の表情を浮かべているのはどういふことなんだろうかと考え込んでしまう。

やがてまた押し黙ってしまった新原によってこの空間に再度静寂が訪れた。

俺はいまだに言葉を紡ぎだせない。
そこからたっぷり一分間を経て、

「なるせ、個人的空間範囲距離間は逐一確認済み」と新原が言った。

「……………」

「それと——」

「……」

「あ、あ」

どうやら、その机に置いてあった鍵に視線を向けていた俺の意図に気が付いてくれたようだった。そして望んでいた話題に転換してこう続けてくれた。

「なるせ、わたしがここに来れた理由。それは容易」

「あ……」

「＜瞬時概念接近縮地法＞と＜物質拡散性振動配置法＞」

突発的に遭遇したときと比較して今は大分表情を緩和させていたのだが、やはり無表情でだけだるげな感じであることには変わりはない新原。これがこいつのデフォルトなんだと再確認をするのだが……じゃなくて、その内容意味がわからん。マジでなんなんだよ？

しかし構わずに——。

「超自然的形而上状態で相互特定所在地場面を意識的に想起し脳内を高速シャフトパターンに切り替え一時的な体内結晶成長技術により万能細胞を喚起した。そして＜瞬時概念接近縮地法＞を使用して

移動――」

だからどういう――、

「さらに＜無機質物情報統合解釈＞を利用した一時的な異種半導体空間侵食、耐熱融解値誘導作用に繋げるため単原子分子共有結合系列状態から急激な組成変化を促す振動回転を波及させた＞物質拡散性振動配置法を使用く、やがてここに進出。単位記号は――」

おい、まで、だから、おまえは――。

「……までよ」

やっところさ紡げた三文字ばかりの言葉を受けて、その何十倍以上の文字数で語っていた新原はよよと首を傾けた。もちろんかわいらしくなんかはない。

そう、それはこんなにもあり得ない状況。

なのに俺もおかしくなったのか幼少時を思い出す。

それは昔々あるところに――ぐらいなトーンの昔に、小早川とナイチンゲールの穏やかなお医者さんごっこをしていたはずが彼女はいきなりメスを持ち出したことを。

『はい、かいぼーしまゝしゅ』

そんなふうに言われた時には青天の霹靂を通り越してそのまま臨終してしまうのかと思ったぐらいだった。結局はそのメスが全くのまがいものだとわかる前の話だが。

つまりは、その時に抱いた恐怖心ぐらいの不気味感で顔が引き攣っているのか？

だがよー。あたりまえだろ、新原 紗希！

中休みの超常現象もありえなかった。振り向いた先におまえがいたことも腰を抜かすほど驚いた。そして、何も喋らなかった女の子が突然宙に向かって喋り出した。

第一、おまえは人間なのか？

「なるせ、なに？」

「それは……」

「わかった」

また俺の意図を理解してくれようとしたのか、それからもう少し分かりやすい日本語で今の状況と説明してくれた。だがそれでもあまり分からない。ただ、どうも＞瞬時概念接近縮地法＜というの＞物質拡散性振動配置法＜というのが組み合わさるとテレポーターションみたいなものになるらしい。

「なるせ、バカッ」

だってな、無理だろこんなトーン。こりゃーキツネにつままれているとしかいえないだろ？

そして最後に「あたしは適宜な時をまっていた」と抑揚のない声で言い放った。

しかし、俺には適宜な時がさっぱり分からんよ。

「お、おまえは、さあ……、何者、なんだ……？」

そう問いをぶつられた新原は「あたしは」と悩ましい顔をしてたが、すぐに「あたしは、なるせをまもるだけ」と厳しい表情で呟いた。

まるで自分にも言い聞かせているようでこっちとしてもたじろいでしまうぐらいに。

だが、もしかしたら入学初日にしたドンデモ発言は今日みたいな超常現象から守るという意味だったのか？　そして俺の鼻から血が出たのを何処かで感知し衣服がずたずたに乱れるのも気にしないで駆け付けてくれたってことなのか？

ならば、これから先の俺にはいったい何が起こるのだろうか。

「なあ……」

俺がまた質問を重ねようとしたが新原はそれを制して、

「――なるせ、あとは、これで」

その制服のどこに閉まってあったんだというぐらいの大きくて古い本と何枚かの原稿用紙を手渡してきた。

「こ、これは？」

「ホントはあしたのよていだった。だからあしたから、三日以内に、ここはダメ。この場所以外で、それでも学校で、人気ひとけのない所で、よんで」

「どうしてだ？」

「――は、ず……、ど、どうしても」

新原は少しだけ、ほんの少しだけ表情が赤らめたように見えたのは俺の気のせいかもしれない。

「だから、よんで」

するとそう発言してすぐに、彼女の存在はリアルで俺の視界から消えてしまった。

きっと、「瞬時ナントカ」と「物質ナントカ」ってやつなんだろう。

ホント、テレポーテーションさながらだぜ。

俺があんなにも懂れていたはずだった第三種接近遭遇的出来事に、間近で目撃したテレポーテーション。はたまた中休みに起きた超常現象。今はただ困惑するだけで途方に暮れるしかない。

「……」

俺は心を落ち着かせるため散らかりまわった文芸室をぐるんと見回す。

しかし、無駄だった。

こんな可笑しくて滑稽な世界ならSFないしファンタジーにおける存在定義の実証を充分にしておいて、小早川相手に伸るか反るかの大ばくちでもしときゃー良かった……なんてどうだ？

「こんなの、立て続けに……笑えねえって、間近で見せられても笑えねえよ新原」

今日、ここに来た時と同じように一人文芸室で唸っていたのだ。

その日の帰り道。

あれからすぐにでも、ここを飛び出してしまいたい気分になっていたため、やったらめったらに散らかっていた片付けもそこそこにして家路へと歩を進めていた。

通学路の踏切。カンカンという規則的な音。そして小学生特有の甲高い声。我が妹よりももう少し年齢が低そうだ。そんな彼らのちようしっぱずれでがやがやとした歌声が聞こえてきたのだった。

——かえる、かえる、かえる、かえるはみどり、みどりはきゅーり、きゅーりはあかい、あかいはおれんちのとなりのおさなじみーなんだ。あいつさーおれをみるといつも顔真っ赤にして怒るんだよなー。

「おい、まって！ それよりもおまえさあー何言ってるんだあー、きゅーりに赤なんてないぞー」

「へっ、おまえばかりだなーこのよのなかピーマンだってあかいんだぞー、あるにきまつてらー」

「そんなわけねえーよ、このうたのつづきはさー、きゅーりはながい、ながいはろうか、ろうかはすべる、すべるはおやじのはげあたまー♪だろー」

「んなこと気にすんなって、おれだってそれぐらい知ってるからなー。それでなー、あ、おれもつといいの、今思いついたぜー！」

「ん、なんだ？」

「だから、かえるのうた」

「えっ、なんだよ、はやくおれにもきかせろよー」

「まて、ちみちみ、そうあわてるでないぞ」

我流のかえるのうた（そもそもかえるのうたというよりは紡ぎ唄でもいうか）を考え付いたらしい少年はダララララララランなんて効果音を着けていて、まさにキング・オブ・ザ・低学年の小学生がやることだな、と俺は思う。

「名づけておれのきらいなやさいをつなげたんだぜシリーズ！」

「なんだよ、つまんねー。きたいしてそんしたぜー」

そうだ、まったくもってその通りだ。

「はっ？ まかしとけて、いくぜ、きゅーりから！」

——きゅーり、きゅーり、きゅーり、きゅーりはみどり、みどりはながい、ながいはおねぎ、おねぎはまずい、まずいはなすび、なすびはむらさき♪

まあ、よくも飽きずに、こう野菜の羅列を続けられるもんだな。ていうか、名も知らぬ小学生の特に坊主の方。ネギとか茄子ぐらいは好き嫌いしないで食っとけよ。

俺がこいつらの頭の悪い唄で微妙に先ほどのショックが癒えつつ

あるのを、苦虫を噛み潰したようないたたまれない気持ちを感じていれば、坊主じゃない方の少年がシャウトしたのだ。

「ストップ！ ストップストップストップストップだ！ もう、おまえのうたつまらん。ねぎもなすびもきらいなんてだっせー」

「んだよ、しかたねーだろ。それにおれのかえうたにもんくつけるのかー。だったらおまえにうんこくわせるぞー」

「はあーやってみろよー。へっ、バーカ、バーカ。そんなことできるわけないじゃんねー。バーリア！」

坊主じゃないほうの少年は腕をバツテンに交差までしている。

あー、俺だってやけっぱちでバリアーでもするか？ 非現実的超常現象対策として。

「っ……おまえ知らないのか。隣のクラス小林いるだろー。ほら、みんなに気前よくレアカードくぼるやつ。あいつがいつていたんだぜ。ねぎを食うと首にねぎまかれてしめ殺されるんだぜ、なすびだって体じゅうがむらさきになるんだぞ。それこそエイリアンに心に乗っ取られたみたいにな。いいか、まだあるんだぞ、加藤。きゅーりだって食いすぎると頭がカッパ見たいにはげるし、とまとだっていつも顔があかくなるんだぜーおれのおさなじみのモエみたいにな。はっはっはっ、どうだまいったかー。それになーおまえ、ばかっていたやつがばかなんだぞ、知らなかったのかバーカ」

「はっ、バーカ。そんじゃ、おまえのほうがばかだ。いま全部でさんかい言ったからなー。おれはにかいだもんね。

「ばっかじゃねえーの！ おっと今のはなしだかんな。だからおれ

はさんかい、おまえはよんかい言ったぜ！」

「……なしとかなしだろーが」

「んじゃーどっちがかしこいかしよーぶしyouぜ、ふみきりが開いたらおれんちまでダッシュだ」

「あー、うけてたってやるよ。それにまけたら校庭いちまんしゅうもついかだー」

その言葉を合図に踏切が開いた。少年二人は華麗なるスタートダッシュを決める。

杖をついているおじさんをかわし、チャリンコすら抜かしてしまふ猛然としたでスピードで遠ざかっていく。

そして俺は、けっして良いとはいえないがまばらな住宅街の町並みとこいつらみたいな馬鹿が織り成す会話とのスーパコンボで普段は絶対に安らいでいくはずだったのだが、彼らが勢いよく駆け出してしまった後は、深い海の底の投げ込まれたかのような気持ちをまたぶり返していた。そう、さっきまでの心身の余裕さは持ち合わせではないなかったのだ。見せかけだったのだ。

やはり、さすがに笑えないレベルの懸案事項が増えちゃったのだろうか。

と、考えたその時――。

俺は新原に絶対聞いとかなければならなかったある一つの出来事が浮かんでいた。

それは、あの今日の中休みの超常現象はお前の仕業かということだった。なぜなら彼女の発言から推測すると、俺を超常現象で抹殺させてしまうような別系統の存在も感じてしまうからであった。

「そうだな、きつとあの時の多弁系新原なら絶賛キャンペーン中で

答えてくれたのかもしれないぞ」

雲間から覗かせたまだ高い位置にある絹糸の夕日を眺めながらもそんなことを口走ってしまったせいかな、センチメンタルな気持ちさがさらに膨れ上がっていく。

だけど。

今、どうしてほわーんとマンガのふきだしみたいな感覚で脳裏をよぎったのが、ここ一週間は目にしていない小早川のつんつんとした顔なんだよ。ぜひこれはイエス・キリスト様にでも説いてもらいたいぐらいだぜ。

——あつ、そうか、もう一つあったな。新原に問わねばならんこと。

それはあの最近の小早川の変化について、現実世界と夢世界が交差しているという夢の話について。新原 紗希が見せたテレポーテーションなんかと関連性があるのかもしれないことを、俺は問わなければいけない気がしていたのだ。

「ガオガオー！」

枕投げとはどういう時にやるもんか知っているかなんて問いかけはしなくともおのずと答えが決まっていることは、世界各国周知の事実とまでは言えないものの日本全国にはまかり通る常識であろうと尊大ながらも考える。

きつと修学旅行、スキー教室、林間学校など宿泊行事でしばしば教師の目を盗んでまでして行われるものか、あるいは一部屋に大多数の人数が泊まれるフレンチコロニアルスタイルホテルのような大豪邸友人の宅ではないかという考えに至るのは間違いないはずだ。

そしてそれ以外に考えられる稀有な可能性としては、何もかもを有耶無耶にしたいときにやるものでもいえるのかもしれない。

——ひゅん。

等身大はあろうかというぐらいのうさぴょん枕が成瀬春彦のサイドを通り抜けていった。あれが当たっても枕は消えることなくお肌に優しい感蝕だけを残していつてくれるのだろう、なんて化粧品の実伝みたいなセリフが思い浮かんでいた。

そうさ、これこそが正しい世の物理法則だよな。

というわけで俺は今、というよりは俺達はこの一般的中流家庭における六畳の部屋で枕投げをしているのだ。もちろんそんなことをするお相手はパイナップルヘアーの我が妹成瀬 アキに他ならない。

この天真爛漫な我が妹は「ガオー」とか言いながらも部屋じゅういたるところから集めてきたさまざまな枕を投げつけてようとしてきて、一発目のそれが外れたら早速「うぐうぐ」なんて変な声で呻うめ

いていた。

だけど、それを見て俺はまたくだらない事を思う。

おまえの本当の名前はアキではなくて亜紀だったのかー？ ティラノサウルスとかトリケラトプスなどの爬虫類大型種族、そういうのを全部ひっくるめた恐竜と呼ばれる種族が我がもの顔で闊歩していた白亜紀の亜紀かー！

——みたいな感じでさ。

しかしなー、我が妹よ。

白亜紀は巨大隕石が落下した気候変動によって生物相が大幅に変化する大変な時期なんだぞ。それでもって白亜紀と新生代第三紀の境目であるK-T境界にその隕石が落ちたとされるユカタン地方——？

うわっと、なんか小早川のことを特別な愛称をこめてユカタンと呼んだみたいになっちゃった。あーまだそれならアキタンの方がいいぜ。そっちの方が可愛らしいし、って別にこれも妹萌えというわけではないからな！

あれだ。誤解を招くといけないから大きく言い訳をさせてもらおうと、妹というのは古今東西共通の萌え要素。妹こそが世界の平和であり世界の中枢を成すべき存在ともいうぐらいバカなやつもいるぐらいだ。俺じゃないけど。だからこそ少しぐらいはそう思ってみても問題はないだろ？

それに良く考えればそうだ。妹よ、今日は雨が降っていておまえの木琴が聞けない、みたいな高尚な詩だって見事な萌え要素を表した歌ではないか。いや、確かあれは妹を大切な人物に置き換えているだけだったか？ あーもしかしたら戦災で亡くなった大事な人を讃美して捧げる鎮魂歌だったかもしれない。

「ガオガオ————！」

——ひゅん。

俺がどんなことを考えているかも露知らずにもう一度枕を投げ放つアキ。

やがてぼやぼやとしていた輩に向かって、「コーン」なんてトウモロコシみたいな効果音でもプレゼントしたいぐらいのクリーンヒット。

ここで俺はゴレンジャーみたいなヒーロ戦隊ものの大魔王らしく倒れようかと一瞬血迷ったが、瞬時に考え直してオスカー女優（あえて男優ではないところは妹のためを考えてだ！）ばりのスーパな演技力で蠱惑的^{こわく}な妖艶さを醸し出すように倒れてみる。

しかし、そんなポーカのフルハウスでは三と七の組み合わせが綺麗だというぐらいどーでもいい俺の演技も虚しく、我が妹はこの永遠のナルシストなる成瀬春彦に枕が当たった時にキャキャキャと喜んでその髪を右に左に踊らしていた。まあその姿を見れば、マイナスイオンを体中にも浴びさせられているような感覚にさせてもらえるからこの妹という存在は素晴らしいとしかいえないな。っておい、コアラ攻撃はやめろー俺にしがみつくなーミシエル……じゃなくアキよ。

ただ、俺は思う。特に今日みたいな、ナスカの地上絵を発見したのかあるいはツチノコを捕らえたのかなんて話では済まされない非日常的な日常を過ごした日には、今の状態がよいクッションとなつてゆとりをもたらし心に潤いを与えてくれるみたいことを。

それでもさ、仕返しぐらいはしたっていいだろ。

「うりゃー」

——ひゅーん。

上腕二頭筋（力こぶの部分）をめいいっぱい張らせて気と精神の高揚を高め、そこで得た力を上腕三頭筋（肩の部分）に移行させて

ハイスペックなひねりを加えたサイドスローで放り投げられた枕のはずだったのだが、我が妹はごく簡単な仕草で身を翻して難なくかわした。

——ちっ、そうだったぜ。

俺の運動神経は地の果てに等しいほどの使えなさだった。それなのにこやつは人の運動神経数値ポイントまで分捕っていったんではないかというぐらい俊敏な動き。まあ、そのかわり少々おつむが弱いけど。

「ガオガオー」

——ひゅんひゅん。

コーン。

コーン。

鈍器で殴られた音とは正反対の軽い音が鳴って見事なまでのクリンヒットが二発、三発。野球なら猛打賞。サッカーならハットトリック。

まさしく俺の心はあびきゅーかーんだー。

「ねえ、ハルくん……あ、え、あ？ えびきゅーかんって、なに？」

「へえ?!」

どうやら俺の心の叫びだったつもりのだが、阿鼻叫喚なんて芥川龍之介の小説にもあったであろう難解な言葉が漏れていたようだった。

「ねえ、なにになにい〜？」

アキはそう言って枕を投げようとしていた動作を止めて爛々（らんらん）としたどんぐり眼（まなこ）を向けてきた。
うむ。こんな勘違いはちょっと面白いから少し話を合わせて傍観（ぼうくわん）でもしようか。

「ハルくんハルくん。も、もしかして？」

「もしかして？」

「それっておいしいもの？」

ピカンと電球が付きそうなぐらに閃いたという感じの表情を見せる我が妹。

「そうだアキ。おいしいものだとしたらなんだろう？」

俺は至極真面目なふりをして、自分が発した言葉に正当化を持たせようとしてみる。

「うーんとうんと」

「む？」

「えーとえーと」

「うん」

「エッ、エビの缶ジュースかなー？」

おまえ、それはないだろー。

だけど俺が肯定とも否定とも取れない雰囲気で首を傾けると、我が妹は良い方に解釈したのか「うわぁ〜それなら飲んでみたいな〜」って言い始めた。

そこでこの瞬間を待っていましたとばかりに悪魔憑きの妖怪みたいな顔をして、「ふはははっ、阿鼻叫喚ってーえのはな、人々が苦しみ叫び救いを求めても助けてはくれない鬼のことだぁー！ 枕投げばかりする悪い子には容赦しないんだー」と。

俺はおそらくナマハゲみたいな要領でアキの恐怖を煽っているのだろう。

「うっ?!」

「どうしたアキ？ アハハッー」

「うっ……」

「どうだ怖いかなぁー？」

すると小早川の百分の一にも満たない迫力のなき睥睨^{へいげい}を見せ、

「こ、こわくなんかないもん！」なんていかにも怯えているように言いだした。

「ホントーか？ 夢の中にまで出てきてアキを食べちゃうんだぞ？」

やはり我が妹はギクッて顔をした。そして今にもホロホロと泣きそうな顔になり始めたので流石に可哀そうになってくる。

もうそろそろ「これは冗談だよ」と言うしかない。で、言っ
た。

そしたらアキはうるっとした瞳を見せてこう畳みかけてきた。

「ハハハハハルくんの意地悪、意地悪、いじわるうー。アキが九歳だからってバカにしてー！ ハルくんのいじわる、ハルくんいじわる」

アキはポカポカと枕で叩きだす。

「ハルくんなんか、ハルくんなんか嫌いだよこの鬼、おにおにおにハルくんくくく」

その「おにー」という我が妹が言い放った単語を、ハピネス風味で解釈して「おにい」と優しく甘えられたような疑似体験を存分に味わう。そしてその後に俺がすることは、あらかじめ組み込まれていた予定調和のように決まっている。

「はいはい、ごめんなよしよし」

そう言っ
て頭をなでなでしてやる。

するとアキは「う……へへへっ」なんて奇妙な笑い声をあげて、

「あれれえ、そういえばハルくん、アキとハルくんはなんで枕投げしているのかなあ？」なんて言い出したので、どうやら手紙の事はきれいさっぱりと頭から抜けていってくれたようだとはっとひと安心する。

よしよし。

ん？

だが俺まで肝心な事を忘れていたのに気がついた。

それは最初にこのような運びとなった原因を頭の中で整理しなければならぬこと。

こんなにも平和な遊戯の発端は一通の手紙から始まったのだ、ということを。

まあ、物凄く重要なことかもしれないし、もしかしたら笑っちゃうぐらい重要ではないことかもしれないんだけどな。

2-6 (後書き)

『ユカリちゃんのゆううつ☆』

この物語は本編とは一切関係がございません。作者の気が向くままに始めたヒロイン応援プランです。

そしてここでは、あのユカリちゃん（若干幼め）が自宅の鏡の精霊ネコミーととりとめのない会話をしているだけだったんですが：予定は未定という言葉によって見事なまでのカオス状態へ。

ジャンル？　こ不条理なパロディーコメディーでした？！　どこかでみたことあるようなラノベのタイトルでありましても気にしないで頂ければ幸いです。

というか作者はもう不条理なパロディーコメディーは挫折気味らしいです。

第三話『灼眼のユカリ』

「もう……サキのバカバカバカっ！　あんなに本編で服まではだけさせてイチャイチャしてえー！　ううぐすん。あたしの見てないところですよこうやってよってたかってハルくんを！　それにそれに、この前香辛料セットをくれたときなんかあんなにも無口系だったのに、こんなにも漢字バカなんて……。あの時ひとつの唐辛子をかじりながらポッ〇ーみたいな感じで誓いの友情チューをしたのに裏切ったのね……（無論、本編ではそんな関係ではございません）」

「あ———っ！ ユカリちゃん！！ 読者の皆様に届けるあとがきゾーンはもう始まっているよ」

「えっ？」

「ほら！ ユカリちゃんってば」

（早くいつものやれよ！ あれをやらないとこのあとがきはいつまでたっても終わらねえーよ）

「べ、べつにあとがきなんか呼んでくれなくたっていいんだからねっ！」

「それと！」

「べつに感想——？！」

『べーべつに呼ばれてないのに、こんにちは、こんにちはー！ここからはあたしがあとがきを読んでもみなさんに、量子学的に基づいたマイナスイオン咒式の乱れうちで単発マシンガンの連射を一発だけぶっぱなしちゃうよっ』

「あーあんたキツネ耳の？！」

『うーうーにゅ？ つれない言い方だなく怒っちゃってるねユーユカリっちはあ、あたしにだってねっ、れっきとした名前があるのよっ、……それは……あっ………、えっなんだっけ？ わっ吾輩はネコであるー名前はまだないにゃー』

『あなたは今回『灼眼のシャ○』パロディーの便宜上、吉田』

『へっ?! あたしは吉田なのっ?』

『そう』

「ってーなんであんたまでいるのよー! あたしを差し置いてあんなにも好き放題やって許せないんだからっ!」

『あたしはこのあとがきをまもるために参上。瞬時概念接近縮地法と物質拡散性振動配置法でここにきた』

「な、なによ。それっ!」 『うう』

『それは……、超自然的形而上状態で相互特定所在地場面を意識的に想起し脳内を高速シャフトパターンに切り替え一時的な体内結晶成長技術により万能細胞を喚起、そして瞬時概念接近縮地法を使用して移動後、無機質物情報統合解釈を利用した一時的な異種半導体空間侵食、耐熱融解値誘導作用に繋げるため単原子分子共有結合系列状態から急激な組成変化を促す振動回転を波及させた物質拡散性振動配置法を使用、それでここに進出した』

「……」 『はてにゃー?』

(なあ、そろそろわしは忘れられてないか?)

「じ、じゃあこの人はなんでいるの?」

『へっ?! あたし?』

「そうよ!」

『ごーご都合主義でーす♪』

『ユカリ、その人の名は吉田』

「なあ、ちょっと待て。鏡の前で君たち三人は何しておる！ あー
無視するな———！」

『で、君はなんていうの名前なのっ？』

『あたしはサキ』

『そうなのっ！ じゃあこれからはサキっちよって呼ぶねっ』

『それは……やめて』

『そうなのっ？ てか、それよりもサーサキっちよ。さっきの瞬時
なんとかってなにっ？』

『……端的に言えばテレポーション。でも、それやめて』

『へっ?! わかった』

「あー！ ちょっとー！ なんであたしまで無視されるのよー！」

『ねえ、サキっち……ていうかサッカーで○ンフレッツチェ広島の控
え外国人選手になんか名前が似ているねサキっち』

（伝わらねえよ、ぜってえーつたわらねえよ……）

『そう?』

『うん。それよりもクルムって何?』

(ネタが古いよ、ぜってえーふるいよ)

『さあ……』

『ねえサキっち——』

「うーニコチリーノ三世。あたし……このままだと主役乗っ取られちゃうよー。なんであの二人本編では邪悪な関係だったのにこんなにも意気投合しているの? なんか裏で主役を奪い取るために合作して作者を買収したのかな。ねえ、ゆううつを通り越してゆううつゆうつになっちゃうよー。どうすればいいのー?」

(てか、名前が……変わっとる!!!!)

「ねえってば……」

「……しょうがないな。ここはわしの世界においての先祖代々伝わるみな注目を一気に引く歌を教えしんぜよう」

「ホ、ホントー。ネコミー。ありがとうー!」



「ではではユカリの歌を聞いてくださいな。って、また無視してるぅー！」

（がんばれ、ユカリちゃん）

『サキっち。著作権ってなにっ？』

『史上最大の難敵』

「ごめんね、素直じゃなくて♪」

『へえ。こわいねっ』

『そう』

「夢の中なら、言える〜……♪」

『ユカリちゃん大丈夫かなー？』

『これからの展開次第』

「思考回路は、ハルクンでショート寸前♪」

（なんか本編のテーマっぽい歌だな……）

『あー、サキっち。こんな音痴な歌聴いていると疲れるからねっ。そのレポーターションで……そうだっ！ 京都へいこう！ なー

んてにゃー』

『了解』

『ヤンデレラ、幸せだって叫んでくれよ♪ 時には俺の胸で泣いてくれよ♪』

（誰かが吉田に憑依したのか？）

ひゅい————ん。（テレポーションの音です）

「いますぐツンってしてやりたいのに♪ あーなんで誰もいないのよー！」

「ユカリちゃん落ち着いて、これで願ったりかなったりじゃないかこれで好きなだけあとがきを——えっ、そろそろ作者が疲れたから『灼眼のユカリ2』ってことで次回にしたいって」

「えっ？ ウソウソウソウソ！ これからシャ○に憑依するから！ 名前もユカリで一緒だし」

（あきらめろユカリちゃん。おとなの都合だ）

「ううゝふん！」

――さて次回は、ユカリちゃんと獣耳先輩改め吉田の三角バトル！
！そしてメロンパンの行方は！！こより伝説はどうなった！！
主人公はどうした！！（過剰な煽り文です）

（なあ、作者よ。こんな乱文ホントに続けていいのか？　そろそろ打ち切りか？）

というわけで次回の『ユカリちゃんのゆううつ☆』は『灼眼のユカリ2』です。

真面目にいいんですかねえ、これ……。こんなスピード感で小説が書けたらこの上もなく喜ばしいことなんですが……。 （笑）

でこちらのほうなんですが、とりあえずいろいろとパロツたのでファンのかたがいらっしゃたら本当に申し訳ありません！（特に歌系）　そして誠に勝手ながらもここ二、三日で2000文字ぐらいの加筆修正を行いました。覗いてもらえれば幸いですがおそらく内容には支障がないと思います。どうかご了承くださいますようよろしくお願いいたします。

ということ、これはあの枕投げにたどり着く前で少し時間軸をずらした話である。

もちろん家に帰り着いてからも気が重かった俺。折角、あの中休みの超常現象から立ち直りの兆しをみせたと思った途端に、あの新原のテレポーテーションを見せつけられたからたまったもんじゃない。

心身は極めて疲労困憊であった。

晩飯を食べ終わってすぐに、それはもうバッテリーエネルギーの充填をおこなわなければならぬというぐらいの勢いでベットへと突っ伏していた。

こうしてしばらくはそのままでいたのだが、やはり新原が渡してきたもんが気になり始め鞆を横に倒してその本と原稿用紙が出てこないかをまさぐっていた。

そしたらコロン。

ふいに鞆から飛び出してきたものがあった。

それは中休みにユカリが渡してくれた手紙だった。

つまるところ、俺はユカリの交換日記風手紙を今の今まですっかりと忘れてということになるのだ。

でもさ、しょうがないだろ？

はつきりいってそれどころじゃないことを体験しちまっていたのだから。

だけどそんな俺でさえも人並みには申し訳なく思っ、ユカリの手紙に向かって一礼をしてから中を読みはじめた。

最初の方は昨日貰った手紙と同じように改行も全く使わないという不自然さで、前日の出来事をただ日記のように――枚挙に遑が^{いとま}無いほどに淡々とした日常生活を取り上げるだけであった。

例えば、朝起きた時にどんな気分だった。朝食はトースト、ベ-

コンエッグ、海藻サラダを食べた。一時間目から六時間目までの授業は内容がこういう風に難しかった。部活でのサッカーはこういうことをした。そんなことが逐一丁寧に記してあるのだ。

しかし、昨日の手紙とは大きく異なったのはその後半部分であった。

今日の手紙の場合は、先へと読み進めれば読み進めるほどに適切な改行の空き具合になっていき格段に読みやすくなっていったのだ。しかも本来ならばしっかりと書いて、俺がおかしな事（実際にはありえないほどのおかしな事は起こってしまったが）を夢想し始めたりすると「いい加減にしなさい」なんて言うユカリにしては、ありえないと言っているほど驚いてしまう文章があった。

——明日は一日をめいっぱい使ってハルくんと遊びに行きたいな。学校の事は忘れて映画見たり公園でひなたぼっこをしながらのんびりしたりしたいんだあー。だからあの喫茶店がある武蔵桜公園の時計台の下で朝の九時に待っているから来て欲しいの。それにね、深く話したいこともあるからね。

その内容になんの意図が含まれているのか定かではないが、今日の一連の流れといいなにか深い関連性があるのではないかとやはり勘ぐってしまう。

これも通常の小早川ならば有無を言わずに強引に連れだしていくのだが、それでも彼女には——例えば、学校の授業はちゃんとこなすなど——実生活をしっかりと優先させるという信条があったよ

うな気がしてならない。だからこのような不可解だといえてしまうパターンはとんと記憶がないのと、それに深く話したいことというのは小早川自身に関することなんだろうかと推測してしまう。

それはただの勘違いであってほしいが。

そう考えつつも、俺がその手紙をもう一度読みなおそうとしてゆっくりと文字を指でなぞっているところで我が妹の登場である。

——ガツチャリ。

部屋のドアがなんの前触れもなしに轟き^{とどろ}ドアが高速で開け放たれた。

そしてなぜかその瞬間、俺は獣耳先輩（で名前はなんだったんだか、結局）と金井が入ってきたときのことが脳裏をよぎってしまう。まあ仕方がないのかもしれない。パブロフの条件反射みたいで情けないのだが。

「ハルくうーん！」

ていうかノックアンドウエイトの手順がどんどん悪くなっていねえーか？

やはりなんだかんだは言っても生きている年数が如実に礼儀作法をきちんとこなせるかどうかに影響するのだな、なんておごり高ぶった思想が脳内を駆け巡る俺。

だがそんな状況にもお構いなしにコンコンとも鳴かないで入ってきた三匹目の非常識なキツネ娘は、普段のそれとはかけ離れているほど鋭い視線を投げかけ、今の状況を達観したような面持ちを見せ始めたのだ。

しかも、「あーっ、ハルくんそれラブレター？　アキにもみせてみせてえ〜」

もちろん俺は脊髄^{せきずい}反射的にこう切り返す。

「だー、だめだ」

「でも、ラブレターでしょ」

「ち、違うかな」

これラブレターか。

たしかに見た感じでは可愛いレターではあるが。
でも違うよな？ そうなのか？

「えー、ハルくんの嘘つきいー。嘘つきはドロボーさんのはじまりだよ」

「だから違うんだよ」

「じゃあー違うならみせて」

うむ。その論理は我が妹にしては正しいかもしれない。

「やだね」

「えー」

「だめだ」

「どうしても？」

「ああ」

「む、お、教えてくれるまで、アキ、この部屋で暴れるんだからっ」

「ああ、知らねえよ」

俺がこう言い放った瞬間、唇を真一文字に結びタコ焼きができるほどにほったたけをふくらますアキ。すると、回れ右をするかのごとくくると踵を返した我が妹はたったかたーと階段を下っていき、その音はこの部屋にまで響き渡ってくるほどのうるささだった。そう、こうなったらもう我が妹の行動パターンは百通りの目が出るダイズを転がしても、実は書いてある内容は全て同じだったんじゃないかというぐらい毎度おなじみの行動を取ってくるのだ。

「おかーさん！　ありったけの枕！」

階下での母娘の会話が聞こえてくる。

「はいはい、アキちゃん。でもね」

「うん、わかってるっ」

「わかってるけど言っとくからね。あまり人様に迷惑がかかるほどは騒がないこと。それとハルー！　あんたがその状況においてすることは分かってるわよねー」

はいはい、グリーングリーンの替え歌でもしてあげればいいんだろ。それに親父はちゃんと帰ってくるんだって歌詞をつけて。……じゃなくて、適度に負けろって事だろうな。

こうして第三百二十六回（まあ数値はテキトー）枕投げ選手権と

いうツールドフランスよりも回数が多く、大相撲場所よりは回数が少ないであろう我が家の正式種目が始まってしまったというのが事の全容だったのだ。



そうやって、後一時間ぐらいはぐたぐたとアキに付き合っていた。枕投げの件に関しては早々と俺の敗北という結果になっていて、我が妹のやつはやはり学校で出された宿題全てを持ってきやがった。でも、ひと通り暴れて手紙の事を忘れていたのでよしとしよう。俺はパイナップルヘアーを見事なまでに作り上げているビーズみたいなヘアゴムの部分――そこを弾くようにパチパチといじくりながら教えてやった。

やがてアキは俺に教鞭を奮ってもらい納得の面持ちでここの部屋を後にして、また一人つれづれと良し無し事を考え夜が更けていった。そうして夜な夜な考え込み丑三つ時とまではいかないものやっぱりあの事で悩み苦しんでしまう。

この激動の奔流はなりゅうにのみ込まれつつもある俺はこれから先運命のいたずらという気まぐれな風に吹かれてしまうのだろうか、または羅針盤を亡くして進路を見失った幽霊船のごとくゆらゆらと流れのままだに翻弄はんろうされてしまうのだろうか、と。

――この表現、どっちも一緒だよな。

こうして俺は幾度となく熱に浮かされたかのように寝ころびながらも思い返し、その場所から見えている無造作に置いてあった鞆は、

すでに異質な物だと物語るような本と原稿用紙が飛び出していたので否応がなしにも目に入ってしまった。

それと結局、新原から受けとった一冊の本と原稿用紙は封印の術でもかけられているのかどちらとも開くことはなかった。彼女の言うとおりならば、明日から学校でという条件でしか開くことはないのだろう。

後、俺の先祖代々から伝えられし古の呪文を淀みなく紡いでみたのだが無駄だったね。まあ、ひらけゴマじゃーダメだと分かっていたけどさ。

そしてもう一つは小早川の手紙とその内容。

この件に関しては、明日学校へと行く気分ではなかったことを鑑みれば良い息抜きにはなるではないか。そうプラスに考えるしかない。

やはり新原が渡してくれた本の内容は気になるが、その前にユカリにも聞かなければならないことがある。どっちが重要なのかは現時点では分からないけど、新原の件は明日から三日以内、つまりは四月二十一日の金曜日までに読んで欲しいといったのだからこの判断で大丈夫だろう。

だから小早川の用事を優先させる方が大事だ。

と、ここまで考えてようやく自分の思考回路をリセットをすることができるよう眠気が襲ってきたようだった。

こんな状態でも睡眠を欲する人間の生理機能に感謝しなくてはならないよな、これはきつとき。こうやって俺は眠りについていった。

3-1 サイン イズ デート

春は冬のいてつく寒さの解放と雪解けとともにやってきて、夏は春の桜の開花の終焉と木々の新緑とともにやってきて、秋は夏の渚薫りの綻びと紅葉の色づきとともにやってきて、冬は秋の枯れ葉落としと寒々しい北風とともにやってきて、そうして春夏秋冬、季節は巡りまた巡り、こんなふう^{ようきゆう}に今年の春もまた何事もなく流れていくものだと思っていた。心では何か風変わりなことや面白いことが起こらないかと悠久^{ゆうきゆう}の時に馳せた想いにも等しい願いのはずだった。

少なくとも一昨日までは――。

だけど昨日、あの小物が体に吸い込まれていくような超常現象と間近で目撃した新原のテレポーテーション。それ以前に、百八十度性格が変わってしまったような小早川の状態。何事もないように取り繕ってみてもやはりそんなことはできやしなかった。

考え悩み、そこから自分が何も生み出せないとは分かつてはいるもののこうしてまた無為に――砂時計を引っ繰り返してはそれを無表情で見つめているかのように時を刻んでしまう。

しかし、それでも朝はやってくる。

別にグレゴール・ザムザみたい^{みたい}にベットの中で巨大な虫になっているのでもなく、太陽が西から登ってくるわけでもない。普段と変わらない何の変哲もない朝。当たり前だとは思いながらも一段と深く安寧^{あんねい}な気分^{やや}にさせてくれる日常の始まり。

動もすれば、余計な焦燥感に駆られてしまいそんなこの現状^{げんじょう}。

けど、こんなイカすみ成分から構成されるような暗褐色^{あんかつしよく}の思索ばかりではいけないのかもしれないな。と、また感傷的な方へと傾いていた俺の気持ちはプラスの方へ、まるでインテグラルの線が指示す振れ幅のように持ち直していくみたいだった。

そうさ、結局のところ小早川にはなんの問題もないのかもしれないな

い。

気になるなら今日、正直に聞いてみればいいじゃないか。なんか心境の変化でもあったか、夢の話はどうなったか、と。

それに超常現象と新原がテレポーテーションを使えるという事実。事情はわからないがこの成瀬春彦というおかしな奴を守ってくれるらしいという事実も付随してくるということ。だからむやみに心配することはないのかもしれない。

つまりは、こう小早川の変化と関連づけてなんかしらの危険が迫っているのではないかと考えるのは、例えそこに新原の噂やテレポーテーション、あるいは別個のものと考えられる超常現象と、時間的な一致があったとしてもそれを相似関係と捉えるのは飛躍しすぎだろう。

むしろ新原が超能力者の類だ、^{たぐい}なんてことをユカリにでもかいつまんで話してやろうか。でも、そうすればブン殴られるだけか？ いや、この際全て話してやるから、ブン殴ってくれよな。

それとそうだ。あまり重要ではないかもしれないが斎藤が薦めてくれた天文観測会の事も話さなくてはならねーな、うん。

「しっかりしようぜ、小早川が待っているだろーが」

いつもより少し遅い朝を迎えた俺は、ようやく体を起こし制服ではなく洋服に着替え始めていた。そう、それはとめどもなく溢れ出てくる思考を制御させるために電光石火で回路を遮断したともいえる。まるで規則的に走り続けてきたハムスターがぴたっと車輪を稼動するのやめるかのごとく、成瀬 晴彦という人物は思考の再起動を断絶的に放棄していたのだった。

「ねぼすけっハルくん、起きるの遅いよー。ねぼすけさんはどろぼーさんの始まりだよっ」

おいおい、おまえはまたそれか。泥棒大好きっ子だな。

俺が入道雲よりもふわふわな気分で階下のリビングへと顔を出せば、今日も今日とて元気な――やはりあのうろこ状の皮の中が黄色でアマゾン辺りで取れそうな『パ』のつく果物のヘアースタイルをする我が妹が、ウインクをしようにも両目を瞑ってしまう失態も気にせずになんか言ってきたのだった。

「ん、今日はな、まあこれでいいんだ」

「えっ、じゃあ今日は行くのが遅いのー？」

「まあ、そんな感じだな」

あながち嘘ではないよな。アキは学校という単語を出していないんだから。

「えっ、へへへ」

「どうしたんだ？」

「え、ないしょ。あ、そうだハルくん！」

「ん？」

「それよりも、まずは朝の挨拶おはようだったね」

「……………」

「おはようございます」

それまできつと良く分かりもしなかったであろう経済のニュースをぼんやりと眺めながら朝ご飯を食べていた我が妹は、わざわざ立ち上がりてってけてーとこっちにまで近寄ってきて朝の挨拶をしてくれた。

挨拶は一日の始まりになりけり。

どうやら今朝は格別に機嫌が良いようである。いやしかし、またそくさと席に着いたのだから気のせいなのかもしれないと撤回しておこう。

「あーおはよ」

俺は淡々と返事を返しながらも妹が何を食べているかを無意識に確認していた。

これは我が家の家庭の事情であって、父さんが海外の単身赴任で母さんは朝早くから仕事というため、アキがしっかりと朝ご飯を食べているかを確認するという作業であった。

お皿にはトースト、ミルク、スクランブルエッグ、温野菜、全て母さんが用意してくれたものだ。それらをちょうど食べ終えたところでヨーグルトラしきパックをつつついている。一応はなんだか聞いてみた。

「アキ、それはなんだ？」

「これ？」といって目の前のカップを持ち上げる。

「ああ」

「朝食リンゴ」

ああ、それはヨーグルトか。

「ゼリー」

「はっ？」

「グルト？」

気になったので覗いてみるとプリンだった。

「——みたいなのを食べてみたいけど、プリンにしたんだよっ！」

「……」

「ふふ、ははぁーい」

まったく……すっかりしているかなんて一瞬だけでも思ったのは間違いだったか。朝からテキトーなことを言い出し変な擬音をかましてくるこの我が妹は、そのうちチャカポコチャカポコなんて踊り出すんじゃないかと心配になるぜ。ってこれ、自分の事をもろに棚に上げているけど。

「で、なんで今日はいつにもまして元氣澆刺なんだ？」

「んとっ、それはね、お母さんが今日の夕飯はステーキだっていったから。楽しみなんだあ」

「ふーん」

だからか、すこぶる機嫌が良いのは。

「はやく夜になってステーキ食べたいなあ。ねえハルくん」

「……………」

俺が少々渋い顔しているのに気がついたのか、

「んっ?! ハルくんはステーキ楽しみじゃないの?」と言ってきた。

だがな、それはな。

今こうやってアキと同じように「俺だって夜のステーキをアルティメット級で楽しみにしているんだ」なんてセリフでも吐いたら、茂みにでも隠れていた超能力使いにうちのめされるぐらいの死亡フラグ的発言かもしれないんだぞ。

括弧笑いみたいな。

「楽しみだねっ、ハルくん」

「あ、ああ……」

そうお茶を濁した俺は、たしか夏に黄色い花を付けていたダリアが植えてあるほうのベランダにまで行って、外の空気を吸おうと窓を開けた。

その時、妹はちょうどプリンを食べ終わったみたいで手を合わせて「ごちそうさま」なんて言っていた。こっちもそれに呼応してなんとなく厳かな気持ちで「おそまつさまでした」と言ってみる。

もちろん俺が朝食の用意をしたわけではなく母さんだ。

と、そう思いながらもあのナルシスト台詞を言うような角度で右手だけを空に向かってかざす。

ダイヤモンドの鉋物みたいな大きな太陽から燦々（さんさん）と降り注いでいる。肉眼だと灼かれてしまいそうな天の球体。そして少し仰ぎ見れば、まるで弓弦の広がりのごとく澄み渡った蒼穹^{そうきゅう}が垣間見えた。

そんなのが遮った五本の指の隙間から伝わってくる。

その青空には、主食に添えられたパセリ程度の慎ましきですじ状の巻き雲がひよろひよろとろついている。

あれならアキでもクレヨン、クレパス、クーピ、色鉛筆などなんでもござれで描けそうな空だ。

「あれれえ、そういえばハルくん、なんで洋服を着ているのかなあ？」

不意に我が妹が問いかけてきた。

「えっ？」

「きょうは洋服記念日？」

なんだかサラダ記念日みたいじゃねーか。

「まあ、そんなとこだな」

「ふうん。ねえハルくん。アキはね……、うん、アキはね、早く大人になって制服を着たいんだ」

そうか、制服が大人か。

俺にもそういう気持ちになったことがあったな。

「あっ、でも――」

突然押し黙ってしまった我が妹は、未来を語る朗らかさがなくなり表情にも影を落とし始める。

「ん、どうしたんだよ？」

「――アキ、バカだから。ハルくんみたいにしっかりと宿題ができる大人にはなれないのかもしれないの」

「なっ……」

おいおい。大人は宿題なんてないんだぞ。それに俺だって次々に発生する懸案事項に対処するための宿題が未解決で、しかも下り坂道を転がしている雪だるまか消費者金融への借金を^{たらい}盪回ししているかのごとく膨れ上がっているんだぜ。

しかし、だな。まあ、我が妹のために景気付けにやってやろうか、あれを。

「え、あ、うーう、ハルくん、どうしたの？」

不自然な動きを取り始めた俺の様子を訝しげに窺うアキ。だがもう発動しているのだよ。

「いいか、アキ。人は常に未熟な過去の挑戦を受けて立ち向かわなくてはいけないんだぞ。そしてそれに打ち勝ってこそ成長という名の階段を登り大人へとなる。バカだと思うのなら精一杯抗えば良い。自ら向上しようと試みこの意識を持ち続けてい^{はびこ}れば、世に蔓延^{はびこ}っているどんな森羅万象だって、もちろん宿題だって見抜けるもの

なんだぜっ!」

「――あっ、あちゃー」

そこにあるのは見事までの困惑顔だった。まったく我が妹はアホ兄貴の詭弁きべんを見抜く能力に長けていることだけは認めざるをえないな。

「ハ、ハルくん、おっかしいなー」

こういうわけでやっぱり獣耳先輩を勘違いさせたようには上手く行かなかったのであった。ていうかあの人の存在もこのうえもなくイレギュラーなだったはずなのに、小早川と新原のせいでインパクトが薄くなっちゃった。

「ほ、ほら、遅れるから早く学校に行けよー」

「う、うんっ」

あーあ。階段を駆け上がるけたたましい音が、今の俺にはナルシストな言葉としぐさに対する止めてくれという無言の圧力のようにも聞こえてしまうね、と悲しく思いつつも窓を閉めていた。

「ハルくんっ、用意できたあ」

あれから二、三分を経て準備を終えたのか、赤いランドセルを背負いながらも「ハルくんが見送りなんて嬉しいな」と微笑みかけてきた。

そうだよな。いつもは先にでるか一緒に出るか。我が妹はしっかりとしたカギっ子だ。だから泥棒のことばかり気にするのかもしれないのか？ まあ、できるだけ一緒に出てやるようにはしているが。

「ほら、玄関まで来てっ」

そう言われた俺はなすがままに引っ張られる。

そしてアキは巢を旅立つ小鳥よりも軽やかな調子で玄関を飛び出したのだが、

「いってきま——しゅ……？」

と、噛んじまったから可愛らしくも台無しである。

「しゅ？」

「いつ、いついってきま——すっ！」

そこまで赤鬼みたいな表情で大声を張り上げてまで言わなくて良いぞ。ちゃんと聞こえているのだからな。

「いってらっしゃい」

俺が玄関先で優しくそう返した時、我が妹はなんとも形容しがたい——一種の子供が見せる何の屈託もない笑顔で喜びの感情を爆発させていた。

そして、母さんとの約束も守らずに隣近所三軒先にまで菓子折りを持っていかなければいけないほどの大音量で、

「ハルくん。いってきま——す

!!!!
」

俺は思うね。

たまにはこういうのもいいな、と。

しかしだ、アキ。朝からそんなテンションでやっていけるのか？

まあ、子供だからそんな心配する必要は皆無なのかもしれない。

そんなことを呟きそうになりながらも、同時進行で腕時計を覗き込み今の時間を確認していた。

さあ、俺も待ち合わせに遅れないように行く準備を整えようか。

3-1 サイン イズ デート（後書き）

背景描写を模索しすぎたのか、主人公の文体がキョン離れしつつあるこの現状。

良い方向へと流れるのを祈りつつ、また統一性を持たせるためにも序盤の修正を施すのだろうか……。

なーんて心情で文章の推敲に走ってしまいそうです。どうしたらいいものですかねえ……やれやれ。

万歩計でも括りつけたら関東一円は制覇しているのではないかというぐらい長年付添ってきたこの我が愚足（息？）なるランニングシューズ。だからこそ、たとえその靴紐が切れていたとしてもさして問題はないのかもしれないが。

しかしだ。

なぜ今日に限ってブチィーと切れてしまうわけなんだ？　これは俺の血管でも切れちまう前兆なのかよ。こう考えると特に要注意は鼻であると思ってしまう俺の安直な考えに反吐^{へど}が出そうにもなっちまうが。

それにしても別にえっちらほっちら険しい山道を歩いていたのでなく、そこらじゅうにそよいでいた風を背に従えて颯爽とチャリンコに乗っていただけなのにな。

しかもこんな四月の良く晴れた朝に、ほのかに俺想的な百パーセントの幼馴染と学校をサボタージュして会うことについての考察をしていたときにだ。

あー、今この瞬間で世界中のブッチとした人を集めて靴紐切れた人協定同盟を結んだら、そんな中でいの一に不幸が訪れるような気がするね。もう全会一致の拍手喝采で称賛されるぐらいにな。

だがこうして不自然ともいえる出来事をやっかみながらも、十分後には無事公園に着いたのだから良かったのかもしれない。

現在の時刻は八時五十分。予定よりかは少し早めに到着することができた。

ここ武蔵桜公園は外周したらハーフマラソン弱ぐらいの距離はあるだろう広い場所。

敷地内には入学式の直後に行った『葉』という名の喫茶店があった、体育館なども備えつけられていて、しかもほぼ全面芝生でありボートが漕げるような池まであったりもする。

やはり都内随所の公園で大きさの規模や雰囲気、どれをとっても完璧だ。

そして、今はもう通学路として利用するがやがやとした生徒達の喧騒もなく、聞こえてくるのはただ蛍光色のボールをポーン、ポポーンと打ち合う音だけ。きっと卒業単位をしつかりとり終えた大学生か定年された年配の御方がテニスコートを悠々自適に使っているのだろう。

俺は小早川との待ち合わせが時計台だったはずと再確認する。

ようやくそこまでたどり着き、公園内の自転車道を縦横無尽にオーバドリフトで駆け回りながらも、ディングドンと小さくベルを鳴らしてススススイッシュとブレーキを掛けてみた。

と、そんなふざけたことをしながらもチャリンコから降りて辺りを見回してみると、その時計台の反対で俺よりも早く来て健気に待っているユカリっぽくない小早川が立っていた（訳わかんない表現だが）。

その天使のユカリ姫の格好はまるで楚々（そそ）とした美少女といった感じで、白を基調とした清楚なワンピース風の格好に、薄めの黄色やオレンジといった暖色系統をアクセントとして加えたチュニック丈のカーディガンみたいなのを羽織っていた。さらにいつもの長い黒髪は、はんなりとした京風大和撫子か使うべきであろうかんとざしのようなものでサイドと後ろをゆるやかに結んでいて、なにか並々ならぬ決意を感じさせるような――しかしそうでもないような風変わりな髪型をしていた。また、胸には十字の形をした、どこか見た事があるような気がするペンダントもおしゃれに光らせている。それに左手に持っていた綿密に編み込まれているであろう底の深そうなフルーツバスケットが、お弁当的アイテムといった期待感を抱かせてくれるのだ。

まあ、俺がとやかく述べることもなくばしつと言ってしまうえば、そこには百二十パーセントの幼馴染が優美に立っていたといえるのだろう。

「よっ、紫」

「あっ、おはよー」

そうゆるやかに振り向いた矢先、ほのかなラベンダーの香りがそよ風よりも優しく鼻腔をくすぐった。

「ん。おはよ、待ったか？」

「ううん、今来たところ」

ユカリはいたずらな笑みを浮かべてそう言った。

「それ、ほんとか？」

「ってやりとりがしたかったの」

「なんだよ、それは」

「だってね、ハルくん。待ち合わせっていったらそれが定番なんだもん。女の子はそういう待ち合わせが大好きなの。予定より少し先に来て何分か待ってみて今来たことか、それかわざと遅れていてごめんね遅くなっちゃたとか」

うむ、なんとなく分かる気はするが、まるでデートみたいな高揚感じゃないか。

「じゃあ、その言い方は――」

「ううん、今来たところだよ」

今度は心底嬉しそうに微笑んだ。

「そうか。それは良かった」

「でも、今日は晴れでよかったなあー。雨だったらしようと思って
いたことできなかったもんね」

「そうなのか？」

「うん」

「で、早速なんだけどさ、わざわざ手紙に書いてまでしてどうした
んだ？ 携帯でも有無を言わさずでも良かったのだが」

いや、そこまで思っていないのに言っちゃった。

「あー、ハルくん。無理言ってごめん」

「あ、あのな、これ……んと、別に攻めているわけではないんだぜ」
この辺の感覚、ユカリらしくない。だから調子が狂っちゃまう。

「うん。分かっているけど」

「で、ほら手紙に記してまでさ、なにをするんだ？ それに話とか」
それを聞いたユカリはタイミングを測るかのようにたっぷりと間
を開けて、

「それはね、ちょこっただけ悪いことしてみたくなっちゃたんだあ、ハルくん。だからそのための方便なの」

ころつと首を傾けて見せた笑顔には昨日まで苛まれていた不安の全てを帳消しにしてしまいうぐらいの破壊力があって、俺は呆けてしまう。

例えば一般の男子高校生たるものの街頭調査アンケートでさりげなく青春を感じさせてくれる異性のセリフ部門ならば、堂々の一位になっちまうぐらい言われたいセリフかもしれないぞ。ホントだったらこんなふうに変わったのは諸手^{もろて}を挙げて喜ぶところかもしれないねえーが、しかしそうは問屋がおろさない事情があるのは残念でたまらない。

するとユカリが「め、迷惑じゃなかった？」と言葉を繋げる。

あー、俺はこんな野暮な事を言わせちまうぐらいボケーっとしていたのか。

これではまるでダメなペケ人間だと瞬時に判断し、とりあえず目の前のお嬢さんが「このナルチューー！　バーカ！　別にあんたとなんて好きでこうしているわけではないんだからね、そんなこといってると手首をぎしぎしと捻^{ひね}るわよ！　勘違いしないでよね！」なんていいそうなセリフを探し出していた。ってなんでだー？

「なわけないだろ。紫、知らねえーのか」

で、またこれだ。巢に帰る帰属意識の習性にも似たたちどころに自分の落ち着く展開に持っていこうとする単細胞な俺。罵倒したかったらしてもよいぞ。てか、してくれー。ってなんでだー？

「えっ、なにを？」

「――人生ってのはな、思い出を作るために生きているんだぜ。気にするな」

だがこうは言うものの、昨日からすでにおもいつき異次元なレールへと方向転換している俺は、この点に関して言えば判を押された刻印のように思い出として残り続けるのだろう。最悪、思い出ではすまされないかもしれないが。

そしてユカリはなぜか納得したような面持ちで、

「うん。ハルくんがそういつてくれるなら、あたしががんばるよ」と唇をかみしめるようにいうから困ってしまう。

いつもだったら罵詈雑言の嵐であるのだが、俺の言葉に疑いを持つこともなく……つまりは何をがんばるのだ？ ユカリよ、ということになっちまう。

「――これからの思い出づくりに」

一か月前の小早川なら絶対に言わないセリフである、やっぱり。だから俺は相反する二種類の感情を抱えつつ、少し遅めなまどろみの朝に決意をしたようにこう切り返す。

「なあ、ユカリ。ホントはさ、こんな状況はこのうえもなく嬉しいんだが、聞きたいことがあるんだよ？」

「ん、なあーに？」

「あのさ、うんと……」

「ん？」

「なんかおかしいことは起こらなかったか？」

「えっ？」

なに言ってるだろう、といった心底不思議そうな顔をしているユカリ。

「ほら、なんて言えいいのか、えーとき、――例えばな、新聞のページ全てが総理大臣の微笑み佇む似顔絵で埋め尽くされているとか、キプロス共和国が実は三十八カ国からなる魔界都市だーとか。サウナで眼鏡をかけながらピポランテ・さぷらいちえーんまねじめんと、なんて言うと言汗作用の数値が大幅に上昇するとか、実はプレイングゲームの勇者が魔王の脳みそだったとか、そんなレヴェルの嘘みたいなくっだらないノリでさ、夢に襲われて現実世界に影響を及ぼしたなんてこととかあったりするか？」

この時の俺はきっと不必要にも顔を強張らせていたのだが、小早川は一ミクロンも警戒することなく光の粒子が全て彼女に集まっているのではないかというぐらいの輝かしさで、そして優しげにこう言った。

「うー、うんとっ、そういうこと、さしあたってはないと思うけどな」

「……………」

「むー」

「え？」

「むー」

不可解な表情を向けるので、

「あつ、ほら、前にそんなこといってなかったか？」と言ってやった。

「えっ、あたしそんなこと言ったっけ」

気のせいだとしたら俺は相当いかれていたことになる。前からかもしれないが。

「んーごめんね、よくわからないの」

怒鳴り散らされることもなくそう呟かれたので、やはりペースを乱されてしまいひとまずはそれっきりにして置いた。そしてもう少し建設的な聞き方ができやしないかと頭を悩ましてみる。

あー、とりあえずはこんなギミツク的な聞き方ではなくてもっと分かりやすい表現しなくてはいけないなー、なんてさ。

結局霧に靄^{もや}を追加したような不透明さを残し、やはり俺の隣でまさに完璧な幼馴染となってしまうている感じの女の子がカタツムリとは似ても似つかぬ軽快な足取りで歩いているので、なんとなくクリスタルみたいなふわふわゆらゆらと定まっていなないこちらの心情が申し訳なく思えてくるものだった。

しかもユカリのやつは意識的にか無意識的にかは知らないのだが、俺こそがおかしくなっているはずなのにそんなことを責めるような様子はおくびにも出さない（この表現はレディーに使う表現ではないか）で、今度は無邪気なオーラ醸し出して遊歩道のタイルで色のついている部分をふみふみながら飛び跳ねていたのだ。そして。

「ハルくんっ」

俺より二、三步先を歩いていた小早川がこちらよろしくとポンって振り向けば、持っていたフルーツバスケットとお嬢様風ゆるゆるヘアーのような髪型が同じような動作で揺れ動く。

「今日は、あたしにまかせて」

そうかわいらしく宣言した様子はさっきのことをなかったことにしてしまうわけでもなく、至って自然な振る舞いで飛び出してきたセリフのようだった。

「ハルくん、いいかな？」

「――ああ」

ユカリの属性であった強引さそのものをにじみだすこともなく今の彼女の状態ならば別段反対する理由もないし、これからとんでもなく由々しき事態に発展するわけでもないのです、ここは事の成り行きに任せようと傍観することをなし崩しの決め込んでしまおう。

そうやってやはり変わってしまったのか小早川は、なんて思いながらも様子をちらちらと確認しつつ、俺は自転車を引きながら鼻歌でも聞こえてきそうな軽やかなリズムで三歩先に行く彼女に従って着いていった。

でもって付いた場所というのはやはりボートが漕げる公園内の池であった。歩いている時点で多少は勘づいていたのだがまさか予想通りここであるとはな。

「あたし、まずはここのボートでのんびりしたいと思って」

「ああ、わかった」

「あつ、でもこれからの予定は気分なんだけどね、ハルくん」

たったっピョンと弾むような足取りでチケット売り場へと進んで行くユカリ。

「後悔しないように今日一日頑張ってみるからね――」

言葉の端々に若干の違和感を匂わせていたのは気にはなっていた。しかし俺はというと別のことを考えていて、以前に一度だけユカリとボートに乗った昔の事を思い出していたのだ。

『ナル！ 折角近所に広い公園があつて池のボートがあるんだから、一度ぐらいはあたしと一緒に乗りなさい！』

『はっ？』

『だっ、だからっ！ あっ、あっ、あたしに付き合いなさいよ！』

『なあ、小早川……。俺は女の子という存在はすべからく大切にすべきだという岩石よりも硬い信念の意思を持っているんだがな、ある一つの事例だけはそれに当てはまらない場合があるんだよ――』

『……な、なにをいつているのよ』

『それはなんでもかんでもいきなりに物事を推し量ろうとする人で、それをなんていうか知っているか？』

『な、なによそれ……。』

『それはな、藪から棒にっというんだよ』

今考えてみるとこの言葉の使い方は違うだろうが。

『つまりは、ユカリの――』

『や、藪から棒にじゃないっ！』

『じゃあ、なんだよ』

『なんでもよー』

『だいたいなんで俺が……？』

『……なんでもよ！』

小早川はおもいきり舌を出してベエーって言った後、人造人間が首を三百六十度以上回転させるかのように首をおもいきり振って、その長い髪の毛がパサーと自分に覆いかぶさるのも全く気にせず視線を反らしていた。

だがその時、俺もまけじと発言してやったのだ。

『いいか、ならばこんな話があるぞ小早川。この池で一組の男女がペアになって乗るとこれからさき仲良くやっていけないんだってさー』

『………』

『どうした？ 黙りこくたっりなんかして』

するとユカリはあたふたしながら、

『べ、べつにそんなことないもん！ それにどうせあれでしょー、そうやってまた適当なこと言っただけでしょー！ そんな話信じるわけないよ。それにねナル、だいたいあたしは、湖上からの眺めや素晴らしいさを堪能したいということと、将来こういう場面に出くわすことがあるかも知れないためのシュミレーションという真っ当な理由があるの！』

だからこれぽっちも仲良くしようなんて……けっしてナルみたいなバカとここに来たかったわけではないんだからね！ つまりはね、うーんとね、男女がペアになってどうなることは、あたしとナルにとっては関係ないことなの。見当ちがいなことじゃないですよ！』

もちろんこの時いったことは、都市伝説の要素を含めて話をメタ的展開にしようと飛躍させたでまかせだった。まあ、こことは違う公園では池でボートを漕いだらカップルが分かれるという話はあったりするのだが。それも俺達には関係のない話だろう。

『だから、とつくべつにナルで我慢してあげるんだから少しは喜ばなさい』

それで結局はこの支離滅裂な締め言葉と共に反論の余地すら与えられず、俺とは桁違いの暴力指数を持ち合わせているユカリが見事なまでにその力を発揮して、半ば強引にここへと連れてこられてしまったのだった。

だが、いざそこに行ってみればその考えも百八十度改めなければならなくて、ボートに乗ってから見た景色が世界の色をこれでもかかっていうぐらいに清澄に変えた橙の夕日を――限りなく幻想的な風景を映し出していた。

その黄昏模様の景観を眺めながら、例えばあの観光地で有名なヴェネツィア地方でのゴンドラの景色はこんな感じなんだろうかと至極単純に考え、ベニス商人がどういう話だったか、ああそれは肉を一ポンド、ただし血は流さずみたいな話だったなと思っていた。やがて、そんなどうでもいいことが脳裏を掠^{かす}めて通り過ぎていったとき、俺はこいつのじゃじゃ馬がなくなればどんなに喜ばしいことかを改めて確認していたのを覚えている。だが不覚にも、あの長いぬばたまの黒髪を風になびかせて「えっへん」とでも言いたそうにしている姿が、切り取って写真に収めたかのごとく記憶に残っているのだった。

「ほら、はーやーくハルくん、考え事なんかしていないでー」

そう言ったユカリは俺の手を優しく引っ張ってボート乗り場まで誘導する。

「ねえ、ハルくん。あたしね、一度でいいからこのボートにハルくんと乗ってみたかったんだよ。ずっと楽しみにしていたんだ」

「……………えっ」

やはり俺はユカリの言葉の使いかたを疑問に感じてしまう。しかも今日このボートに乗るのは初めてなんだ、とでも言いたげな視線。確実に悪ふざけの範疇ではなかった。またこの変な感じに精神が蝕ばまれていくようだった。

「ん？ どうしたの？」とユカリ。

だがな、小早川。ホントはその言葉をそっくりそのままご丁寧返したいんだよ。

「ユカリ…………」

しかし——俺の発言が空中分解してしまうように、

「ほらっハルくん。早く乗ろうよ。であたしね、まず最初にしたかったことはボートに乗って二人でオールを漕いでみたかったことなんだよ」と返された。

この言葉を聞いてまた過去の言葉が訴えてくる。

『ナル、あんたは男なんだからオールを漕いで、それであたしは優雅に構えるのよ』

この運動音痴な俺にのたまったことを。

「それでね、一緒に汗かいて頑張った後は、ハルくんが後は俺に任せろとか言ってくれたりしてー、緩やかにボートを漕いでくれたらいいな」

また――、

『で、しょうがないから、ナルがへばったらあたしがあんたよりもっと早いスピードで漕いであげるんだからね』

俺の記憶の彼女と今の彼女のセリフが詩の対句のように繋がっていく。

これは、小早川の短期記憶が抜け落ちているのか。それとも――。しかし、まずいことが起きそうな気配は今の状況ではさらさらないというこの第六感だけは正しいような気がしていた。

なにせこんなにも晴れ渡った空が待ち構えている。

そんなふうに思い直しているとユカリがもう一度手を引いてきた。とにかく今の小早川に、昔ここにきてボートに乗ったことでもさりげなく聞いてみるしかないのだろうかと考え、俺達は歩幅を合わせていた。

3-3 (後書き)

『ユカリちゃんのゆううつ☆』

この物語は本編とは一切関係がございません。作者の気が向くままに始めたヒロイン応援プランです。

そしてここでは、あのユカリちゃん（若干幼め）が自宅の鏡の精霊ネコミーととりとめのない会話をしているだけだったんですが：予定は未定という言葉によって見事なまでのカオス状態へ。

ジャンル？ 不条理なパロディーコメディーでした？！ どこかでみたことあるようなラノベのタイトルでありましても気にしないで頂ければ幸いです。

というか作者はもう不条理なパロディーコメディーは挫折気味らしいです。

——と思ったんですが本日は気まぐれでそれをパスしました。そして――

『なるせくんのゆううつ☆』

（注、コメディーではありません）

最近作者が微妙なスランプに陥り文章を紡ぎだせないでいるらしいということは、更新の鈍足具合から判断するに明確な事実であっ

て、そうするとこっちの出番までなくなっちゃうから夢の中でこう言っちゃったことをここに明記しようと思った。だからこそ俺は、

「そういうときは笑えばいいと思うよ、綾波」

と言っちゃったのだが……。帰ってきた言葉は、

「そういうときは読書をすればいいと思うよ、綾波だろーが」と作者に返されちゃったのだよ。

あーあ。意味不明。ってか綾波は消えないんだな。

なーんてこんな不毛なやりとりを思いついた俺は、例えば現実世界を破壊するような塩害に襲われるがそれに立ち向かう話であったり、小学生になって次々に起こる殺人事件を解決したり、「おにーちゃん」って言われたり、「おねーちゃん」（ん？）って言われたり、そんな主人公のキャラを望んでいたのにまったくのそうにもなりそうにない展開に、一言モノ申そうかどうか悩んでいたところなのさ。

つまりは今の気分を一言で表すならば、憂鬱で溜息をつきたくなり、退屈で消失したいような気分であり、暴走したらまわりのみんなが動揺するだろうから……って脈絡の無い前置きはこのへんにしておいてそろそろ本題にいかねばならんな。

実は作者がハルヒ文体を九割マネして、残りの一割似せて書いて（ということは十割の模写か?!）いたのだが、どうやら最近方向性がずれてきたらしいのだ。

これも例えばの話だが、この前やつとこさハルヒシリーズを全て読み終えた作者が、これは唯我独尊的ヒロインのお話からヒュマノイド無口系に主体性が置かれ始めたような気がしないでもないと思

わないかどうか……、それで結論として『憂鬱』が一番面白かった。

っていう独白はチラシの裏に書いてくずかごに投げ入れるぐらい
どーでもいい話なのでこちらで割愛して、どうやらハルヒ十割の
模写文体を改め（ていうか4章あたりからその傾向が）、五割ぐら
いになるらしい。まあ、俺にとってはしらんこちゃながな。

でもって、残りの半分はあるラノベ作家の三人称（今後の新原の動きでその作品がバレルかもしれない。というか気づかれた人がいましたら驚愕です、作者が喜びます）を少し取り入れ、形づいてきた俺の性格設定とごちゃまぜにして文体のるつぽとかしていくらしいのだよ。

あー、まったくもって不肖な作者だね。

俺の今までナルシストが受け入れられなかったようにゆううつなだよ。

どう進んでいくのかねこの話は……。

やれやれ。この後書きはオチがないな……。

まっ、いっか。人類全てが平和であつたらな。

——というなが——い立て札を二条河原で目にしたような気持ちで読んでみましたとき。ちゃんちゃん。

それから一時間半弱。

俺達は定番通りにごく一般のコースをゆったりとまわっていた。

そして前述の通り俺が質問をして、ユカリが「初めてここに来たじゃないの」といったささいな異常発言以外は、特に何事もなく普通の会話をしていたことになる。

そこで今は、池の中心部で——もしこの池の表面積を円で表そうとするならば、きっと巨大なコンパスの針が俺達の遊覧船に穴を開け沈没させてしまうぐらいのコアな場所——休憩を決め込んで、ボートをぷかぷかと浮かべ漂わせながらボーと時を過ごして二、三分が経っていた。

「ハルくん、空ってなんで青いと思う？」

ここでユカリが、ぼんやりと空なんかを眺めながら哲学めいた質問を問いかけたことに驚き、うわの空だった俺は「え」といったのか「ん」といったのか分からない曖昧な返事を返してしまう。

「どう思う？」

月、火、水のここ三日間では、つまり最近のユカリにしては珍しく有無を言わせぬ口調だった。

前までの俺と小早川ならば、こっちがしゃちほこばって「人はな、奇麗なものしか見たがらないんだぜー。だから空は青いんだよ」とナルシストよろしくなんていえば、あいつが「このナルチュー！」って頭に湯気を出しそうな——そんなやりとりをするのだろう。

あるいは別パターンとして「太陽の光が地球に届いた時、一番光が拡散しやすいのが青なんだよ」なんて蘊蓄^{うんちく}を呟き、「いい加減に

してよね！ このバカ」って腕のないお笑い芸人よりかははるかに素早い突っ込みが返ってくるのかもしれない。

ていうか、そもそもこんなこと聞くわけがねえーよな、小早川は。だがそうやって思い悩んでいるとユカリが、

「昔、ハルくんに教えてもらったんだけどな」

と呟き、俺は「ん」と呻^{うめ}いて首をもたげてしまう。でも構わずに続けて、

「空が青いのは海の青が写っているから、っていつてくれたでしょ。それはどこまでも続いていて壮大なスケールで、計り知れないほどの世界が広がっているっていつてくれた。そしてあたしはそのお話に納得した」

なんとも抽象的でメルヘンに近いことを言う小早川らしくないユカリ。

しかも記憶力には長けているとはいえないが、俺の海馬シナプス経路をいくらあさっても送られてくる信号はそんなことをいったかどうかは不明とのことだった。

「なあ、ユカリ」

——どうしたんだ？ おまえやっぱりおかしいぞ？

と続けそうになる言葉を喉^{りゅういん}ぼとけの辺りで溜飲^{りゅういん}とともに飲み込んで、俺はまた考えを改める。

これって幸せなことだ。絶対幸福の範疇には入るはずだよな。

「ハルくん……？」

それにこうやってこめかみを押さえてまで物憂げに耽ってしまったバカを見て、対面の優しい幼馴染のお穰さんは蒼白な顔で眉間にしわを寄せてまで心配してくれるらしい。

だけど、なぜか胸に押し寄せてくるそこはかとな^{せきりよう}い寂寥感。拭えない虚無感。どうかですべてを見透かされているような——でもおかしい不透明感。

「また、ボケーっとしてバカじゃないのー？ このナルシスト！」なんて幻聴感。

あーあ。少し前まで俺が楽観的性格であつたのは久遠の昔に栄えたメソポタミアとかの四代文明を間近で感じているぐらいな冗談ごとみたいだ。

「ハ、ハルくん、あたし、なにかまずいことでもいったかな？」

ユカリがますます心配し始めたのかぐいと顔を近づけて覗き込んできた。

しかし——、

俺の気持ち分銅を移しかえしている天秤のようにふらふらとしているのと同様に、ユカリという分銅がボートのバランスも気にせずこちらのほうへと重りを追加したため、

——ぐらっ。

そしてその瞬間、彼女が「わっ」と小さな悲鳴を挙げもたれかかってきた。咄嗟にオールを離してユカリを支えようとしたが、俺には運動神経に関するそのようなハイスペックさは相変わらず持ち合わせてなくしっかりと押しつぶされてしまったのだ。

小早川は、「あっ、ハルくん……、ご、ごめんね」

いいながらコロンと狭苦しいボートで俺の横に寝転んだ。

髪の毛先が頬をくすぐる。

それは、テレカ三枚横に繋げた大きさ分の距離。
しばし視線がachiあい。

間。動きに動けなく。

照れくささで顔がはにかみ、意味もなく剣呑な表情でも浮かべようかとする。

が、その試みももちろん上手くいくはずもなく。

今上空からここを見降ろしたら水面に大きな波紋が広がっているのだろうか、なんて揺れるボートと思考が入り乱れて消えていき。

「あのね、あたしはね、ハルくんに言いたかったことが——」

髪の毛先が頬をわしゃわしゃさせ。

テレカ三枚厚さ分の距離になっていく。

だが、ゆるやかな流れる裕福な時間にまたあの音が、

——ひゅん。

「……?!」

それだけではなくまた、

ゆっくりと、

『だいじょーぶ、まだへーき』。

ゆっくりと迫って、

『だいじょうぶ、まだへーき』。

ゆっくりと迫ってきて、

「ぜっ————たいに言いたかったことがあるんだ」

小早川の声が霞んで聞こえる。

そして――、

小さな、でも大きな存在の、小さな小さな女の子。

あの新原の言葉がわんわんと反響する。

襲ってくる。

心拍数上がる。

時計を見た。

十時三十八分で針が――

「それはね」

息を殺して飛び上がり、水面ばかりが広がる周囲を見渡す。

「どうしたの?! ハルくん!」

『だいじょうぶ、まだへーき』

ユカリは気がつかないのだ。

さらに扇情的な気分が増していくこの感覚。

なんでだ? やはりユカリは気がつかない。

なぜだ? またか。どうすればいいんだ?

俺にまたあの感覚が襲ってくる。

昨日の中休みに起こった「こんにちは、局地的ポルターガイストさん」。

そしてユカリの胸の十字のペンダントが救いを求めてきた。

が、俺の体に吸い込まれていく。

が、ユカリはそのものが始めから存在しなかったかのように気がつかない。

「なあ、ユカリ」

声が震える。不安定な気持ち。

扇情的な気分がさらにこみ上げてくる。

ユカリよ。今の不安定な状態ではどうにかなってしまいかもしれないぞ。それにいくら幼馴染とはいえどおまえのその体勢。成瀬春彦というしょうもない遺伝子は本能のままに動いて抱きしめ、翌日にはおたふくかぜよりさらに酷い頬を腫らしてしまうほど嫌がることをしてしまうかもしれない。

この不安感を拭おうとするために。藁にもすがりたくなるような中途半端で最悪の心境だから。

しかし、ユカリまでなぜか物憂げな表情をうかべて――。

と、そう思った途端に胸の奥底で燦っていた火花みたいな――いや、そうとはいえないが何か癩癪玉みたいなものが弾けてしまったような気がした。心のずっと内側に抑圧していたものが耐えきれなくなっていく、超常現象だの新原のことなどがいつしよくたんになってしまったかのごとく別の感情を、とぐろを巻いたようなどす黒い感情を吐き出してしまう。

「なあ、ユカリ！」

声のトーンに違和感を持ったユカリの様子も気にしないで、横向けに寝ころんでいた俺は女の子らしく腕を無造作に置いてあって同じような体勢でいた彼女の手首を掴んで、こう言った。

「ユカリ、どうしておまえ……なんで、どうして変わってしまったのか？　どうして、あのまま、おまえ、ふざけてるのかよ」

「えっ？」

筋違いなのは分かっている。

それに俺だって自分に待てよ、と言いたい。ほんの一月前ではこんな幼馴染を望んでいたんじゃないのかという気持ち。どうし

たんだ。

さつきから発想も思考も言動も行動も全て支離滅裂。自分の中で相まみえるかのような肯定と否定を交互に繰り返す二つの個の存在が二律背反的にしのぎを削って争っているようで、まるで自分の意思とは別個に存在するドッペルゲンガーを心の中に飼っているみたいな異質の気持ち悪さ。そして、今しがた起こった自然科学の知見では明確な説明がけっしてできない現象をまた受けて、堰せき止められていた感情の防波堤がなだれ打つように崩壊して心の中でドッカーンと炸裂音が響く。

「なあ、どうしてだよ？ 日記帳みたいな改行もロクに使わない手紙といったやり方。どうしてそんなまどろっこしいことするんだ！ これまでみたいに、そう、これまでみたいに放課後、腕十字固めでもまんじでもして、ロックなんかして引きずりこむように——いや、そこまではしなくてもいいが、なんでそんなふうにしないんだ？！ だって、おかしいだろ？ なんで覚えていないんだよ！ 中学のとき一緒にここで夕日を眺めたこととか、いろいろ忘れたのか？ なんだだよ！ どうして！」

「……………」

とめどもなくあふれ出では増幅していく感情を勢いのままにほとばしってしまった俺は、その言葉にやるせない想いまで重ねて一気にぶちまけていた。だが、やはり小早川は不思議な様子で、しかも少し困り果てた様子で曇った視線を向けて、

「い、痛いよ。ハルくん」

気づけば彼女の手首をぎしぎしと、警官が手錠を掛けたかのように締めあげていた。

そして、そんな自分に啞然として即座に手を放す。

その時、あの感覚が止まった。

また、間が空く。

気まずく、間が空く。

とりあえず出てきたこの世で一番信用のおけない状態であろう俺の言葉は、

「――ごめん……」

「あ」

「――ユカリ、ごめん」

「う、ん」

オブラートに包み込まれた感情が二文字の言葉を二文節で表したことから読み取れる。

そこで俺は拍子はずれにもこう思う。

これは見ている世界が夢の中なのかもしれない。虚構で縁取られた枠の中で躍らせているのかもしれない。いや、もしかしたらおかしいのは自分だけという可能性だってある。

そんな、今の状況ではけっして錯覚とはいえない胸中に囚われてしまったことに苛立ち仰向けになった。

消えかかるヒコキ雲が目に入り。

紙ヒコキを飛ばしたあの頃が脳裏をよぎり。

その時は、空も飛べる気がした、――あーそこまでは、さすがに、思わなかったか。

でも、超常現象が存在するものだと言って。

いろんな常識が潰^{つぶ}えて。

なんだか過去の事が良く分からなくなっていく。

と、そんなヒコーキ雲しかない澄み切った空の下で考え――
ユカリが不安そうに微笑んでいた。
やがてゆっくりとヒコーキ雲が消えていき。
俺達はそれを見送らなかった。

結局あの後、そんな空にも近い静寂な時間をぶったぎったのは電子工学の努力の結晶をこれでもかってぐらい押し込めたハイテクノロジーだった。

というのは、俺の着信音を設定してない電話らしき電子音が鳴り、隙間を縫って入ってきたのは小早川のオーストリアのウィーン辺りで作曲されたらしき行進曲の電子音であって、つまりは混ざり合い奇妙な二重奏を演出していたことになったのだ。

やがて沈黙破るように、

「でないで」

そしてユカリがそのままの姿勢で、

「あ……、あたしが、今大事なことを言うところだから」

黙って頷く俺。

「あたしはいつまでも変わらないから、ハルくんの言うこと、あまり理解はできなかったけど、それでもあたしは変わらないからね」

「……………」

何も言えない。

だが、心のもやもやをつかさどって胸の中で燻り続けたいた残滓ざんしみたいなやつは塵芥ちりあくたとなって消えうせ、それに身を焦がされることもうないだろうというぐらいまでに落ち着きを取り戻すことができた。

それは、俺はあの小早川　紫の偽りのない表情をみてそう思い確信したから。

たとえそれが偽りであっても偽りでないようなオーラが感じられるのだ。

小早川のあの表情から鑑みて、仮に問題があるとするならばそれは外的要因であって内的要因からくる性格の変わりようには思えない。

しかしとりあえずは、

「ご、ごめん、うん」

上手く言えない。

「……」

「いろいろと、ごめんな」

「——うん……、いいから……」

そんな簡単な言葉を取り交わして、だがその後は、そんな簡単な言葉も取り交わさないで岸边に到着。

ここで俺はもう一度池の方へと振り返って小石を投じた。

それはたぶん、あの安らかにたゆたい続けているで水面にどれぐらいの波紋と水しぶきができるだろうか、と不思議なことが次々と蓄積されていく自分の身に置き換えて考えていたのかもしれない。

俺達があゝの池での出来事に気を取り直し、宙をさまよっていた互いの視線が緩和方向へと向かったのは昼過ぎの事であった。

その間に、公園内を逍遙しやうようしながら露店を覗いたり、公園のブランコに腰かけたり、芝生に寝転んだりしながらも「とりあえずなるようにしかならないのだろうか」と昨日と同じようになんとか心の整理を付けていた。もちろん、携帯のディスプレイに浮き上がっていた>斎藤<という文字にすまなかった――もし仮に、電子工学の技術がありえないぐらい特化していて、本人探知返答可能状況機能なんてものがあつたら大変な事だった――と一瞬だけ思いつつも電源をしっかりとオフにしたことも忘れない。そうして、シートを広げる昼食タイムがやってきて、フルーツバスケットの中身が期待通りにお弁当であつたことでようやく気持ちちが和らいでいったのだ。まあ、時が癒してくれたらしい。喉元すぎれば熱さを忘れるじゃないけど、やはり気まずさの境界線も腹の虫によって食いちぎられてしまったということか。

「ハルくん？」

「おおー」

感嘆。ユカリがいそいそと準備に取りかかる。

「ど、どう？」

お弁当のふたを開けてみれば綺麗に揃えられていたサンドイッチ。

「ん、完璧すぎる」

「はあ、よかったあー」

お弁当をこしらえてきた女の子との申し合わせたかのようなベタなやりとりをして、ぱくぱく。

「あ、あのね、今日はサンドイッチに合わせて胡桃くるみ入り紅茶を持ってきたの」

と、魔法便に紅茶を注いだコップまで手渡してきた。

ん。上手い。

だけど。

『あ、あんたのために作ったんじゃないんだからね。あたしの弟のために作った分のあまり、あまりなのよっ！ あー、なにその食べさせてくださいみたいな顔！ あたしがナルなんかに食べさせてあげるわけないでしょ！ そんなこと考えているとグーで殴るわよ。だいたい女の子の手作りのサンドイッチが食べられるだけで幸せに思いなさい、このバカッ！ ふん！ ふんっ？ ……………むー、し、しょうがないわね。なんなら一つだけなら食べさせてあげても——』

い、いかな。なぜか俺の想念体活動の方ではつんつん小早川が暴れ出した。

が、しかしだ。

俺は日頃どう考えているのだろうか。やはり俺は、もしかしたら…………。

こうやって日々の習慣が及ぼす人類の影響についてを高尚な気分で嘆き悲しむしかないのかと思ひ込み、俺の属性が我がままお嬢様に言われ放題怒鳴られ虐げられることなのかもしれないことに気が付いてしまったこの瞬間に、これからの世知辛い世の中を生きてい

けるだろうかとか、正しく生きる人生の意味について神父様か弁護士様か仏様か、あるいは地藏様か人間国宝様かおやしろ様か、と考え、こんだけ凡例をだせばそのうち誰か様がこのドブ底のような取るに足らない悩みに答えてくれるだろうと推測し、また蒼い空を仰ぎ見て、このような上手いものばかり食ってメタボリックシンドロームに罹ってしまうかもしれない将来の自分はどうすればいいのか、なんて、いつでもユカリ姫の手作り料理が食べられるような取らぬ狸の皮算用的な悩みに切り替えようとしたところで！

「ハルくん？」

ブンブンと目前で手を振るユカリがきょとんとした顔で驚いていたのだった。

そしてすぐさま、上目づかいで心配そうにのぞき込み始めた百四十パーセントの幼馴染が太陽みたいに笑う――いや、百四十パーセントなどという表現は、大根役者をハウレンソウ役者というぐらい間抜けな表現なのかもしれない。あのツンドラ氷原地方みたいな小早川ではないユカリにおいてはだな。

あ、ハウレンソウで思い出したがあの時、タマゴサンドの中身の具がハウレンソウ入り玉子焼きかもしれないと、レタスがちらりと見えたときにそう思ってしまったことがばれて恨みを買ってしまった、今からチベットの式のお辞儀のように頭をすりつけて謝らなければいけないのだろうか。そんなことが頭の片隅でぎゃあぎゃあと騒ぎ始めてしまったのだから俺はどうしようもない人間なのかもしれない。で、そのことをこれから、キツダキダのメツタメタに問いつめられるのか？

あーなむ、あみ、ほーれん、そーきょーじゃなくて！

成瀬春彦よ、さもありなんことだぞ。

いや、さすがにありえないか。

「きょうはね……」

ようやくユカリが言葉を絞り出す。そして慎重に身構えながらも、

「ハ、ハルくんがあたしに食べさせて！」

「えっ？」

「あ……、んう……」

「むー」

「ううー」

「……」

「――ぐすっ」

「あ、え、と、えーと」と困惑してしまった俺。

するとユカリはブンブンと自分の顔の目の前で手を振って、

「あ、あ、あー、やっぱり……」

そこでようやく意を決することができた。

「わ、わかったよ、ほら」

あ……。

照れくささのせいか、かなりガサツに口の中へと放り込んでしま

ったことを今更ながらに悔やむ。

だが、後悔先に立たず。もうやってしまっただけでは遅かった。

「はぐっ、ひゃあ、ほ、が、あっ、んっ、あ、ああっ、り、がほー」

口の中が祭り（擬音祭り、いや祇園祭りと考えた方が伝統的な背景があつてはるかに雅だ、^{みやび}って俺は馬鹿か！）と化したユカリは、もぐもぐさせながらも解読不可能なオトマトペと、その後は微妙に震えた声で「ありがとう」と言っただけだった。

だがな、俺のチキンハートはもっと震えていたんだぜ。

——みたいな……八十年代後半ぐらいの古い表現。

ナルシストにしてもクサすぎて気持ち悪すぎる。



「あたしを映画館に連れてって」「うん、わかった」と、簡単に甲子園へ連れていくことを承諾する幼馴染の双子の片割れのように俺は野球場……もとい、映画館がある南の武蔵桜駅の方へと進路を取っていた。

そういえば唐突もない話だが、父さんの青春時代であだ名が「もとい先生」という教師がいたなんて話を聞かされたことがある。なんでもその「もとい先生」は、なんでもすぐに言い間違いをして「もーとい」とかいふらしいから「もとい先生」になったらしい。

結局は何が言いたいかというと、ガキの頃、父さんがその先生の

気持ち悪いモノマネをするために顔をグシャグシャとひつつぶして、「アーメマ」みたいな古き一発ギャグのトーンで言っていたのを思い出したということなのだ。

それを、自転車を漕ぎながら一人思い出し笑いをしている気持ち悪い輩がここにいたということになる。

だが、これは世間からの視線で当てはめてみると、後ろに美人な女の子を乗せておごり高ぶっている痛い奴、おごれるものは久しぶらずだ、なんて思われているのだろう。そんなふうに勘繰ってみる。そう、だからこそ俺の妄想ではあそこの人が、

『緊急報告でありまゝす脳内神経総司令官殿。早急に伝えたいことがあります。このたびはあの娘っ子が押し当てている男の活力を上昇させる胸部双丘突起部分の件について、私達脳内コーポレーションのもと、全会一致である少年に及ぼすであろう悪影響対策委員会会議を開かなくてはなりません。このままではあの鼻たれ小僧のバカは、蒼穹そうきゅうの下でファフナー……うぐっ、噛みました。え、もとい、ファスナーをオープンさせて刑法第七十五条猥褻物陳列罪で立件されるかもしれません。彼の脳下垂体から過剰に分泌されるであろう性腺刺激ホルモン再生細胞、精巢セルトリ細胞アンドロゲン結合タンパク物質再生の防止する手だてを——』

『うむ、それは大丈夫だ。そういう行動を起こしそうになった時はファスナーのチャックを超常現象で動かしてそのブツを挟み締めつけてやればいい』

「うわあ————————っ！」

脳内を駆け巡っていたバカのシンキングボックスが、おもちゃのビクリ箱をひっくり返して飛び出したかのように俺は現世へと帰還した。

するとユカリが、そんな俺の様子に驚いてふらふらとしたチャリの動きを怖がるようにしがみ付く。

そして――、

「ハルくんっ！ あたしのお話聞いてた？」

「あっ、まあな」

そうだった。

なんでもトイレにいつてこちらへと戻ってくる途中、今からこの公園でゲートボールを始めても誰も咎めることがないようなちんまりとしたおじいさんが、なにやらユカリに話しかけていたという内容だった気がする。

それで、なにを聞かれたのか尋ねてみると、

『めんこいお嬢ちゃんじゃの、一見すると高校生のようじゃが、学校はどうしたんじゃろ？』

『うんと、その』

『うん、なんじゃあ？』

あー、この辺の続きだったんだ。

「で、なんて言ったんだ？ ユカリは」

「それはね」

「うん」

ようやく平衡感覚を取り戻しチャリをスムーズに動かし始めると、腰に手を回してくれていたユカリの力が少し弱まっていた。

「そつ、創立記念日っていっちゃった」

「えっ？ あー、あー」

「うん」

「で、そのおじいさんはどうしたんだよ？」

「ふおふおふお、そうかそうかってサンタクロースみたいな笑いかたをしていて」

「で？」

「そしてね、なら問題はないようじゃな、うむ。ところでお穢ちゃんよー。一寸の光陰も軽んべからずという言葉は知っとるかのー。これはな、時が経つのは早いものなんじゃから、少しの時間もおろそかにせず、頑張るべきじゃぞってことだ」

「え、あ……」

「だから……ね」

黙りこくってしまったユカリがさらに密着してきたような気がした。

それは、緩やかな風を運んでくれるラベンダーの香りが教えてくれる。

ということはもちろん、さっきからずっと後ろから伝わる感触は

『嫌だ！ どうせエッチでろくでもないことを考えているんでしょ。だからあたしは横向きに座るの！ このナルのバカ！』ではなくて、柔らかく睦まじいあの感触が強まったということ。

そう、それは人間というこの生物界における個体が進化を遂げてきた過程において、女性の体が柔らかく睦まじく、二つの膨らみの部分は雄に^{おす}ある一定の刺激を与えるという事について、実のところ赤ちゃんにミルクを与え人類の子孫を繁栄させるのが本来の目的ではなく、こういう青春的な思い出を物理的な感^{やくたい}蝕として男の脳内に組み込ませるためにあるのではないのか、と益^{やく}体のない考えに終始してしまっただ。

ただ、今このタイミングで授乳を捧げている母親にとっては、俺のこの発言は耐え難い冒涇であることは間違いない、殴られて足蹴にされてぶんぶんなんて言われても文句は言えないのだろうな、おそらく。

そして。

俺はこのような気を紛らわすためか、また無駄にカッコつけてこう言うのだ。

「なあ、ユカリ。それはちがうさ。あのな、この人生において時に支配されちゃった終わりなんだぞ。時は支配するもんだ」

こうして御託を並べるのもそこそこにして、またそれかみたいな気持ち悪いトーンをぶち壊すため、このチャリンコを確信犯的に加速させていく。

「きゃあー、ハルくんっ、ちょっとおー！」と、ユカリが喚いて、ぎゅーとしてきた。

あーあ。これはわざとなんだよ。まったくたちが悪いな。だけど、それでも。

こうやって無理やりにでも、あのボートでの出来事を拭い去ろう
としている一面があるのかもしれないのだ。

予定の映画上映時間よりも二、三十分ほど早く着いた俺達は、その間に今週の土曜日に行われる天文観測会の事を話し、女子サッカー部での新人戦と重なっているからそれに来てくれればいいよとちやめつけたっぷりに言われたので、もちろん一緒に参加する旨を即座に了承させておいた。

こうして今週の土曜日は予定が二つも入ったんだとか呑気に構えながらも、ふと新原に渡された本のことや新原がああいうふうに言っていた背景には何があるんだろうかと、またもや勘案し直し。あるいは二日連続で起こった十時三十八分（おそらく学校で起こったときもこの時間であろう）の超常現象はこれから先も継続していくのだろうか、とも同時に思い返し。

ただ、そんなことに気を取られながらも、その間小早川とは一般の高校生の幼馴染がするであろう日常会話のおしゃべりをしていたことになる。

例えば、実勉強に関していえば俺よりも何倍も賢い小早川だがテスト前はあたしの家に来て一緒に勉強しようとか、俺が最近読みあさっていたロボット、未来人関係のSF話を聞かせてほしいとか、サッカーの誰々選手は頭にボールを乗せてドリブルするんだよ、はっそれアザラシの曲芸じゃん、とか。ずっとこのような調子で話しかこんでいたらしい。

やがてそうこうしているうちに映画が始まっていた。そのストーリーに熱中して二時間半が経っていた。評判通り良作だった幻想ラブストーリー『薬指の約束』という題名の作品を見終えた俺達は、誰もがそうするように余韻に浸っていたのだろうか。

いろいろと振り返ってみる。

まずは、女の子とラブストーリーを見に来たのならば映画なんか
くそくらえの二の次で、「そこだ！　そこで手を繋いで両手を高々
とつきあげるー！」「成瀬殿、そこで男ならちゅーだ！　えぐりこ
むようなちゅーだっ！　貪り齧^{かじ}りつくようにちゅーだ！」「世界を
救いたいのならばちゅーだ。古今東西、男が女にキスを求めて世界
が救われるというのを知らないのか？　カメラワークをぐるぐると
回転させるようなドラマティックに満ちたちゅーだ！」なんて余計な
毒電波が入りこんできた気がしたが、俺は満員の館内の中で自ら進
んで険しいジャングルを彷徨うような冒険をするわけもなく、ただ
時の流れるままに漠然と過ごしていたという完璧なまでの身の潔白
さを証明しておく。

で、ついでだから映画の内容を大雑把に言っておきたいと思う。
これを一言でいってしまえば、何の変哲もない田舎町で仲良く暮ら
していた幼馴染兼恋人の二人が最後に結ばれるという話ではあった
が、その設定というのがなかなかの曲者だったのだ。

物語というのは昔々から始まるなんてフレーズが入ると格調高い
雰囲気をもたらしてくれる。そんなふうには、この話も往々にして昔
から伝わる田舎町の伝統の紹介から始まった。

「私たちの町には小指に魂が宿るといふ不思議な風習があるんです
と、ある村人か言う。

だから、大きな約束を交わす時はどんなときでも指切りげんまん
をする習わしがあるんですね、と。

そして内容。

幼馴染でもある主役とヒロインは長閑^{のどか}に仲睦まじくやっていた。
恋愛ラブストーリーの王道を突き進んでいた。微笑ましくみていて清
々しい気分になる話だった。相思相愛でありむず痒くなるような展
開だった。しかし、話は中盤を過ぎてから急展開してしまう。それ
は将来を誓い合った仲であるはずの女の子がある約束を残して不意

に亡くなったから。そう、あまりにも突然の死。男の子は奈落の底に引きずり込まれたような悲しみに暮れていた。だがその時、空から漏れた紫雲しうんの光が男の子の小指を纏い始めたのだ。

「こ、これは！」

こうして女の子の魂が一週間の期限付きでそこに宿り、また共に過ごす短い日々が始まった。そして、生前二人が交わしていた日常の約束を薬指と小指で契りを交わすようになっていき、紆余曲折を経ながらも以前よりかはもっと絆が深まっていく。

だけど、彼女が空に帰ってしまう七日目がやってきて――。

「いけないでくれよ」

「ごめんなさい」

「俺にできることはないだろうか？」

女の子の魂が乗り移った小指にキスをしようとする男の子。

「やめて！ それをしたら彩君さいだって」

「どうして?! 僕は悠里ゆうりの事がこんなにも好きなのに」

「私だって好き、でもあなたと一緒にはいけないの。私たちは薬指と小指で約束した。今紫雲の――来迎仏の力を借りてあなたの小指に宿っている時、その時に小指と唇が触れ合ってしまうばそれで最期なの。あなたの魂は私と一緒に天に召されてしまう」

「それは……、それは何度も聞いたよ！ それにあの時の僕は小指

にはキスをしないと神に誓って承諾もした。でも――」

「私はあなたが好きな。だからあなたには――」

「でも、僕には君のいない世界なんか考えられないんだよ。僕にとつて生きるということは、君のいる世界なんだ！」

「ごめんなさい……」

「……」

「ごめんなさい」

「――悠里、悲しまないでくれよ。そんなトーンの声は聞きたくないんだ」

「ごめ、んなさい、わた、わたしの、せいで」

ため息をつく合間の沈黙。

「泣かないで」

「うん」

「こっちこそごめん。嫌な気分になさせて。もう僕は決めたよ。生きていくって」

「私はあなたに生きてほしいの」

「そうだね」

「そうなの」

「大丈夫だってしっかりと生きていくから」

「うん」

薬指と女の子が魂が宿った小指とで不器用に指切りげんまんをする二人。

「彩君」

「友里」

「ありがとう」

「うん、いままでありがとう」

「僕は君との約束は大事だ」

「うん」

「だけどね、僕は君と同じ世界で生きることのほうがもっと大事なんだ」

そう言って小指にキスをした男の子。

「あ……、さい、くん、やめて!」

「こっちのほうが幸せだからに決まってるだろ。たとえ死が分かち

合おうとも繋がっていられるなんてやすっぽい言葉は無用だ」

「う……、ごめんなさい。さい、くん、でも、で、でもね、わたし、こんなに、こんなに、すき、でも、胸がくるしい、でも、さいくんが――」

「こんなに好きなんだから仕方がないよ」

「私も、好きなの、愛してる……ごめんなさい」

「ごめんね、やっぱり約束は守れなかったよ、友里。薬指だからさ――」

その言葉を最後に、結局二人は紫雲の光を纏って天高く召されてしまった。

それは三尊の阿弥陀で引き寄せられた死の運命であった。

とまあ、見る人によってハッピーエンドかバッドエンドかで意見が分かれる作品だろうか。でも少し綺麗過ぎる話であった。これといった葛藤もなくスムーズに自らの命を捧げる主人公。ただ、これを総括すれば、何をもってして生きているのか、本当に生きるとはどういう意味であるのかという『百万回生きた猫』にも通ずる内容であったのかもしれない。

死によって救われたといえはいすぎではあるが、死を持ってして救われたといえはどうだろうか。

だけどこれ、前の小早川なら片意地張ってまで拒否した話だよな。幻想という言葉とこの展開にひっかかりを覚えて。

「うう……ぐすっ」

ここで隣の様子を見やる。

大粒の涙を流すユカリはやはり本当の女の子みたいであったから驚きだ。

そこで俺は、ハンカチは持っていたかを確認して、でもそれを差し出すのはおこがましいのではないかと躊躇はするが、実はユカリにとってはポケットティッシュを受け取るか受け取らないかぐらいの大したことない出来事かもしれない。とかボヤボヤと考えあぐねていたら、自分のハンカチを取り出していたのだからなんともこりゃ。こんなお間抜けな状況はどういう言葉で形容すればいいのかね。いたたまれなくなった俺は、上映中ずっと同じような体制でいて凝り固まってしまった体の筋肉などを弛緩しかんさせるために立ちあがろうとした。

すると――。

「ううゝハルくん」

小早川がそれを制して、まだ混んでいるから座ってしようよみたいな趣旨の発言をする。まあ、感極まっているのかくぐもった声でよくは聞きとれなかったのだが。

しかしそんな折にも、俺はまた、なんともいえない奇妙な感覚に苛まれてきていた。

映画が終わった瞬間から何かがおかしいようななんともいえない雰囲気、そんな場の空気の悪さを感じるのはどうしてだろうか、と。

「ねえ」

「どうした？ ユカリ」

「あのね」

「うん」

「もしね、もしああいいう立場であって、ああいいう状況ならば最後にキスは」

それは、もしかしたらおまえと一緒に死んでしまうつてことか。

「小指にキスは、してくれる？」

小早川はもとから緩みきっていた涙線をさらにゆるゆるさせて囁いてきた。

「あーっ……」

ふらふらーと考えていたのだが、冷水をかけられたかのような感覚が襲う。

それは、館内が徐々に明るくなってきて、同じように映画を見ていた人々が緑色に灯ったピクトグラム非常出口の方へ向かっていて、お忘れ物にご注意してくださいと誰も聞きやしない館内アナウンスが入り始めて、なぜか場違いなポップコーンの甘ったるい匂いがふいに香ってきて、大学生風のカップルがじゃんけんをしながらこれからどっちの部屋に行くかを決めているのも聞こえてきて、そんな状況で、もしかしたら重大なことを聞かれているんじゃないのだろうか、と思ったからである。

ほんの一瞬だけ、「まっ、断腸の思いで小指にキスをしてやるよー」とおっちゃらけた調子でその場を繕って誤魔化そうかとしたのだが、目の前のお嬢さんの頬を濡らす涙の雫をお目にかかってしまったからには、あまりにも邪道すぎる考えを排除し大きく軌道修正をして、

「まあ、な」

きわめてシンプルに言葉を繋げていた。

これは別に小早川が好きだからってわけではなくな、なんというかなんというかなんというかだ。

確かに小早川は誰もが振り返るような超絶美人であって、ふりさけ見ても春日はるのひのような天真爛漫さであって、実生活においては完璧ではある。だが、我がままでツンツンしていて手に負えないような口うるささ。文化系の俺とはけっして相容れない強引な体育会系のノリ。

ある時は俺の事を臆病ものともいいたかったのか、チキンなるとかアームロックとかいうプロレス系の間接技をかけてきたこともあった。まさしくこの所業、基本的人権の尊重を見事までに侵害する行為は、「成瀬春彦氏、小早川 紫氏に虐げられたことに関する事項についての報告があります。これは日本政府としては誠に遺憾の意であることをここに表明し徹底抗戦の――」なんてテロップを緊急速報で流してもよいぐらいだろう。まさしく臥薪嘗胆がしんしょうたん。会稽かいけいの恥を雪ぐまではけっして忘れてはならぬ出来事。

だけど今は――、

「ハルくんっ」

やがて二、三秒の間が空いた後、

「よろしい」

その顔は日頃掃除をサボってエアホッケーをしていたやつに向かって、それは殊勝な心がけだなしっかり掃いてくれて、とても嫌味半分の感じで言われた時とそっくりの「よろしい」だった。

つまりは、とーっても曖昧な視線で眩きやがったことになる。
なあ、俺はどう反応すればいいんだ。

「よろしいっ」

ユカリはもう一度眩く。

「なんだよ、それは」

「うん」

「別にな、深い意味で言ったわけではねーぞ」

「うん」

「だからさ——」

「でも、とても嬉しかった」

「……」

なんともいえない胸中に陥った俺はふーっと一息吐いていた。ついでに、携帯の電源でも入れようかと歩く利便道具を取り出す。

「そうだあー」

気を取り直したのか小早川の声のトーンが変わった。

「ん?」

「次はねー、やっぱりあの喫茶店に行こっかと思ったんだ。ねえハルくん」

「あ、それは――」

言いかけた言葉をまたもや遮ったユカリ。

「――あそこね、新装開店のオープンしたばかりなんだよ。あたし初めてだから楽しみだなあ。戻ることになって二度手間になっちゃいそうだけど。いい？」

「えっ、あ……」

ここで俺は端切れの言葉しかでないほど驚いてしまう。ていうかもう何回驚愕させられれば気がするんだ、などと冗談をかましている余裕すらなくなったのだ。

これは別に、入学式の帰りに新装オープンした喫茶店の『栞』に寄ったことを、小早川が覚えていないのに呆けているわけではない。それ以上の事がこの携帯の画面に隠されていたからであった。

3-6 (後書き)

『ユカリちゃんのゆううつ☆』

この物語は本編とは一切関係がございません。作者の気が向くままに始めたヒロイン応援プランです。

そしてここでは、あのユカリちゃん（若干幼め）が自宅の鏡の精霊ネコミーととりとめのない会話をしているだけだったんですが：予定は未定という言葉によって見事なまでのカオス状態になっています。

ジャンル？ 不条理なパロディーコメディーです？！ どこかでみたことあるようなラノベのタイトルでありましても気にしないで頂ければ幸いです。しかも、それだけではなく漫画や童話にまで触手を伸ばそうとしていているらしいです。

ただ、不条理なパロディーコメディーはもう挫折気味みたい……。で、最初に謝っておきます。これからの話——いろいろな意味ですいません。

それに文章量がはんぱないです。もはや外伝レベルかもしれません。

第4話 『灼眼のユカリ2』

「というわけでえー、ぴるぴるぴるぴーやぴーやー♪——」

（どうやらここまで読んでくださる読者の皆様は勘づいていらっし

やると思いますが、3—6のように後ろの数字が3の倍数になる時は、このあとがきで作者とユカリちゃんがアホになるらしいという新事実を公表いたします。だが……わしはどうすればいいのかね。鏡の精霊としては……」

「世界のこぼれかっ！ 3の倍数の時にだけアホになります。1、2、さああっーへああん、4、5、ろおおおーっおおきゅー」

「……………」

（それ伝わらねえよ、ぜってえーに伝わらねえーよ。今、ユカリちゃんが鼻の穴にこよりを詰め込んで、白目剥かせて、ストリートファイターのダルシ○が「ヨーガ」なんていうときの奇抜ポーズな仕草なのに、これからソーラン節を踊るような格好なんて。——これは……、わしが諫めないといけないのだろうか……）

「ほらっ、ユカリちゃん。おふざけはやめよう。いくら最近シリアスでかつたるくて分かりにくく、読者様をおいてけぼりにしているような展開が多いからって、よくないですよ。ユカリちゃんは源氏物語に出てくる紫の君から命名された名前なんですから」

「うー……………」

（まったく、扱いにくいヒロインだぜ）

しばし、熟考するユカリちゃん。

「ん。じゃあ、久しぶりに真面目モードでいくね」

（なんだっ?!）

「はい、6月も中盤になり作者は梅雨の憂鬱——言い換えレイニーブルーの影響でスランプにおちいっちゃったのね。そしてようやく止まっていた更新も盛り返してきて……、ていうか、そんなことはどーでもいいのでこれから移る小説の話題の枕詞にしまーす。ということであたしは、この『小説家になろう』様の中で他の小説とは一線を画しているSF小説、『霹靂のレヴァーティン』『霹靂のレヴァーティン』2nd paradox』の紹介をしたいと思います。まーす。

この小説は——世界観の奥深さ、キャラクター造詣の深さ、ストーリー展開の秀逸さ、伏線の張り方、心理描写の巧さ、小説でありながらもロボットを出すところが凄いのです。そして何よりも更新速度が素晴らしいんですね。はやいことはよいこと……。2、3か月で20万文字！

若干、新世紀なんとかゲリオンに似ていないこともないのですが（もちろん人の事を言えた義理ではありません）、もう作者の好みらしいです。とにかく重厚さがあって素晴らしいとしかいえませーん。まだ読んでいないお方、ぜひ目を通して笑えばいいと思うよ、綾波。↑（あー、（＋＋＋）——前回に引き続きこのネタ2度目！もう絶対に使わないんだからね！）

……でもね、SFっていうのは難解の設定と言葉というイメージであり、受けいれてもらえる土壌が少ないような気がするの。ややもすればSFよりかは普通、恋愛、コメディ、ファンタジーなんかに流れてしまう。あたし、どうすればいいのかなーって考えるんだあ。本来のSFが持つ広大なイメージをわざと隠し、国家とか社会とかの中間項を排除してキミとボクの狭い世界を作るセカイ系にするか。それとも青春学園ラブコメの要素を取り入れたり、魔法とかのファンタジー要素を加えてみたり、文学な要素を足してみたり。そうやってSF設定を薄く抑えるとか……。うーん、または明らか

に記号的な萌えキャラクターを取り入れて、ハードなSF設定と中和させるなんてのもいいかもなあ。これ全部混ぜてみたらどんな作品になるんだろうな。ほかに――」

（ちっ、作者が憑依しやがったんだな……。あーめんどくせえ）

「ユカリちゃん!!」

「――そうだっ！ 困ったときは世界の中心で愛を叫べば――」

「ユカリちゃん!!!!!!!!!!!!!!」

あー、ユカリちゃんとネコミーさん。後書きのコーナー始まっていますって――。

「えっ――！！！！！！！！！！」

舞台袖では、絶対に本編よりかこのおまけに出る回数の方がこれから先多くなりそうな獣耳先輩――もとい、灼眼のシャ○でのパロ役、吉田が待ちくたびれていますので。

「あー、ユカリちゃん早く!!」

「ちょっと、ちょっと待っててっば、本編でもなかなかお目にかかれないツンデレモードのツンを発動するには時間がかかるのよー！」

——17分後。

「ほらっ、まずはいつもの!」

「べ、べつにあとがきなんて読んでくれなくたっていいんだからね!」

(だいぶ読まされているのに、これは……)

「んで、もう一つ!」

「それに……、これを読んでくれる人の感想なんて欲しくないんだから。そっ、あたしはそろそろ感想が来てもいい頃だなんて、これっぽちも思っていないのよ。構ってほしいなんてちっとも思っていないんだからね! あたしのことはばかにしないでよねっ! べつにおたよりがなくてもあたしはやっていけるんだから!」

『ふー……。ゆかりっち、そろそろいいかにゃー?』

「あー、なんであんたがここにいるのよ!」

『そー、それがね、さーさきっちが言っていた瞬時ナントカと物質ナントカは、他の人に使えないんだって!」

(そういうわけか、吉田がここにいる理由は。しかし——)

『うっ……』

（なんだ？ 吉田の様子がおかしくなっていく。しかもなんというご都合主義か足元には撲殺バット○スカリボルグ（金属ニッケル製）の形をした咒式の剣が――。それに、ユカリちゃんまで……背格好が小さくなつて炎髪灼眼になって、こちらもご都合主義か足元には贗殿遮○が――。あーあ、今日は憑依日和だな……）

『あたし、ゆかりちゃんになんか負けないんだからね、ぜったいに、ぜったい――いに負けないんだから』

「うつ……うるさいうるさい！」

『ゆかりちゃん、そんなこと言つたつてあたしは何回でも言うよ。あたしはぜったいに負けない。あたしは斎藤君のことが好きなの。彼にちゃんとそう言うんだから。ゆかりちゃんはずるいよ。はつきり好きとはいわないでいつもいつも――』

（へっ、斎藤?! 成瀬じゃないのか？ よし斎藤という人物に対してテロップだ）

○斎藤――本名は斎藤 ゆうじ。成瀬のクラスメートとして本編に何回か出演。成瀬曰く、誰とでも仲良くできるおちゃらけた奴らしい。

「あたしは好きなんて……まだ、わからない。でも、吉田○美には負けたくない」

（ん？ よく見ると、ユカリちゃんはお胸が小さくなった。吉田はお胸が大きくなった。ただ、わしとしてはどーでもいいことだが）

『あたしは宣戦布告をしているの！ ゆかりちゃん』

「吉田○美……。あたしは……、お前なんか絶対負けたくはない
！！！！！」

（といって、ユカリちゃんはふところからメロンパン？！を取り出した。ってわしは情景描写担当にまで落ちぶれてしまったのか……）

『そうね、ゆかりちゃんのすることはわかっている。正しいメロンパンの食べ方で勝負を決しようというわけでしょう？』

「そうよ、どっちがゆうじに相応しいか戦うんだから。見てなさい」

（ユカリちゃんはびりびりと乱暴に袋を開封し、中から取り出したメロンパンを半分に分けて吉田に投げつけた。そして――）

「いい、吉田。メロンパンはね、外側のカリカリした部分と内側のモフモフした部分を交互に食べることによって双方の感触を十分に満喫できるの！ あむっ。網目の焼型に沿って食べるのはダメ。んむっ。表面だけ食べるのはもっとダメ！ もぐっ。心を無にして聖書を読むような気持ちじゃなくちゃダメなの。ぱく。だから、このカリカリモフモフの食べ方は正統的なメロンパンのあるべき姿であって、表面のかさかさ具合と内側の柔らかさ具合を噛みしめることは、アダムとイブがエデンの園を作る事ぐらい凄いことなの。あむっ。だって、だって……食べ終わっちゃった――」

（ユカリちゃんは得意げにぺらぺらと語りながら、一気に平らげてしまった。すると、それをジト目で見つめていた吉田は、これまたふところマヨネーズを取り出し始め――！！！！）

『甘いわ、ゆかりちゃん。あなたの食べ方は甘い、甘い、甘い、あま——いい。もふっ。いや、メロンパンそのものが甘すぎるのよ。キュッ、キュッ——』

「あー!! 神聖なるメロンパンに、マママママヨネーズっ!」

『そうよ、ゆかりちゃん。うむっ。万能の調味薬マヨネーズよ。ごくん。それにあたしだってメロンパンを食べるときはゆかりちゃんと同じ気持ちだもん。はぐっ。だから今日は見せ場を作るために一粒で2度おいしい的な食べ方の第二段階に早々と移行したの』

「うー、吉田は卑怯だ。ならあたしだって……」

（ユカリちゃんはごそごそと、ふところから何かを取り出そうとしている……）

「そうあたしはこれ、サキと、女の子同士で貪りえぐり込み齧りつくように、それでいてあたしたちの世界が救われるようなカメラワークをぐるぐると回転させるほどの——そんな誓いのチューをした時に貰った唐辛子をかけて食べるもん」

（もちろん本編ではそのような関係ではありません。というよりか露骨な百合表現しません、とわしが作者に代わって代弁してやる）

「あっ、ゆかりちゃんは浮気者だ。それに……この両刀使い! カッコ二刀流という意味じゃなくて!」

（ユカリちゃんは墓穴を掘ったか。それにわしからみれば三人だから三刀流か? カッコ性的な意味じゃなくて!）

「うっ……」

『あたしの勝ちね』

「違う！ あたしの勝ち」

♪

（こんな会話のラリーを三十回ぐらいはした後、二人は声を揃えて——）

「「どっちの勝ちに見えたの！」」

「ネコミー！」 『鏡の妖精さん！』

（……。どっちの勝ちかというよりは、不毛な争いは止めてくれと
いいたいところだが。やはり判定で吉田の——）

するとその時だった。

獣が咆哮したかのような地響きが鳴り、無益な争いをしていた罪
人の耳朵の中の耳小骨を激しく揺さぶらせる。

まさに鼓膜が破れるような轟音だった。

二人は恐怖でただ瞳を閉じるだけ。

やがて、治まった。

ただ、二人がおそろおそろ目を開けてみると、そこには斎藤ゆうじが立っていたのだった。

しかし、本人にも何が起こったのか理解できていないらしい。とぼけた表情で曖昧に笑みを浮かべている。ユカリも吉田もただうなずくばかり。

そんな中、斎藤は自分の足もとにある不可思議な武器に気がつく。撲殺バット○スカリボルグ（金属ニケル製）と贅殿遮○。

無論、何の事だか斎藤は知る由もない。

なんだこれとは、まず最初に贅殿遮○を手にしようとした時、

「だめ！ ゆうじには、まだ早いっ！」

ユカリちゃんが叫んだ。斎藤はその台詞には素直に従い、もう一つのほうの武器を一瞥する。

（それは……まずいっ！ それは!!）

ネコミーは胸騒ぎを覚えた。なんとなく、それを持った瞬間にとつもない事が起こるような気がするのだ。

「だめええええええ!!」

しかし、ネコミーの叫びは届かず、それを手にした斎藤はポツリと呟く。

「桜……」

ネコミーは思った。

（さくらとは、なにか……。桜舞い散るこの春、とのことか……。いやしかし、その尋常でない負のオーラの気配はなんなんだ！）

ネコミーは桜の木の下に埋めてある死体を想像してしまった。そして。

ネコミーは斎藤と目が合ったのだ。

それは奇しくも、斎藤がネコミーと目が合ったことにもなる。

吉田もユカリちゃんもすでにおいてきぼりだった。

ネコミーは斎藤と目が合ってしまったことに悪寒が走っていた。斎藤がにやりと微笑んだ。口を大きく歪め、それは常軌を逸脱した歪な形へと変化していった。

ネコミーはたじろいだ。鏡の精霊としてやってきてユカリちゃんのタマゴ焼きを食わせられるよりも、さらに恐ろしい事があると知った瞬間だった。

体内にはこびっていた悪寒はさらに凶暴化し、それは戦慄へと変わった。わっていった。

世界が壊れてしまうのと同等を恐ろしさがあった。

ネコミーは一度そらしてしまった視線を、恐る恐る差し向けた。

斎藤の笑い顔は、ひどく不自然で薄っぺらく、それはもう常人の姿ではなかった。

頭の上には、いつのまにか天使のわっかが装着してあった。

女の子の二人は空気と化している。

ネコミーはこの拷問のような現状を打破しなければならないと、思考を巡らす、

――ひひっ。

斎藤の口からくぐもった笑いが零れた。

——ひひっ、ひひっ、ひひっ。

撲殺バット○スカリボルグ（金属ニッケル製）がゆっくりと振り上げられる。

——ひひっ、ひひっ、ひひっ、ひひひひひひひひひ。

(やめてくれ！)

(やめてくれ!!)

♪

折しもその頃、そうだ京都へいこう♪との隣人の安易な掛け声によって一人京都に来てしまった新原は滞在時間十七分でここを後にし、学校の屋上でへばってる成瀬のもとへとたどり着いていた。そう、瞬時概念接近縮地法をまたもや使用して――。

「なるせ、どうしたの？」

見れば恐怖で打ちひしがれている。

「新原……。俺を守ってくれ！ ユカリちゃんから守ってくれ！」

「落ち着いて。何があったか説明して」

「新原、俺はな、ただ単純なソフトSMプレイのMを希望していただけなんだ。犬みたいに鎖でつながれて『このバカ犬――っ！』とか、『あんた平民なんだから魔法は使えないの、貴族の言うことにきちんとしたがいなさい！』とか、『ごごごごごご御主人様の好きなどこいつかしょだけ、特別にさわってもいいんだからね！』とか言われたのに俺はやり過ぎてしまってビンタをされるとか……。そんなことをしたかったのに、本編での新原に恐怖を植え付けられてしまった、乙女が少年の鼻の中に指を突っ込むという行為をユカリちゃんは再編しようとするんだよ」

「……」

「こよりを使って……！！！！！！！！！！」

「……」

「なあ、新原。おまえは宇宙人なんだろう？」

「まだ本編では、正式な発表は為されてはいない」

「そんなことはいいさ。俺を元気づけるために人さし指を掲げて、友達ってやってくれれば」

「ちっ」

（あーめんどくさー。私は本編だけではなくて、こんなことからこいつを守ってやんなくてはならないのか……。この主人公補正が――）



「サイトのバカ………っ！ このさかりのついた犬！ あんたはねっ、床に這いつくばっていればよいの！ 誰でも彼でも尻尾を振って、これじゃあ平民ではなくて犬ね！ そして……、この私に狼藉を働こうとするなんて！」

『はー、すいません。わがご主人である使い魔さま』

あれから、撲殺バット○スカリボルグ（金属ニッケル製）で蹴り殺されたネコミーは、通常状態に戻った撲殺天使ドク○ちゃんによって「ぴるぴる○るぴるぴる」と唱えられすげなく生き返った。気がつけば正気に戻っていた斎藤は、手を伸ばして抱擁を求めてきたユカリちゃんに事の成り行きで思わず抱きついてしまった。

しかしその時、斎藤、斎藤とうわごとのように唱えていたユカリちゃんは、サイトー、サイトとなっていき、気づけば○口の使い魔○イズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールが憑依していたのだった。

もちろん斎藤も、撲殺天使ドク○ちゃんから○賀サイトに憑依したのは言うまでもない。

そうして今のような状況になってしまったのだ。

「ばっ！！！ このエロ犬！！」

——ドッカーン。

ユカリちゃんが爆発の魔法を使い、斎藤は真昼のお星様となった。

（わしは……、このめまぐるしくも騒々しい展開についていけないから昼寝でもするか。無事生き返ったことだしな。）

ネコミーはシエスタタイムに入った。

吉田——改め獣耳先輩は、ご都合主義のためか途中で姿を消してしまった。

そして、斎藤を吹き飛ばして一仕事終えたユカリちゃんは、またハルくんすることに思いを馳せ極上のこよりを作り始める。

どうやらまた、世界は変わることなく平凡に動いていくようだった。



『うわああああ———、成瀬———!!!!』

「なななな、なんでお前が空から降ってくるんだ!! やばい! やばい! 衝突しちまう。新原、なんとかしてく……」

しかし、新原は瞬時概念接近縮地法を使って消えていた。

成瀬は絶望する。

だが、自分は主人公だ。そう心を持ち直して、そして——。

落下地点を探ろうと慌てふためきくるくる回っていた。手を目一杯広げ受け止めようと試みているのだ。

かたや斎藤も急降下してきて、キラキラと空中で回る。

まるで死へと向かっていく二人の輪舞曲、そんな序章が始まっているみたいだった。

『なるせ——っ!!』

これが男女であつたならばどんなに美しい光景であろうか。

「斎藤！ 俺に任せるんだ!!! いいか、よく聞け！ ラノベの主人公は、土壇場で驚異的な力を発揮するんだ。そうさ、何の特徴もない平凡な少年の感性はカリスマのごとく研ぎ澄まされ、どんな状況においこまれても『これだっ』という正しい道に導いてくださるんだ。神のご加護を信じろ！ 作者が精魂込めて生み出したキャラクターを、こんな簡単に切り捨てるわけがないだろ！ だから、全ての身を俺に委ねろ！ 斎藤！」

斎藤が落ちる。

成瀬が構える。

重力はなくならないのか。

ふとそう思い、その時に二人は衝突した。が、かろうじてその衝突を耐えきった。

しかし、状況は悲惨だった。

一見するとその様子は、男二人が誰もいない屋上で抱き合っている姿だったからだ。

まるでR指定だった。BLの要素が含まれていた。

残るのは、衝突の摩擦で服が跡形もなく消えていたという事実だけ。

「さて……」

成瀬は間の取り方に苦心する。

なんせ当然ではある。

このまま沈黙の恐怖でいたたまれなくなるよりかは、方便でもさで、と言った方がいいのだから。

すると抱き合ったまままでいた斎藤が、真剣に口元を見つめ始めた。

（まさかっ）

心が揺らぐ。こいつの頭がいかれてしまったのかと思う。

成瀬は——おそらく無意識的にはあるが——唇を舌で舐めていた。

そして、その初めてのキスの味の前は、鉄の味が——！！！！

「おまえ……、鼻血」

「あっ……」

「——いや……、それよりもなによりも、すまん。こんな状態にまで……。たが死の淵から、三途の川から蘇ったような気分だ。ありがとう」

斎藤はようやく成瀬から離れて身を起こす。

「ああ。——だがな……、安心したら尿意が……」

（まったく……俺はいろんなところからいろんなものを垂れ流そうとしているな）

しかし、それでも成瀬は思う。

世界はたった1%の崇高な話と、それ以外は全て——99%はバカ話でできているんだ。

だからなにも恥じることはない。これもバカ話の冗談にしてみえ、って。

学校という神聖な場所の屋上で全裸の野郎二人がつれしゅんをす

るっていうのはどうだ。

そんな最上級のバカ話。

いいじゃないか、最高だぜ。

ふと人間っていいな〜って歌詞が浮かぶ。

まったくそのとおりだな。なんだかよくわからんが。

「おい成瀬。それよりもこの状況とおまえの鼻血どうすんだあ〜？」

そこで二人ははにかんで笑った。それは斎藤がいつものおちやらけた調子でいったからだ。

そう、どうやら斎藤も悟ったらしい。なるようになれ、と。

そして成瀬は——。

「しらねえーよ。それよりもな斎藤。今からつれしゅんをするぞ。こっから」

すると斎藤はしばし逡巡^{しゅんじゅん}し、

「ちっ、まったくばかな奴だな」

そう言って成瀬の後に続いて構えに入っていく斎藤。

その様子は、太陽と作者だけが見ていた。

—————Fin

というわけで次回の『ゆかりちゃんのゆううつ☆』は第5話で『キスノート』です。

そのまえにたぶん『なるせくんのゆううつ☆』第2話なのかもしれない。まだ未定で。

ていうより酷いバカ話ですいません、すいません――。

あの後、二人はどうするんだろうか……。比嘉あたりに連絡して洋服を持ってきてもらうしか方法が……。いや、その前に新原がレポートーションで戻ってきてきそうだ。

ってそれよりも、こんなバカ話に付きあってくださりありがとうございます。ございました、ですね。

おまけというよりもはや外伝ですよ。長くなるとは予測していたのですが筆の進むままにつらつらと調子に乗って書いて、話の腰を折る收拾がつかなくなってしまう9000文字なんて……。本編の1・5話分の時間は使ったのかもしれない。

では、本編もがんばって書いていきますので、ぜひこれからよろしくお願いいたします。

「ユカリ、早くこの映画館を出るぞ！」

俺はまだなんとなくその場で名残惜しそうにしている小早川を引っ張って無理やりイスから立ち上がらせる。そして人が大分少なくなった通路階段を急いで駆け上がり、その進路に割って入ってくる人の形をした障害物の隙間を縫って駆け足で進んでいく。

「ちょ、ちょっとお、ハルくんってばー」

「いいから、こいよ」

どんなにやめてと言われようがダメだ。それよりも彼女が狙いならば安全なところに避難させなくてはならない。

「あーハルくん、あんまりひっぱると腕があー」

「あっ」

——なんだよこれ。

今俺がしていることはこれまで小早川がしていたことと同じなんじゃないか。こんなふうには、こんなふうにあいつは俺の意見を聞くこともなくずんずか引っ張っていったって好き勝手に判断していく手法。なぜか走馬灯のように思い出し、知らないうちにこみ上げてくる懐かしさのような感情が湧いてきていた。館内のドアを飛び出して走りながら、外の階段を急いで駆け上がりながらもぼんやりと浮かぶことは、やはり昔の小早川。

「ねえ、ハルくん？」

しかし、また別の感情も湧いてくる。

あーあ、今日、いや昨日から何度目だ？

どんだけ感傷的になれば気がすむんだよ、このうすらトンカチが
！。

これ、映画にでもしたら「バーロー、おまえの女々しいセンチメンタル発想はなあー、破綻した性格の幼馴染に振り回される何の特徵もない男のライト小説ぐらい食傷気味なんだぜ」っとか言われちまうぞ、みたいな。

そんな嘲け笑うような感情も入り込んできて困惑してしまう。

「あの」

「いいから黙ってろ、紫」

しかも、この場合の話ではいつもヒロインだけが素直になれないでいやがって、主人公はやけにおろおろするだけで妙に素直じゃないか。そしてあけっぴろげになんでも打ち明けようとする。ほかの一つ覚えみたいに。

——というわけでしょうがない。

この悪しき弊害を打ち破るために、俺はおまえを守ってやるとは素直に言ってやらねーことにするさ。俺がわざわざ言っただけやる義理はないんだ。

それに危険だというのも憶測で判断しているのだからなんともいえない。ホントはナルシストらしくかっこつけて、これからおまえを守ることに對する凄さを取って付けたように講釈してやりたかったが、こういう事情ならいた仕方ない。

こうやって、頭の中でトンデモ理屈をコネくりあげ暴れさせていたその時だった。

「あ、あの、あのね！」

ツーンポぐらい遅れてユカリの声が聞こえてきた。何やらいぶかしんでいるような視線が背中からびゅんびゅんと飛んでくる。だが気にしない。

これからどう行動すべきか必死に善後策を練って、練って、練って。

考える。

やはりあの携帯の画面から反射して見えた男。わざと都合よく写りましたとでもいいたげなピースと笑顔。遠目から見ても同い年ぐらいに見える男ではあったが、間違いなく超能力者か、魔術の使い手だろう。

なにせ、あの超常現象の時に吸い込まれた――やけに先のとんがった思い入れのある消しゴム、小早川が長い髪を珍しくアップにしてきた時にうなじ見たさでわざと落としてやったあのシャーペン、そして――十字架の首飾り。特にユカリの装飾品を意味ありげに手元で浮遊させていやがった。

そうだ、これは映画が終わったあとに感じていた薄気味の悪さと同一のものだろうか。

だが、あいつはいつかにいるんだ？ それに何のためだ？

俺に超常現象を仕掛けて、そうでありながら小早川のペンダントを見せつけてきたのはどうしてだろう。新原との関係性はあるのか。せめて、ユカリの追っかけ程度であれば適当に対処することもできたかもしれないが。

いや、これは彼女とはなんの関係もないことなのだろうか。

だったら小早川の短期記憶欠落はありえない。

いや待て、俺が操られていて記憶の形状があやふやなのかもしれないぞ。

しかし、まずは、ここは、ここはやはり――。

そう逡巡^{しゅんじゅん}していると、

「ハッ、ハッ、ハルくんってば！」

やがて映画館を抜け出し、大道路へと駆けだしていた俺達はユカリの大声で止む無く静止させられた。春の気配に浮かれた通行人が、あるいはそうではない通行人も団子になって通り過ぎていく。

これ、スクランブル交差点のど真ん中だったらどんだけ迷惑なんだろうか。

そんなドラマを妹が見ていたのはついこの間だったのでふと思を出す。

「なんだっ」

団子になっていた集団はちらりと視線を走らせてきたが、だれも気に留めやしなかったようだった。それは駅前近く雑踏の中だから、痴話喧嘩の一部始終を見せられても仕方がない思ったのか、それぞれ仕事か何かに追われているのか。

まあ、当然であろう。案外人ってものは他人を気にしないものなんだ。俺の自意識が過剰すぎたらしいが、それも気にしないことにする。

「あのね、気になることがあるの」

「なんだってこんな——」

「ハルくん！」

「ああ？ 何の話だよ」

返事はしつつも今のユカリにはまるで迫力もなければ、俺を抑えつける腕力も関節技も使ってこない。だからチャンリコを止めてあった駐輪場の方へと移動するため、もう一度ユカリをひっぱって行くこうとする。

「あたし、思っていたの、ハルくんは朝からずっとおかしかったってこと。それは夢が現実世界に紛れ込むとか、そう、お昼前のボートの時には突然目を見開いたようにして辺りを窺ったりとか。そして今だって何かに駆られるように、いや、執拗に追われている何かから逃げるように行動している！」

久しぶりに凜としている声、じゃなくて怒声に近い声を聞いた気がする。

「だからハルくん、どうしたの？ なにがあったの？ あたしにでき——」

小早川の話が途中で途切れたのは俺が四本の指で口を封じたからだ。

そして、普段ふざけているバカがかしこまるのはタカがしれているのだが、真剣な面持ちでこう言ってる。

「——なあ、頼むから俺の言うとおりに行動してくれ、頼むから」

小早川の顔が、カラスの濡れ羽色の美しい髪が、滑らかな稜線の頬が、きりりと引き締まった眉が、憂いを帯びた瞳が、アヒルのようなおちょぼ口が、歪んだ。

だが、いつもの百分の一にも満たない迫力は変わらない。

「——ユカリお願いだ。おまえはこれから俺の自転車に乗ってこの

場から立ち去ってくれ。家に帰るなりなんでもいいから、この場からいち早く離れてほしい」

「……………」

ただ呆然とするユカリ。

「それって——」

三行半を突き付けられた貞淑な妻。
みくだりはん

いや、幼児がだだをこねて癇癪を起こす一秒前みたいな顔だ。すまない。

「ど、どういうこと、なの？」

「たいしたことではない。ただの用事だ」

「なに？」

「ちょっと……だ。すまない」

「ハルくん、いやだよ」

「頼む」

「いや」

「このとおり、だ」

俺は小早川の前で手を合わせた。

「――やだよ」

「お願いだ」

だが、かぶりを振って反対するユカリ。

「やだよっ！」

そう怒鳴って、俺のただならぬ気配からか事の重大さを推し量ろうとしているようだった。

そして肩を揺らして、

「やだって、ハルくん、なんかおかしいよ？ どうして？ あたし、ここで、ここで待ってるから」

「ダメだ。せめて、そのー、さっき言ってた喫茶店でいいから。とにかくここから離れてくれ」

「どうして？」

肩をつかんだまま首をひねるユカリ。

どこぞかで、いまからキスでもするのかお兄さんとお嬢さんは。そんな囁し立^{はや}てるような声が聞こえた気がした。

「あたし、なんだか今離れたら、いけない気がするの。なんだか、なんだか胸騒ぎがするから」

「大丈夫、平気だから」

まるで新原のセリフじゃないか……。これじゃあ、小早川が不安になっちゃう。

それに、なんでもっとスムーズに物事を運ぶことができないんだ？ 青臭く情けなく格好悪いこんな状況。

「……ホントに？」

「ああ、何もただの用事だ。なんなら後からその喫茶店に行くから最初からこう言えば良かったとひそかに悔やんだ。ユカリは少し考えを巡らした後、

「じゃあ、喫茶店に来てくればいい」と言った。

「そうか」

「うん」

「なーに、必ず行くから、なあ、そこで待っていてくれよ。ステーキでも食って」

「……」

さっきまで肩を揺すっていた手の動きが糸を切ったかのように静止した。

自由自在に操っていたマリオネットの動力が途端に失われたみたいに、小早川がピクリとも動かなくなった。

「たいしたことないんだ。野暮用だ」

そういった俺はポケットから電子工学的散弾銃を取り出し、アンテナという名の銃口を伸長させ、ウエスタン気取りの空想上ではピストルを握っていることにして携帯を差し向けた。

「さあ、早く俺から離れないと、撃ってしまうぞユカリ」

こめかみにアンテナ、先っぽの部分を当てる。

「ハルくん。なっ、なにを」

若干表情が和らぐユカリ。

「早くしないと、バーンだ、バーン」

——なーんてな。

……………。

しかし、ふと冷静になって思う。いや、冷静じゃなくてやけくそに、だ。

俺は……白昼堂々、何をしているんだ？ 人質ごっこかよ、と。

あーなんて猿芝居だ。もう今すぐにあれだぜ。

ハットをひっくり返した形式上の小銭入れに、パン屋を襲撃して奪い取ってきたパンでも投げ入れてほしいぐらいだな。あー固いこととは言わない。パンがなければケーキでも良い。が、あいにく甘ったるいものはお口に合わないぞ、嫌いですから。

あ、そうだ。なんならベルサイユ宮殿から飛び出たマリー・アントワネットの憑依一発芸でもやってやろうか？ しないけど。

「あまりにも遅かったらな、これで連絡してくればいいだろ。戦争にかりだされた若獅子じゃあるまいし」

「う、ん」

ユカリが不承不承ながらも頷いた。

それにしても、これから戦地にでも赴くかのような主人公かつ。

このナルシストな演劇部気取りがー。

と、自分自身に冴えない突っ込みを入れていた時、てこでも動かなそうだったユカリが手を差し伸べて、

「ハルくん。それなら鍵がないと……」

俺は虚を突かれたせい、さらに続けて言おうと舌先まで出かかった軽口が食道を通して十二指腸ぐらいまでに逆流しちまった。

「でも、出来るだけ早く来て」

「ああ、分かってる」

と、ここでようやくポケットから鍵を取り出し、ユカリの手を包み込むようにして握らせた。

「待ってるから、ハルくん」

ユカリはワンピースの裾をひるがえ翻しながら走っていった。ひら

りひらりと蝶のような申し訳程度の加減で脚を動かして、チャリキーを持って視界から消えていく。それはまるでらしくないふわふわとした動き。駿馬しゅんめのように駆けだしてほしかったが仕方があるまい。

と、そんなふうに思っていたらくるんと振り向いてきた。

俺は穏やかに手を振る。朝学校に行く妹を見送った時と何か雰囲気気が似ていた。

そしてまたふわふわ。

タンポポの綿毛みたいなふわふわ。

俺の心のように、あるいは小早川の心のようなのか、そのふわふわは。

——ひゅん。

すると突然、またあの音が聞こえてきた。

ユカリの姿が見えなくなった途端に。

そうか。やはりそうだったか。

俺は今までべったりと張り付いていたユカリモードを剥離^{はくり}させ、猛々しく映画館入口の方へと振り返らなければならぬのだろう。

なぜなら変なオーラを放つ一人の男がいるはずだから。

だから振り返った。

変なオーラを放つ一人の男がいた。

俺達がさっきまでいた映画館の入口にいた。

階上にいるその男が、雑踏に埋もれているこっちを見降ろすような形で立っていたのだ。

「あなたですよ」

そいつは平然と、それでいて優雅でありながらも飄々（ひょうひょう）とした態度で言い放った。

あの時、——ひゅん、と音がして振り返り、そこには男が立っていた。

すると彼の手元にあった小物が空中で浮遊しながら全て戻ってきたのだ。鉛筆も消しゴムも十字架のペンダントも。誰もその不思議な現象に気がつくことはなく、俺の体の中へと吸い込まれていった教室での場面、あるいはボートに乗っている場面で起きたのと同じく、また何事もなかったかのように人々は無関心であった。

やがて男はその様子を見届けてから、映画館入り口の階段をずかずかと降りてきて雑踏の中にいる俺に近寄ってきた。

「こちらに来てお話でもしましょうか」

この言葉と共に腕を掴まれ、彼の思惑通りすぐ近くの人通りが少ない路地通りへと連れ込まれてしまったのだ。

男は俺が返答する間も与えずに、人気の少ない蔓ばかりがったう人家を両サイドに従えながらも憎たらしいほどの笑みを浮かべ、「それはお返しますよ」と俺に告げていた。

しばし沈黙。その廃れきった人家に貼ってあった剥がれかけのポスターは日本の未来を憂うような文面に気色満面の笑顔を見せてい

た。それがふつと目に入る。

「さて、何から話しましょうか」

男が言葉を発した。するとようやく俺は、それに呼応したからなのか「何が目的なんだ」と尋ねることができたのだが、彼は窮に瀕^{ひん}することもなくあっさり導き出した答えは「あなたですよ」だったのだ。

それは友達にでも語りかけるような穏やかな笑みであり二枚目俳優といってもさしつかえないぐらいに整っていたために、相手が超能力者か魔術の使い手である可能性が高いにも関わらず一気に戦意を削がれてしまう。

「なら……何を考えているんだ、あんたは？」

緊迫した状況であったはずなのだがそれを凌駕するぐらいの友好的な微笑みを投げかけてくるので、俺はその雰囲気^{ふんいき}に飲み込まれたためにもむりくり^{むりくり}に言葉を繋げていた。

「わかりませんねー、どうしてでしょうかー」

しかし、眉目秀麗な男は回答をはぐらかす。そして何やら考えているようなスタンスを見せるのだ。

富士額の出っぱっついていて尖がっている髪の毛の部分に指の腹を押しあて、そして余っているもう一本の手は、ワックスでハリネズミのように立たせたつんつくヘアースタイルのほつれを直していた。

その姿はいちいちいらん仕草をしてどうにも気に障る奴だというイメージを与えるわけでもなく、その場に女の子がいたらきつと見惚れてしまうぐらいさまになっていった。

「ど、どういうこと、だ？」

「んゝこっちがききたいぐらいですねー」

「……なんだ？ それは」

「さあ、本当はあなたが超能力者なんでしょう？ 成瀬 春彦さん」

「……っ」

少なからず予測はついていたが俺の名前を知っていたらしい。それにこっちが問いかけていることに対して鸚鵡^{おうむ}返しだとは。対話において心理的優位に立つ戦略か。

「だって、あなたの近くにあったものが私のところにやってきたのですよ」

「それは、ないだろ」

「そうですか。でも、こんなことができる御方を超能力者と呼ばずに何と呼ぶのでしょうか」

そう言っパチンと指を鳴らす。

すると俺の持っていた小物類が好き勝手に躍動し始め、それがまた手元に戻ってきた。まるでブーメランのようだった。これは一目瞭然である。

「ほら、あなたがその鉛筆とか、消しゴムとか、ペンダントとかを、慣性の法則に逆らって空中で遊泳させていましたよ。もうあっぱれですね」

男は人指し指を宙でくると回し、その指を自分のこめかみに突きつけた。

まるで拳銃自殺のジェスチャーみたく。

「なあ、ふざけないでくれないか」

「そうですか？」

相変わらず煙けむに巻くようなとぼけた発言。

「あんたはさ、俺に超常現象を見せて何がしたいんだ」

「知りませんよ」

意に反する発言をしてしらを切ってくる男。ならばと別方面から攻めてみる。

「じゃあ話を戻すが、俺が目的とは具体的にはどういうことなんだ」

たぶん俺は彼の行動様式に関わっている真理を追究しているのだから。
あろう。

だけど、「さあ？　少しは考えてみてください」と、言って男は間を開けて、
そして――。

「そう、不満気な顔をしないでくださいよ。ただ単純に、時間を掛けて話し合いたいと言うだけですから。結論を先に急い
ではないけません。単騎は損気ですから。いえ短気は損気でした」

——なにを言っているんだ。新原よりかは幾分かはマシだが、こいつは何が言いたいのかがまるで分からん。何をもったいぶってオブラートに包み込んでいるんだ？

「さあ、時間をかけて話し合いませんか」

シェークハンドを求めつつ男がそう呟いた。だが、そんなつもりは毛頭もなかった。

なぜなら小早川が危険に晒される心配がないということが分かった今、いち早く退散して喫茶店に向かうべきだと決めていたからだ。しかし、「目的はなんだ？」と問いかけ「あなたですよ」と返されたからには、超常現象の件と新原が言っていた『だいじょーぶ、まだへーき』というセリフの件と関連がありそうで。特に不可解な『まだ』という発言の真意と示し合わせて説明してもらわなければならない。きっと、こいつが無関係であるはずがない。

いや、それよりも喫茶店で健気に待っているであろう小早川の元へと一刻も早く行かねばならないのか。そっちのほうが大切か——。揺れ動く感情の振り子は、すぐにでも下さなければならぬ決断を鈍らせるようだった。

するとまた、

「そうすればきっと、あなたの知りたい本当の世界が待っていますよ」

と、男が言葉を繋げた。そして俺はその言葉の誘惑に負けた。事実、超常現象の秘密は自分の身の危険に関わることもかもしれない。

ん？　だが、それにしてもだな。

新原が言ったセリフから推測して導き出した結論、それは俺に超

常現象を仕掛けてくるやつは明らかまでの敵愾心てきがいしんを持っている奴であり危険因子だろうと推測はできていたのだが、こいつを見ている限りではまったくもってそうとは思えない。これは救いだったと言えるだろう。

それにこの前みた新原が突然現われる、というわけでもないのだから問題ないのではないか。

まだ、油断はできないが。

「なあ、どういうことだ？」

俺が再度質問をぶつけると、男は若干ながらも顔をしかめたがすぐに柔和な顔になって、

「ほら、かの有名な17世紀のフランスの思想家パスカルだって言ってますから、慌てないでくださいよ。そう、彼が記した書の一節では人は一本の葦あしにすぎない、自然の中でよわよわしい物である、と。けれどもですね、人は考える葦であると言っています。だから良く考えましょうか。思考することは偉大なんですから」

とりあえず反駁はんぱくをしてみようかと考えたのだが、まったくもって無意味のような気がしたので男が話を続けるように働きかけるしかないと思い返した。

ということは奴のペースに巻き込まれてしまったと言えるだろう。

「それは、だが――」

しかし、俺がこいつの立場になって無い知恵を絞ろうと頭を悩まそうとしていたのだが、この男のバックボーンを知らないからにはどうしようもないことに気がついた。

「おい……」

つーかそもそも、俺とおまえが保有する超常現象についての情報の非対称性が大きすぎるだろー。明らかに不均等とも言える情報網の偏りは考えてみると言われても、まったくもってフェアとはいえないじゃないか。一見新車と見分けがつかないような中古車を、開示されていた情報が少なかったばかりに高く見積もられてしまったよーなもん。

あー、喻えが悪すぎるな。

と、益体やくたいのない考えに心の中で不満を唱えていたら、俺の意図に察しがついたのか男がこう言った。

「そうでしたね。これでは難しいので、少しヒントを差し上げましょうか。というところで思想家パスカルの話をもう少し。――彼は、人を押しつぶすのに宇宙は武装する必要なんてありませんと言いました。たったひとふきの風やひとふきの雫で十分です、と。ただし、たとえ宇宙が人を押しつぶそうとしても、人はその宇宙より尊い存在であります。なぜならば、人は自分自身が死ぬことと宇宙が人間の上に優越することを知っています。そして自分自身の存在が自然界の中でも矮小であることも知っています、しかし宇宙に関していえばそんなこと知る由もありません。当たり前ですね。とまあこんな節を唱えたらいいです。つまりは、考えることによって人は宇宙をも超越する、と」

ここで少し間を開け、にやりと不敵な笑みを浮かべて、

「ただ、その節を助長させるような人がいたらどうしますかね、もし考えることによって宇宙をも超越すると。この言葉を額面通りに捉えると大変なことになりやしませんか？」

パスカルの話は聞いたことがある。が、それはなんだっていうんだ。なにか哲学的な問題でも孕^{はら}んでいるというのか。

「何が言いたい。……思考することによって超常現象が生み出されている、というのが本当の世界の姿だと言いたいのか？ まさか」

「それは、おそらく違いますね」

「……………」

俺はさらに頭を悩ます。

第一、話が形而上的な問題になりつつある。例示されている事柄も分かりにくく具象性にも乏しい。この話、飛躍しすぎな気がする。

「いやはや、そこまで考え込まないでくださいよ。違うといっても微々たるものですよ。ボタンの掛け間違い程度でしょう。私の説明が悪く、双方の見解にわずかながらの齟齬^{きた}を来^{きた}しているだけですから」

何を言いやがる。話を混沌とさせた張本人が言うべきじゃないだろ。

「言うなれば、この世界はイツワリでできているのかもしれませんがよー、ということですね」

最初からそう言え、と述べたいところだったが、それでも根本的には何も解決していなかった。

「で、結局何のことだよ？」

「さて、なんでしょか」

「……」

話は振り出しに戻った。

話が噛み合わないのか、わざとそうしているのか。おそらく後者であろう。

まったく。あいつのエセ哲学と比較すれば、アマゾンでカニバリズムの宗教を信仰している現地集落とのボディランゲージの方がまだマシかもしれんな。

まあ、かなり大に袈裟^{けさ}をかけている表現だが、この状況で冷静になれというのが無理だろう。

えっ、新原？ 彼女は論外だ。

「その哲学ぶった……」

気づけば自然に独り言を呟いていた。

するとうろんげな視線を投げかけていた男が、

「いえいえ哲学なんてとんでもありません。そもそも、哲学の萌芽は古代ギリシアにおいて始まっています。われわれが計り知れないくらい遠い——それこそ悠久の彼方から議論されてきた学問なので、私にはまだまだです。哲学ぶったにも値しない未熟者ですよ」

こちらの考えを見越したかのように言葉を重ねてきた。

「おっと、そんなことよりもあなたが不服そうな顔していますので、もう少しお話しをしておきましょうか」

しかし、そんなことよりも俺にとって確認せねばならない懸案事

項を思い出す。

「あのな、その前に少し聞くが、あんたはいつからつけてきたんだ？ それに、俺が連れていた女の子の追っかけではないんだな？ 確認ではあるが――」

だが、まるで腹話術師がぺらぺらと言葉を紡いでいるように、自分の言葉でさえも現実感が無くなっていく気がするのだ。この清潔感に満ちた男の表情を見ると、なぜだか。

「そうですか。では言っておきますが、今回において小早川 紫さんは無関係です。それに私が追っかけなんてことは事実無根な話ですよ。ただし、私の目的があなたという事ですので、これから直接的ではないにしろ間接的には引っ掛かってくるのかもしれない」

やはり、わざわざ名前を伏せたのに出してきやがった。

それと、俺が目的であって小早川が間接的に関わってくるというのはどういう意味だ。

「そして、もう一つの問いかけ。いつからつけてきたとの事ですが、ずっと前からですよ」

男が軽やかにそう言った。

「だから、いつだ？」

「さあ、いつでしょうか」

と言って、次に繰り出そうとする言葉を深呼吸で免れて時間をかけ、

「だいたい二十九時間と三十五分二十八秒ぐらい前でしょかね」

俺はあまりの数値の大きさに^{おの}慄いた。というよりも具体的な数値を出してきたのに驚いたのかもしれない。

いや、待てよ。それよりか二十九時間とはあの時の――、

「さて、成瀬 春彦さん、それはいつでしょうか？」

人の事情などお構いなしに、困惑している輩を見て楽しそうに笑う目の前のハンサムな男。

俺はこいつに名前を呼ばれたことよりも小早川の名前を知っていることよりも先に、その二十九時間三十五分二十八秒と言う端数を省略しない呼び方の方にウェイトが傾き、脳内で電卓計算機を持ち出して計算してみた。

すると、その予感と言うのは当たるもんで彼が告げてきた時間は、

「昨日の、十時三十八分か」

「そうですよ」

「だからなー、それはどういう意味なんだよ！」

俺の声が荒っぽくなる。激昂とまではいかないがそれなりに腹が立っていた。

「なあ……、これではつきりしたじゃないか。俺は昨日の中休みに、それに今日もおそらく同時刻だ。これらのもんが浮かびあがり俺の体に吸い込まれて消えた。しかしここに、あんたから渡されて全て手元にある。まさか知りませんなんて言わないだろーな」

握りしめていたそれらのもんを手の中で広げて見せる。

「はい、知っていますよ。ただ、訂正させていただきますがあなたの体に吸い込まれたのではなくて、吸い込まれるように見せかけて消えたのです。そうして私のところにやってきたのですよ。ということとは新原 紗希さんの仕業になりますかね——」

「なんだよ、それは……」

話がまるで見えない。

そもそも新原の仕業だというならばなぜあいつが指をパチンと鳴らした時にこれらの小物が動くんだよ。というより何が言いたいんだ。

「……」

結局、この言葉が抑圧されていた不穏な考えを呼び起こす導火線となり、どうにもならないこの状況を代弁するかのように自分の表情が揺らいでいくのがわかった。そして手づまりにも似た閉塞感、何者かが自分に危害を加えようとするような圧迫感、何らかの陰謀が漂う不気味な感覚がまた襲ってきて、ふっしよく払拭しようとも叶わず逼迫ひっぱくさせられるような心情になっていく。

「おまえが、おまえが何かを仕組んでいるのだろう」

「さあ、どうしてそういいきれるのですか？」

おまえは俺の何を試しているんだ？ 何か誘導尋問でもしてカマでもかけているのか。ここまでしつこくやられると、いくら面構えがよくなったってひんしゅく顰蹙を買う。

「新原がやったとは……。何が、なにが言いたい」

きっとこのターンも、会話のキャッチボールがままならない気が

していた。

それは問いと回答にたいする因果関係に大きなズレを感じる奴だからだ。いままでのやりとりから判断するに。

「はて、新原さんとは。実は私もどこかの組織に操られていまして今まで喋った事は何も知りません、覚えていませんと言ったらどうします？」

そしてその答えは俺の想像を遙かに超えていた。

ホントマジで、なにをいまさらいいだすんだ。その全ての事情を知悉ちしつしているかのような言い草のくせして。

もはや怒りの感情は沸点の限界を突破しそうになっていた。

「そう怒りを露わにしないでください」

男は口元だけを動かして笑いの形を作り、

「私が思うにですよ。あなたはこの世界が、今ある現実しかないと考えerような現実主義者ではない思っているのですよ。だからこんな話をするのです。まあ、その現実主義者達が崇めるこの現実も、例えば富とか名声とかその他いろいろ。そんなのですら、かの昔から増築されてきた——それこそ現実主義者達が嫌いな妄想だと呼んでもいいものなんですけどね、まったくの余談ですが。で、話を戻しましてですね。あなたはどちらかと言えば、夢やロマンを追求する夢想主義者ではないのでしょうかと思うわけで——」

「あのなあ！」

怒鳴るもの無理はない。だが男はさらに続けて、

「待ってくださいって。そうですね、あなたは私の話していることが詭弁、論過、虚偽、誤謬（ごびよう）といった類のものでも思っているのではないでしょうか。それとも、ここで繰り広げられている私の会話は、もはや形骸化されている言葉の残骸とでも思っているのでしょうか。ただ、それは大いなる勘違いですよ。なぜならさっきまで私は、大脳気質に埋め込まれたコントロールチップか躍動していたため、自分では何を言っていたのか全く分らないんですよ。こうやって明らかな情報処理が施されてしまうのです、私は」

まくしたてるように語りかけてきた。

だが俺は、そのふざけた会話を煮えくりかえるような思いでいたのでこう言ってやった。

「なあ、いい加減にしろよ！　なんだ？　その意味不明な話は？　それよりもな、世界があーだこーだいっていた話はどうなったんだ？　それに新原の件について、偶然なんですよ、で済ませたり、今更関係ありませんでした、なんて言わないだらうな！」

凄んでは見せるが、なにせ文化系なよなよの俺である。文庫本を小脇に抱えています、とでも自己紹介札が付いていておかしくない体格。いくら自分をどう見せるかは鏡の前で研究はしていても、それに相手を威嚇するように低く構えて体軀をしならせ懐に入り込むような格好は管轄外だ。所詮それは子供騙しであろう。

しかし、そう注意すると男は意外にも謝罪をしてきたのだ。すいません、と。

「そうでしたね。少しおふざけが過ぎましたかー」

そしてふー、と一息吐き。俺も心の中でほっと一息ついているところでもたもた話を続ける。

「ただ、偶然という観念事態は必然と必然が重なり合ってできたものという可能性もありますから、その物言いには語弊がありますね。いや、それよりもどうして謝罪したのかというと、理由を挙げれば私はあなたの考え方に興味を持っていましたので、会話に置けるいろんなパターンを試行錯誤して組み合わせていたところだったのです。でも、それはいささか失礼に値していたんですね」

やはり、煮え切らない話に痺れを切らしてしまった俺は、核心に迫ろうと男の話を遮断した。

「そんなことよりな、現状把握のほうが大切だ。あんたがさっき述べていたやつだ。新原が率先して超常現象を発生させていると言ったその理由をなんだ？」

「そうですか」

うむ、と一人首肯し、あごに手を当てて呟く。

「では仮定の話ではありますが、私があなたを守るといったらどうしますか。そうすればきっと信頼しないでしょうね」

返事を促してきたので「ああ」と短く答えてやった。

「ですが私は思うのです。この十時三十八分には重大な暗号が隠されているということを。そしてそれを伝えなければならないことを。なぜ十時三十八分だったのでしょうか。これは新原さんが情けをかけたメッセージなのかもしれません、と私はいいたいのです。それに、あの『だいじょーぶ、まだへーき』という言葉、あなたの問いに対して完璧なまでのほぐらかしといえませんか？」

やはり新原が電波で宇宙人的な存在であることも知っている。これも今更ながら、だが。

しかし、待て。どうしてそう何もかも知っているのか。

おまえが自身が何者かに操られているというからなのか。

と、そのような類の事を会話の合間に挟んでみたが、

「知っているものは知っているものなんですよ。何もそんなふうに言われる筋合いはありません。それにそのうち分かる事ですから」

不快そうな言動。ただ、それでもその言葉を浴びせてくる表情は清涼感に溢れていて、微々たる変化も感じられない。

まったく……、こいつは超自然的ポーカーフェイス人造人間からくり言葉使いか。

「話を続けますよ」

そう言われたので、また俺は「ああ」と答え、こう思う。

もしかしたら本当の世界とやらの話が不意に飛び出してくる可能性だってある、と。

なぜだか俺は先ほどまでの感情に任せていた怒りは消え、全神経を凝集させて男の話をじっくり聞く体勢になっていた。それは少しだけ確信に迫ってきているような話のような気がするからか？

「で、そうです。明らかにおかしなことが成瀬 春彦さんの周りでは起こっているはずなのに、あなたを守るといった新原 紗希さんはどうして素早く対策を打たないのでしょうか、ということですよ。だからですね、実は時間的猶予——まあ、タイムリミットの事ですね。それを設けまして、あなたに情けをかけているのではないです

かと？」

俺は自分の思考が泥沼の中を必死に這いずりまわっているのを感じた。

「話が、見えない」

「まあ、落ち着いてください」

こいつに会ってからもはや三度目ぐらいになるこのセリフ。

そして男は、一息ついてからまた喋り始めようとする。俺は思考回路がショートしているのか、思考の論理的な組み立てができない。

「だからですね。あなたが十時三十八分に超常現象が起こるということにこだわりを見せるのならば、その時間を解読してみれば面白いのですよ」

こだわり？ それだけは違う。

なぜなら、おまえが俺の事をつけてきた時間と超常現象が起こった時間とが合致して、そこに疑いを向けたから始まったのだ。

だが男は構わずに、

「あ、おまけに一秒も取り付けますけどね。そこでですよ……ものは考えようなんですが、十と言う漢字は何に見えますか？」

無為な質問を投げかけてきた。答えることはないが。

いや、答えるより先に前に男が会話を進めていた。

「良く考えれば十字架が持つ本来の意義である救いというメッセージ、ほらそのペンダントみたいですね。これは新原 紗希さんが

表面的に述べている、あなたをまもるという意味です。ただし、」

男は呼吸を整えてからもったいぶった調子で、

「これは磔という意味にも取れるんですよ。で、ここでまた例え話なんですが、新原 紗希さんが宇宙人と仮定し未確認飛行物体——まあ、俗世間ではUFOなんて呼称されていますが——それを使ってやってきて、まず地球の侵略を試みるための手始めとして成瀬春彦という人物を捕獲せよ、ただし充分な好意をもたれるように。という指令が下されたとしましょうか。だから、そのミステリアスな部分や浮世離れな部分を前面に出しつつも——」

こんなふうにな新原に関しての話がしばらく続く中、俺はあの時を思い返す。

あの子なに？　へっ？　新原紗希。まあ、良くある話だろ？　なにが。ひとめぼれってやつじゃないかと。はー？　非現実の世界っぽい話だけども、本当にあるんだなって。何言ってるの目を覚ましなさいよ。だが、この話にはもう少し続きがあるんだよ。なにそれ？　あの時はあいつが言った言葉は俺を守るだった。意味わかんないんだけど、ナル。どこが？　いい加減にし——

そう、あの日の喫茶店での一部始終。

特にそういう浮世離れた不思議系な少女には、憧憬にも似た一種のあこがれがあるとは言えなくもない。実際、入学式の日におとなしそうでクールで背の低い少女（イコール新原のことだが）になるせ、あなたはあたしが守る」なんて真剣な瞳とおちよぼ口を向けられたらわくわくしてしまったものだ。

「所謂^{いわず}ですね、あなたは第三種接近遭遇状態であったのです。彼女は、あなたに近づくため突飛な事をいって、なおかつあなたの味方である事を告げ油断させようとする。というよりは、着々と舞台裏を整えつつも宇宙人に近い存在であることを少しずつ晒^{さら}け出し、だけど、地球規模のエマージェンシーな侵略だということを看破^{かんぱ}されないようにする。そこに重要性を置いていた。そしてあなたにも抵抗感を無くさせるために、連れだしていこうという魂胆が浮かびあがってきますから」

新原が宇宙人？ 確証はない。
だけど、どう考えたってさ。
そういう感覚のある眷^{けん}族だ。
どう考えたって間違いなく。
俺が関わっているその人物。
その名は新原 紗希という。
彼女は人物と呼べるのか？
テレポートを見ただろう？
俺を守るといった彼女の。
分らないことだらけだ。
この世界に宿るすべてが。
瞳孔が開く。なぜだか涙袋に水分が上乘せされる気分だった。
それは、そういう事に想いを馳せていた昔の思い出や知識なんか
がポーンと浮かんできたからであった。あのころの感覚が心地よ
かった。

「そして、こうです。超常現象が起きた時間の十時三十八分一秒。漢数字だけを括りだせば、十、三、八、一。合体させれば奉るという字。これは新原さんがあなたをどこかに連れだし、そうですね。任務を遂行するように命じた人物のところさしだそうかしっているの

ではないのでしょうか。との仮説があります。あなたに關することならば何でも知っている私がいうんですけどね」

ここでようやく、面と向かいあっている奴の思考に合わせて舞い戻った。

件の十、三、八、一。組み合わせると……、確かに“奉る”である。

自分より上位の相手に何かを差し出す謙讓語。それは俺が指令を出したボスの宇宙人に生贄いけにえを捧げるという解釈か？

いや、まぎれもなく屁理屈。俺はおまえの思考パターンの方が恐ろしい。

でも、そこらに張り付けてあった政治家のポスターのおっさんよりはかは、十二分に説得力のある表情だったのだ。

でも？

「さて」

その接続詞を聞いた瞬間、なんだか難儀な展開がやってきそうな気がしていた。そう、あれである。シックスセンスみたいなやつだ。

「成瀬 春彦さん」

だから、この空気が変わってしまったような感覚とともに、俺の予感はいくぐくも的中してしまったらしいのだ。

「いままで熱心に語ってきたのですが、ピノキオ話はこころへんで終りにいたしましたようか。それともパスカルに掛けまして、クレオパトラの鼻が短かったということにしますか？ だから世界は分からないとでも。絶対的指針を持たなくてそれでも流動的であり儚いのがこの世界。もしクレオパトラの鼻が短かったら、たったそれだ

けでも私たちの世界の存在意義が変わるのかもしれませんが。なんてそんな話を、あなたの知りたい本当のことに乗せまして言いましようか」

「……………」

ピノキオ……あれだよな。嘘だよな。

鼻がビヨーンって伸びるやつだ。

でっかくなっちゃた、じゃーすまされない。

まさに鼻トラウマ街道を驀進中だばくしんな。

思考の間隙を縫って、自分の痛めつける嗜虐的な言葉が脳裏をよぎる。

――はあー。

今の今まで躍らされていたのか、俺は。

この吟遊詩人め。貴様は流離りゅうりの嗜たしなみに身につけた人だけが使える奥儀を披露し、相手をもて遊ぶようなことをしやがって。そして俺は冗談に翻弄されたというのか。

それにしても、まったくだ。

人間の耳は聞きたい音だけを選びわけて聞く能力があるように、正しい情報だけ選りわけて聞けたら最高であろうに。

だが嘘には適用されない原理だ。まあ、当然のことではあるが。

そして奴は、人が嘘を付くとき左上を見るといふ一般論的理論も通用しない人物なのだ。今までその傾向は露ほども感じられなかった。もはやその語り口と表情は怒りという次元を通り越している。もちろん最悪な意味でだ。

この超自然的ポーカーフェイス人造人間からくり言葉使いがー。

「ですから、ウソ話はこの辺にして本当の話をしますね」

ふいに男が言葉を発した。

しかし、俺は新原の時と同じように頷くことができなかった。

するとそれを見た男は、不思議の国のアリスに出てくるあのチシヤネコよりも、ぐつぐつと紫に煮えたぎる鍋釜の中をかき混ぜる林檎売りの魔女よりも、ヘンゼルとグレーテルをようやく家から追い出したばかりの継母よりも、それらを全て足してその数で割らなくも賄^{まかな}えるほどの陰気さでにやりと笑っていた。

そのこちらを覗き込んでくる瞳に気味の悪さを感じつつ（始めてそのような感情を見せてきやがった）、ますます混沌して行く話に笑われてしまった平々凡々な人物は頭を抱えそうになっていたのだった。

「ウソのサンパチという言葉を知ってますか？　これはですね。胡散臭い話で数字が出てきたら、つまりは三、八が御登場なさったのならはその話はウソである公算が高い、ということです。人はわざわざ曖昧な数値を言って取り繕うという説があります」

そしてそれから、またかと詰め寄ってやりたくなるぐらいに、べらべらと似たようなことを語りだす。

そうやって少しずつ、私に対する不可解な興味を醸成させていたんですよ。伝えられる言葉の難しさを考えてもらうのとともにね。ですが、今みたいに嘘とか言い訳、その場を取り繕うただけに消費される言葉を聞くことをむなしと思わないでください。

だってこの世界の現状がこうなんですから。

さっきの私みたいに、いつのまにか人間は表面上の言葉をそのまま受け取るだけではなく、その裏に何が隠されているのかを詮索するようになったんですから。まさしく人の裏をかき、相手をいかに出し抜くかということがコミュニケーションになってしまったのですから。

だから、もう言葉というものがただの言葉でしかなく、その先に繋がっているはずの本質の意味は必ずしも共有できるとはかぎらない状態なのは当たり前なんです。言い換えれば……それが至極自然で、私はウソをついたのに落ち度はないということなんです。

はい今のは、ウソ、言い訳、取り繕うためだけに消費された言葉です。なんて。

でも、こうして極めて恣意的しこてきに、あるいはそうでなくても人を陥れることができる。それが言葉の恐ろしさなんですよ。

聖書にもありますよ。「はじめに言葉ありき」と。そして「言葉」とは「ロゴス」。

秩序とか論理を表す単語であり、言葉は秩序そのものとしての性質を有しています。

だから私はあなたを言葉で封じ込めて秩序を保とうと――
なーんて与太話よたばなしですよね。

まさに人を殴りたいと思った瞬間ではあった。

だけどだ。それでも俺は思う。あの時の雰囲気は尋常じゃなくすごかったことを。

話の尾鰭おひれの付け方が――いや、むしろ尾鰭ではなく最初から事実を述べていなかったのかもしれない。まるで、ウソを吐くということに対しての矜持きようじをみせなければ、自分の立つ瀬がないとでもいったげであった。

その姿だけは、なんとなく共感できるものだ。男として。

ともかく、こいつはどこまで俺の事をおちよくっているのか。

「まあ、私はいろいろと反応を確かめていたのですよ。本当の事を言ってもよいか。ただ、あなた自身が絶対的に関わってきますので言う事は確定事項なんですけどね。そう、だからあなたの反応を窺いながらも、そしてこれからの話は少々込み合ってきますので、その前のちよつとした余興だということなんですよ」

男はさらに言葉を続ける。

「なんせ私の立場はあれです。岡目八目おかめはちもくみたいなものですから。第三者は当事者よりも情勢が判断しやすい。とはいいますが、実際の反応を見るデータサンプルが必要だったのです」

しかし、奴はこうは言うが俺はめげずに思ってしまう。
一体全体何がいたいたんだ？
長々と前口上を述べて。

「ずばり――」

浮かんできたのは、あるアニメでその決め台詞をいうグルグルメ
ガネの委員長だった、
が――。

「あなたには世界を改変させる力。というよりも、深層心理の中で
願う自制心の利かない何か存在がしているのです。そう、あなたの中
にはもう一人の自分が眠っています。そしてそれが、何らかの事
象を経て覚醒する可能性があるということなんですよ」

文字通り固まってしまった。
何を言っているかの解釈ができなかったわけではない。
言っていることが意味不明なわけでもない。
だからといって奴が言っていることが、今度こそ嘘だとは思えな
かった。

——なぜならその言葉を言われた瞬間。なぜか、あーそうなんだろうーな。となんとも形容しがたい感情が芽生えてしまったからだ。なぜなんだろう。

そこで……、いいですか成瀬 春彦さん。

私たちがこの世に生きている、というのは、あたりまえと言えばあまりにもあたりまえですね。有機生命体としてひとつの生物として呼吸をし、心臓が動いているという意味で生きているという事実がありますね。しかしですね、自分の意識の支配下においてたしかに「生きている」と実感することはなかなかありません。

だってそうでしょ？

たとえば、自分と世界とのかかわりあいについて考えたとき、私たちはたしかにこの世に生きているのかもしれませんが、私たちの普段の生活において、接することができるのはその世界のほんのほんの一部分の素粒子にも満たない範囲でしかなく、仮にその背後に広大な無世界が広がっていたとしても、少なくとも私たちが日々の生活をつづけていくかぎりにおいてはたいした意味をもつわけではないですね。いや、あるいは大きな意味があって、それでいて大きな繋がりがあるのかもしれませんが。だからその部分は私たちの視界からは巧妙に隠されていたりして、なかなかあのあたりに行ることができないものなんです。そして私たちにとって、目に見えないものを意識しつづけていくというのはなかなか難しいですし、意識する必要すらないのかもしれませんが。

「たとえば、この世界でおこりえもしない不思議なこととかは——」

男が言った。言っただけ。

「誰も意識はしていません。できません。だっておこりえないことなんですから。つまりはですね、見ている世界なんて自分に都合のいいものにしか目に入らない、耳に入らない。まあ、経済学でのグレシャムの法則みたいなものですよ。都合の良いものが都合の悪いものを駆逐する。だから誰も気がつかない。それでも世界は成り立っている。これが普通です」

言っただけの男は大仰に手を広げて喋っていた。

俺は……なにがなんだかわからなってくる。

「しかし、」

つかつかと歩み寄ってきて距離を狭める。

「あなたのもう一つの心はこの広大な世界と接触しているんです。それもある日突然そうなった。あんたは確実に世界に影響を与える何かをもっているもの」

「……わからないが」

なぜか新原の時よりも冷静に対応している自分がいた。これも慣れなんだろうか。

「そうですね、わからない。それが当然です。だから大事なものは慣れなんですよ。自分が他者とは違う異質な存在であることを幻滅することのないように、段階を経なければなりません。時が傷口を癒してくれるのを待つしかありません」

時が癒す？　じゃあ時が病気だったらどうすんだ……と。しかし、昼の時にやつ当たりをしてしまったユカリとのわだかまりが解けたのは、時のおかげだということもついでに思いだしてしまった。

「最初はこの世界に対する見方を変えてもらう。その次に自分が異能であるスタンスを理解してもらうこと。そして私はまだこれぐらの範囲しか言えません。私に入ってくる情報も断片的でありますから確信ではありません」

「……」

「そう小難しい顔をしないでください。例えば新原　紗希さん、彼女は見事までに段階を経ていきます。それと一緒にですよ、私も。彼女はまず自分の存在を相手に知らしめるために予め変な認識を待たせるような宣言をした。次は間接的に、噂という媒介を使^{あらかじ}って自分が異能たる存在をひけらかす。そうして今度は、あー少しだけイレギュラーが起きましたけど、それも想定の範囲内であって直接接触することに成功。で、おそらく最後は、あなたが手を渡された本には全てが書いてある。そういうことです。」

おっと、そういうばさっきの話はウソですからね。新原さんが宇宙人だかどうだかって話は。でも、別媒介の別系統の別目的の――それでありながら対象人物はあなたであることは一緒ですが」

とりあえず俺は聞いてみる。無駄だと思ったが。

「その目的とはなんなんだ？　おまえも新原も」

するとそれを見越したのかどうかは知らないが、呵々（かか）と意地悪く笑っていた対面の男がこう言った。

「そうですね、他にもあなたの感情が不安定になったときに限り、物質浮遊を促す超能力を誘発させるトリックかなんかを持っているのかもしれませんが。それが昨日から制御不能となって暴走し、たまたま同時刻に超能力を発揮したのであって、それを止めるのが私と新原さんの役目。ですが！　今のは鼻が伸びる話です」

無機質な表情を向けてやった。

「すみません。で本当は、今のあなたのもう一つの心の話であって、あなたは無意識レベルで能力を解放しているのですよ、深層心理で。しかも、それはあなたの理性の制御化範囲ではないということなんです。あたりまえですね深層心理ですから。だから私は、いつかそれを止めなくてはいけない。私は、そうですね……端的に言いますと、アニミズムという概念に乗っ取ってあなたを抑えようとしています。そのような力をこの札に言の葉を書き記して、そうして超能力を編みだしているんです」

男は今までどこに隠していたのか、ふところからお札ふだみたいなものを取り出した。そこには『物質移動』、鉛筆、消しゴム、ペンダントなんて書いてあった。

そうか、とうとう本体を表したか。この超能力者が。

自分のことは堂々と棚に上げて現実逃避である。

「ということはですね、森羅万象全ての――それが神性を持つ対象であれば容易にあやつることができるんですよ。ただ、もちろん万能というわけではなく、ごく小規模の範囲であり限られた大きさのものであり、一番の肝となる部分は指定された人物においてのみにしか使えませんということです。成瀬　春彦さん、あなたに關与する事柄でなければ私の能力は発揮できないということになりますね。予知も」

と言って、言葉の締めくくりに華麗なるウインクを決め込んだのだ。

アキよ、おまえもあれぐらいきっちりウインクをこなせ。

しかし、半ばやけっぱち気味にそう考えられるようになったのはどうしたことだろう。

世界を改変することができるといふメタ超メタ的な事を言われているのに。

こうでもないやっつてられないのかもしれないのか。

「しかし、ですね。とても大事な事が一つあるんですよ。一つだけ。それは私に与えられた任務の中に、あなたが思い描く世界に移り変わるであろう内なるパワーが、制御不能になって世界を転覆させる段階になってしまったら、私は>ナノカプセル形状状態<の超能力を使いあなたを内側から破壊しなくてはなりません。その可能性はごくごくわずかなんですけどね」

「それは……」

「そしてそれは、その任務を遂行するのは最後の手段なんです。なぜなら、私だって人を破壊させるような超能力のプログラミング、いや、この言葉よりかは呪詛じゅそと呼ぶべきでしょうか。まあ、そんなことはどうでもいいですが、ハッキリ言って嫌です。なぜならこれはれっきとした殺人になってしまいますから。いくら世界を救うという大義名分があっても、気持ちのいいものとは言えませんよね」

男はここまで言葉を繋げて肩をすくめた。そして俺の相槌を待っているのかこちらに切れ長の視線を投げかけ、やがて諦めたのかふっと顔を引き締める。

「なあ、俺は結局なんなんだ？」

「言ったでしょう。世界を改変させる何かを持っているって。でもまだ何も起こしていない。ですから、そうなってしまえばこの世界に悪い影響がでるのなら私はどんなことがあってもあなたを壊します、ということです。これ忠告でもあるんですよ。あなたの無意識レベルのもう一つの心に訴えているのです。プラシーボ効果というのは期待しているとでもいいいきましょうか。ん……これはちよつと喩えが違いますね」

「どんなことがあっても、私はあなたを壊します……か」

俺は思いだす。

『どんなことがあっても、あたしはなるせをまもる』

脳内ビジョンで美化された新原が写しだされる。

「そこで、ものは相談なんですが……」

すると男がいつから節目がちになっていたかは分からないが、その顔をくわっと上げて、

「今、ためしにあなたを壊してみてもいいですか？」

能面みたいな顔で、

「壊します……いや言葉が悪いですね。適切な処置とでも申して置きましょう」

にやりと三日月形に口を曲げて笑い、

「そうです。その予行練習をしましょうということです。なーにだいじょーぶ、まだへーきですよ。予行練習であ——」

瞳に悪意が宿り始めて、そして俺は混乱し始めて、

なんでこいつが危害を加えないと信用していたんだ小早川が関係ないということを聞いて安心していたのかだからといってもう少し猜疑心を向けなくてはいけないだろ男の好戦的ではない様子を見て大丈夫だと思ったのか最初の思考回路に戻るんだよ抹殺系統の可能性だということをこいつは超能力をつかうんだそういえばこいつの素性は一切知らないぞ名前すら名乗っていないまづいぜこれ。

めくるめく思考をふつとばすように、男は見事なまでの跳躍力を披露し、空中から迫ってきて、やがて視界が男の影で覆われて、そしてその時——。

こういうときには突然、人ならざるものみたいな火事場の馬鹿力を発揮して脱兎だつとの勢いで逃げ出すことができたり、祈りを捧げている修道院のポーズでもすれば誰かが助けに来てくれたりするとかがあったり、フィクションの世界ではとてつもない何かがおこることはよくあるものである。だがしかし、そんなものはやはりフィクションだけの世界であって、真っ向から疑ってかかるというわけではないが――こうも都合良く駆け付けてくれるとはな、新原。

俺はどこでもないこの真ん中の場所から、新原を呼んでいたらしい。

そして新原がここにいる。それをこんなにも心強く思うとは。

「なるせを傷つけたら、許さない」

「……そうですか」

「だから、だめ」

「ですけどね、新原 紗希さん。こう他人がする些細な事ですら許せない人は、自分がやむを得ずにしてしまった些細なミスも許せないってことになってしまいかもしれませんよ。いいのですか？ もしかしたらそこが命とりになってしまいかもしれません、今後」

「わかってる」

そう言って俺の目の前で、タイタニックのあれみたいに手を広げる。

俺は新原に簡潔な情報を伝えた。

「新原、あいつは、超能力を使うんだ」

「うん、承知」

「そうか」

「それに、だいじょーぶ、へーき。こういう非常時に備えて研攢に研攢を百乗根ぐらい積み重ねてきた」

「そう、か」

「そう」

突然笑いがこみ上げてきた。こいつとまともに話ができるというだけで。

昨日よりはるかに会話が良好である。

「だけど、厳密に言えば、くすもとは敵ではない」

ん？ あいつはくすもと言うのか？ それに敵ではないだど？

「そうですよ。私は敵ではありません」

今までこっちの様子を窺ってきた男が会話に入ってきた。

「どういうことだ？」

「くすもとはあたしを忠告しに来たと思う」

手を広げたポーズのまま、さっきよりかは幾分か感情を抑えて新原が言う。

「そうです。だからあなたが現われると思って彼を焚きつけただけですよ」

にしては、もう切りかからんばかりの勢いだったが。

「それで、私はあなたの思惑どおり忠告いたしますね。その盲目的なまでの行動は周りが見えなくなってしまうときがくると」

「それは、その時はその時。今はあたしが忠告。なるせをきずつけたら許さない」

「そうですか」

楠本は表情の読めない笑みを浮かべた。

そして、しばしその場で思案を巡らせている様子でいて、

「では退散するとしましょうか。私にとって、今日はその事実を伝えにただけなのですから。そして今がその機会でないことも分かっています。不可能であるのなら、もうここに留まっているのは無意味であるといえますしね。意図・目的・価値といった人にとっての上位概念ができない。――そう、私が希求している概念の検証ができないのならもう潮時ですから」

あまりにもあっけなく、拍子抜けするぐらいにあっさりと男は背を向けた。細い路地裏の先にある広い大通りへ舞い戻ろうとしたが振り返る。

「おっと、最後に言い忘れていたがありました。自己紹介をしていませんでしたね。私は楠本と言います。これでも一介の高校生なんですよ。それと、あなたと同じ学校で、隣のクラスでのほほんと授業を受けていますから。また近いうちに……そうですね、今度はあんたのテリトリーでお会いすることになるでしょう」

もはや言うべきことはない。やはり、というかなんというかである。

楠本はそれを最後にして、また大通りの方へ向けてゆっくりと歩を進め始めた。

俺と新原はその様子をまじまじと凝視していて、やがて男が曲がり角を右折し視界から消えていくまで見つめていたのだった。

そうしてやっと、これまで全身を包み込んでいた重たい空気みたいなものが取り払われていくのを感じた。どうやら想像以上に心が摩耗してしまったようだ。だが曇天のような気持ちに少しだけ陽光が射している感覚がある。

ただ……、それでも問題は何も解決していない。世界を改変する能力。どういうことだろうか。

「なあ、新原」

聞きたいことがあった。それはあの時と同じ問い。

「おまえは、なにもの、なんだ？」

そしてさらに追加。

「それに、俺は、なにもの、なんだ？　楠本は、なにものなんだ？」

「それは、あたしが渡した、本で分かる。これは昨日の複唱。そしてなるせは、あたしにとって絶対的な存在。くすもとは、中立の立場」

だめだ。何一つ分からない。とりあえずダメだ。

それにしても、奴はあれでスイスカ。暴力を使おうとしたぞ。

「ところでなるせ、あたしはまた適宜な時に参上できなかった」
そんなことはない。あれで助かったはずだ。その弁解はいらないから俺はこう言った。

「いいや、おかげで助けられたありがとう」

「そう？」

「ああ」

「そう」

新原はいたってクールに頷いた。

「新原、やはりおまえがああのタイミング来たのは、あの時と同じようにテレポーテーションか？」

軽い調子で聞いてみた。

「そう。だけど……、少しだけ違う。正確には、なるせを確実にト

レースするために、あのとき選りすぐって選抜した嗅覚感覚器鼻孔の最も薄い毛細血管内部へ、GPS極小型専用発信機ストラテジーを装着させた。あっ、GPS極小型は通称ミストリフティングという」

うお……である。おい、GSP？ 監視するやつだよな、それ。つまりところ、あんなことやこんなことも知っているってことなのか？ 特におかしいことはしていないけど。

「そしてそれはもちろん、まだあたしの＞有機生命体情報統合解釈連動装置＜が正確性における観点から熟考すれば不可であることが原因。だからミストリフティングを使用した。後、テレポーシヨン作用に置ける名義的機能である＞瞬時概念接近縮地法＜は容易ちなみに＞物質拡散性＜は、外部では内部よりかは障壁がないために必要不可」

新原は無機質に告げる。

「つまり、まだあたしの＞有機生命体情報統合解釈連動装置＜が機能的正確性関連の共通事項の欠如が顕著であることに起因していたのが第一要因。不可視状態において、まだなるせの危険を完璧に察知し正しい状況下において参上することができないために、あの時咄嗟にミストリフティングを装着させた。おかげで正常な危機状況下に置いてテレポーシヨンができたということ」

まったく、俺は頭を抱えそうになった。

まるで禪問答のようだからだ。おまえは『夢十夜』の僧か？

「なるせ、なに？」

まさしく油断していたのだ。あの酩酊感めいていを引き起こさせるような文字羅列トークを基礎言語としていることを忘れかけていた。だが新原はそんな困惑した表情をしているであろう俺を見て、ひそかに狼狽ろうばいし始める。

「だ、だいじょーぶ、へーき。あの、適宜な時が来たらその発信機は自動的に人体内部から浮上して霧散するから心配無用」

違う。それは違うぞ、新原。大いなる勘違いだ。

それも大事だが、俺はおまえの話している内容が分からずに呆けていたさ。

そんな心配なんていなくても――、

「なるせ！」

すると突然だった。急に新原が奇声にも近い声を上げていたのだ。

なんだ。どうしたんだ。

新原は俺の腕をむんずと掴みにかかり、どこにそんな力があるんだっていうぐらいにぐいぐいと引っ張り込んでいく。

そうだ。こいつをかよわい女の子だと思うのは天と地がひっくり返っちまうぐらいな間違いごとだった。

あの時、小動物系お姉さん容姿前歯ちよろりん獣耳先輩を魔貫光殺砲並みの閃光で仕留め、素早く追いだしたことは忘れてはいけない。

「参上したわけ。それはくすもとの事と、それだけではなく、なにかを感じたからだった。そして今、また感じた」

「なんだ？ おいつ、おいつ！」

冷静に考えてみる。なんだかはわからない。何か危険が迫っているのだろうか。

ただ、俺と関わってくる女の子は基本的にロックが好きである。もちろん音楽ではなく、人の腕をロックして引きずりまわすほう。その反抗心というか、怒りを表現するというのか、そういうところは社会か俺かの違いだけで根本的に同じらしい。

「とりあえず、はやく!」

四の五の言わせぬ口調。何も分からないまま、新原に合わせて強制的に歩が速まった。強歩みたいな不自然な歩き方から、マラソンぐらいのスピードになり、しまいには短距離走並の速さになっていく。が、そんなに息がつかねえぞ、新原。

楠本が去っていったあの時と同じように右折して大通りに出た。そして俺のチャリが止めてあった駐輪場のほうへ行き、そこから少し離れたところであぶれていた無法駐車を見て目敏く品定めを始めたのだ。

「おい、なにをしているんだ?」

「いいから」

「新原、なにを――」

俺がそう言えば、新原はぶつかってしまっうんではないかぐらいに近づいてきた。不覚にもどきまぎするバカ一名。あいつのいつていた世界の改変がどうかよりも――、

「ロチュー!」

ロチュー？　ロチュー！　あー路駐。

「だから問題ない」

そう言うとな新原はさっきの位置まで戻り、三百ccはあろうかという大型二輪車を世話しなくがちゃがちゃといじくり始めたのだ。しかも座り込んで。

時折、新原がしゃがみ込んだその姿勢から俺の方へと真剣な瞳でこっちを見つめて来て、待てという手の形を作るが……、なっ、新原は何をしているんだ。

「おい、新原！　それ、おいつ、分解するな！」

俺が必死になって叫んでいることにも構わず、新原は新原で人様の自転車をいじくりまわし、ぶつぶつと何かを言い始める。

「反重力装置系動力バイザーを>組成変革万能半紙<で捻出して掲載。よし起動。空中迂回戦術だ。超短波ノックの回数とフルスロットルターンに螺旋シンドローム気圧を起因させ……、あっ、その前に>不可視光状態依存空間<にしないと。次は定期シンク——」

いや、だから新原。

「だから、何を分解している?!」

「何をつて……」

「これは、どうみて新原のじゃないだろ？」

「そう」

「じゃあ……」

「拝借するだけ」

「それがまずいんだよ！」

「構わない。感じる危険因子の調査が大事」

新原はきりつとした表情で言った。

「だから、＜不可視光状態依存空間＞を使用して上空から監査する。
＞不可視光状態依存空間＜とは人体の網膜が察知する光系列軌道に
意図的に網をかぶせ、人から見えない不可視の空間を作り上げるこ
と。だからそれをしたら、これからなるせとあたしは三十分の間、
第三者から姿が見えなくなる。適宜なタイミングでそれをする。た
ぶん飛び立つ前。」

そして今、あたしはその下準備をしている。単車を改造。まだ定
期シンクロアドライブラステクトはしてない。イモビライザー経由
でイグニッションスイッチに誤作動も起こさせていない。これから
する。そして電気信号応答装置における狭間部分に半導体素子のギ
ヤップを組み込ませ誤作動を促し、中継送受信とリンク周波数変化
機能に欠落を生み出させる。これを達成しなくてはいけない」

ここまで言ってじーつと見つめて、新原にしては珍しく感情のこ
もった——なんというか寂しがり屋のウサギは死んじゃうの、とで
も言いそうな視線をするのだ。

そして言葉を続けた。

「だから、自分の所有物にし逃走したり調査したりしようとしているわけではない。これは無返却の拝借という」

同じだろーが。あのな、うそつきはドロボーの始まりじゃない？

「なあ、おまえあれをつかえば――」

俺の声は新原の声という絶縁体で、みなまで言わずに封鎖された。

「一人にはできないから無理」

「いや、そうじゃなくてテレポーテーション」

「だから、だめ」

新原は唇をいたく噛みしめる。

「あれはあたしだけしか移動ができない。だからこうする。そして安全な上空から偵察をする」

その強い調子を聞いた俺は、いい加減にもう諦観する。あることを悟ってしまったからだ。何を言っても無駄だな、と。小早川という時によくあったあの感覚。

辺りを見れば、チャリンコの陰からひょっこりと顔を出した奴がいた。確実にここから半径三メートル以内に入っているネコだ。こいつが丸くなって自転車の影でくつろいでいる。目が線になるぐらゐに細めて穏やかな表情を浮かべ、気持ち良さそうに自らの肉球で頬の付近をこすっていた。

新原は相変わらずに機械いじりをしている。そしてこやつは決して動こうとはしない。そんな雰囲気醸し出

しているのを間近で見て思う。

ネコさんよー。ここは地雷地帯なんだぜ。まったくおまえはのんびりさんだな。あつ、おまえ！ 今、よいではないか、よいではないかって、悪代官が生娘様の着物を脱がすときみたいな至福の顔を浮かべやがったな。おい、いいのか？ そんなんで。これからあそこのお嬢さんはな、この單車をもしかしたらN A S Aとかがやるみたいじゃ。ジェット噴射するロケットにしようとしているのだぞ。だから、風呂なんか浸かっているような仕草で、のんびんだらりとはしてられないだろ。飛びあがってしまうぐらいの大爆音になるかもしれないんだ。それこそ、バsgas爆発とは到底比較できないほどの大爆音だ。なあ、俺はご親切にも忠告してやっているんだぜ。感謝してその頬袋から煮干しでも差し出したらどうだ。まあ、なさそうだが。そしたら、おまえが空腹でのたうちまわって今にも死にそうなきときには二倍にして恵んでやろうと思ったのにな。出血大サービスで。

そう、まるでこやつみたいじゃ俺は他人事だった。自分事でも気持ちのどこかでは他人事だったんだ、きっと。今まで起こったすべてが。でも、どうやら自分はこのネコみたいに傍観者ではないらしい。確実に。

ふいに、返事が聞こえた。

にゃあとみゃあ。

その中間音。

もちろん、何を考えているのか分からない。

でも、黒ではないから不吉ではないだろう。

白ネコさんよ。

空中を迂回。だいぶ時が流れる。

衝撃波すら感じることなく万事快調。

ジグザグな走行から、螺旋を描き、幾何学的な模様を空にうつし出す。

縦横無尽に飛びまわる。自由開放に動き回る。

イレギュラーな速度で駆動。浮遊の力を持たされた單車。

空を舞う。滞空しているような感覚がある。

まるでUFOみたいだ。

いいだろう。悪くはない。

むしろ心地よい。というよりも感動すら覚えている。

新原の使った能力>不可視光状態依存空間<とやらは、存在そのものが見えなくなってしまうらしい。他にもいろいろとある。俺たちが乗っている單車には緩衝材みたいな幕で覆われているというところか、レーダかなにかで目的としている人物を探したりとか、エトセトラ。やはり凄すぎる。宇宙人でも何でも構わない。いたく感激もしたくなる。

「なるせ、少し、ぶれるから」

新原が言う。そしてその瞬間、機体がありえない角度になる。おそらく物理法則を完璧なまでにしかとしているに違いない現象。まるで違う次元の空間を移動しているかのように瞬速で立ち回る。まさしく瞬間移動。目に止まらぬ速さで揺れ動く。まったく、人が見えるものには限界があるんだと思う。すると一度弱まった速度がさらに加速していく。さっきよりもはるかに凌駕するハイスピードで広範囲を移動。気圧の影響で眼球に辛さが生じたり、三半器官がおかしくなったりしないのは、ひとえに新原のおかげだと言えるだろ

う。ホントまったくだ。

そして、俺は今しがた起こったことを思い返す。

地上が小さく感じるこの感覚。

もっと前の事も思い返す。

なぜか俺が影響するらしい世界について。世界の改変についても考えていた。

もう一つの心が制御不能になったとき。それとは、やはりなんだろうか。

あの男が言ったこと。本当だろう。いや、その前に何が起こるというのだろう。

「なるせ、ハンドルを離すから」

聞けば重力制御や気圧関係を楽に無視できるエネルギーを掲載したらしい。ゆえに、ハンドルを握らなくても基本的に問題ないことには変わりはないらしい。

しかし、新原。俺の心臓にはまことに良くないぞ。それにおまえは何をしているんだ。

その舐めた人差し指の風向きで探し人が発見することができなんて、そんな原始的な方法を採用するとは思わなかったぞ、さすがに。せめてスティックかなんかを取り出してダウジングでもした方が似合っていただろうが。

と、そこまで考えていると急に、新原がその姿勢のまま首だけを動かして振り向いてきた。なぜかその姿はさまになっていて、おもわず見惚れてしまう。

ところが新原は、「これはただのスタンス。特別な意味はない」とか言うのだ。このやろーめ。

「あっ、霧散した」

「ん？」

「気配が霧散した」

おそらく新原が感じた危ない何か、とのことだろうか。

「そうか」

「上空する」

「これからどこへいくんだ？」

「大気圏」

「はっ？」

「まではいかない。その反対、急直角で落下するために反動を付ける。用は済んだ」

まずいんじゃないか。俺の心理的に急直角落下は。

「新原っ！」

「ほよ？」

なんだ？ その受け応えは。

「急直角で落下するとは本気か?!」

「本気」

「ほんとか？」

「本気と書いてマジ」

「まて」

「なに？」

「なんか変だぞ」

「なにが？」

新原は心底不思議そうなトーンの声でしれっと言いやがった。

「しゃべり方」

「本に書いてあった」

「……そうか」

「そう」

「……」

「そろそろいく」

「あーくわ、ばら」

「くわばら」

なぜか複唱してくる。

「へっ？」

「なるせ、下ではなく前を向いて」

新原は指示す方向は正面だ。地上ではなくどこまでも続いていき
そうな青の空だ。しかし正面を向くということは、後に地上に向く
こととなるのだが。

「なるせ」

「な、なんにだ？」

ちくしょう。緊張の所作か、「なに」と「なんだ」が混ざってハ
ングル語みたいになっちまった。

「怖がらなくていい。それに、返しジョークというのは空気を和ら
げる効果があるらしいのだが、なるせの現在の状況下に置いて効果
が半減しているのは残念」

「はっ？」

「……」

「おい、だからどういうことだ」

「本に書いてあった」

「本に書いてあったのか？」

「そう、本で覚えた」

「そうか」

「一日万語」

「一日マンゴー？」

「本に書いてあった」

「本に書いてあったのか」

「そう」

「そうか」

変な会話だ。しかし、今の状況下においてまともな会話をしろというのは、どだい無理な話なのかもしれない。

「一日万語、現代語を記憶するために覚えている」

「そうか」

さっきからちよろちよろとは思っていた。赤ちゃんが新しい言葉を覚えて、それを使ってみようとしている感じであったことを。ただ、それ現代人でないことをおもいつき暴露しているぞ、いいのか新原。

「この後、どこか私用はある？」

「あっ」

新原が尋ねてきた事で、俺は大事なことを思い出す。

「今すぐ喫茶店の近くまで行ってくれたら、とても助かる」

「がっ、」

「ん？」

「がってんしょーちのすけ」

「……」

「本に書いてあった、から」

「本に書いてあったのか」

「そう」

「……」

「やっぱりなんでもない」

「そうか、じゃあお願いしていいんだな」

「わかった」

すると、それを合図にフルスロットルのターンでもするみたく天空へ向けて迂回した。こっから勢いを付けて落下するんだ。効果音を付けるならギュインギュインか。

急激に前方からの風がなびく。新原がふとこっちを見た。あー新原のおでこ初めて見たかもしれない。そんな呑気な自分に呆れる。いくら命に別条はない状況っていつでも、いや怪我の心配さえないとはいってもそれはないだろう、ばか。そんな落ちていく少し前の瞬間。きつと遠目から見たら目眩めまいがするほどの急降下するのだろう。

俺は思う。ひこーきぐもはできるのだろうか。昔良く願った幻想。紙ひこーきを飛ばして願いを叶えようとした幻想。いずこへ？ まほろばではなかったのか。空を飛びたい？ それは実感している気がする。想像以上に凄いことだ。心が躍動していた。

やがて天空から落下。ジェットコースターみたいなもんだろうか？ 乗ったことはないけど。

「今度この時代の人間が、すべからく失敗するあれの考察をする」

こんなときに新原が喋る。すべからく失敗？ なんかのギャグか？

「閑話休題。それよりもなるせ」

「なんだ？」

「明日は――」
みょうにち

学校こいよ、だろ。でも、このタイミングでいうのはなしだぜ。

「学校に来て読み始めてほしい、あの本を」

それも解っている。だからみかじめ料をムリくりに払わせようと

する目つきはやめろ。あれは三日以内だったか。金曜日までにはしっかりと読むよ、ちゃんと学校に来て読むさ。

「本に書いてあるから」

「そうか」

「そう」

「本に書いてあるのか」

そんな何度目かのやりとりをした時に、もう一度思う。俺なんかのためにありがとさん。心の中で唱えてみる。落下は続く。

あんなに大騒ぎをしたわりには正味一時間足らずの寸劇だったことには驚きを隠せない。そう感じるのはおそらく、よほど密度が濃かったからだと思う。ていうか、これ以上何があっても、もうすでに常識を覆すような耐性のワクチンをこれでもかってぐらい打ち込まれているのだから、驚くのかなにもあったもんじゃーない。

あの急激な落下の後、新原がスマートな低空飛行を続けて穏やかに着陸したおかげか、はたまた都内随一の面積を持つ武蔵桜公園という着地場所が良かったのか、滞りなく問題もなく済ませることができた。改造したバイクは新原の超能力が解けて元の機能に戻ったものの、新原はそれを置いて帰ってしまった。放置か。

しかし俺も、それには構うわけにいかず喫茶店へと向かう。

やっぱりいくら身の危険を感じたといっても、ユカリを一時間ばかり喫茶店に放置しておいたのはまずいのかもしれないと思う。怒^どはってん

髪天を衝くほどの怒りをぶちまけられるのだろうか、昔のユカリなら。なら今のユカリでは？

近くまで来て、小早川がいるであろう喫茶店の様子を外から窺ってみた。

この場所。桜ははからずとも散ってしまったが、風情に溢れている光景は変わらない。

人生の休憩地点『葉』。そう考えつつ目の前のドアを、

――カランコロンカラン

開けた。

その瞬間、かろやかな鈴の音が鳴る。今の俺の心の状態には似合わない音。

とにかく、いろんなことがありすぎたと思い返す。

自分の事を世界を改変するもう一つの能力があると言うあの男のこと。新原と一緒にとんでもない世界を見てしまったこと。果たして、本当にユカリとは無関係なんだろうか。もしかしたら自分がなんらかの影響を及ぼしているのだろうか。やっぱり疑惑の念に駆られてしまう。致し方がない。

「どうしたの？ その逆立ってる髪型……」

小早川が座っていた席を見つけおずおずと近づいてみれば、開口一番に言われたセリフがこれだった。なんとなくほっとする。

「特に正面から見た感じが変だよ。なんかピンチの前髪みたいだね。はっ?!」

こういって自分の発言にはっとするユカリさん。なあ、おまえってそんなにおとぼけキャラだったか。白雪姫のこびとか。つくづく

なんというか。

「あーそれは髪が少ないって意味ではなくてー、チャンスの前髪をちよっと反対にひねってみたというか、あわわわっ」

とーぜんだ。毛髪量に關していえばむこう六十年ぐらいは問題ないだろう。これから先、宇宙人に搔っ攫ほじくわれて脳味噌ほじくを穿られて検査されて有害な電波を浴びさせられて、実はそれが放射能よりも危ないものだった、というのではなければの話であるが。

とはいえ、前髪の乱れを直すのも忘れていたのはどうかしているとも思う。

ナルシストとしてはボロが出っぱなしだ。

どうしてくれよう。どうしてくれようか。

いや、それよりも少しを落ち着かないと。

軽く、深呼吸と腹式呼吸みたいなのを繰り返してなんとか平静を取り戻そうとしてみる。やってみるとやはり、一時的だが調子が戻ってきた気がしないでもない。無駄な高揚感はまだでは収まらないが。

ユカリに座るように促されて、俺はようやく席に着いて腰を落ち着けた。この店内のゆったりとした雰囲気ふんいきが、すぐ馴染んでいけそうな気配であるのは僥倖りやうへいなのかもしれない。と、このまえ来たときとは別の意味で考える。

「どうしたの？ それで」

「あ——」

「ほらっ、遅れた理由」

「あー、そうさ。聞いてくれよ。斎藤がさ——」

俺は本当の事を言ってもいいかと一瞬だけ考えたが、流した方が賢明であろうと判断して適当に話を繋げていた。そうしてこの話も流れ、三十分ぐらひは歓談をしていたことになる。さっきまで非日常的出来事はこのの高鳴る心臓が無ければ嘘みたいであった。

ところが、夕日が見える頃合いになったところで、俺にとって重大なことを小早川はふと口にしたのだった。

「ねえ、ハルくん。実はね、あたし、ハルくんが来るまでの間、くたびれちゃってうとうとしていた時があったの」

ユカリはいまはもう空のコップをストローでもてあそんでいた。

「でね、なんかあり得ない夢を見たのよ」

なんだかいたたまれなくなった俺は、氣ばかり焦ってどんな夢かを聞いてみる。

「でね、おかしな話なの。ハルくんの事をいじめたり、関節技を決めたり、口汚く罵ったりとか、あたしが思い通りにならなかったことはほとんどハルくんのせいにしていたりとか。あつハルくんのことはナルって呼び捨てだし。そう、すぐそっぽ向いて目も合わせようとしなないし。だけど憎らしいことにときたまデレっとするの。まるであたしじゃなくて別の人みたいだったかも……」

まわりには爪に火を灯していそうな吝嗇りんしやくっぽい奥さんがいる。初老に手の届きそうなおじさんもくつろいでいる。そして俺らと同じような高校生もいる。

皆がめいめいに時を過ごしていて、きっとここでなされている会話も一般的には何の変哲もない話である。

「夢の中のあたしは、今の自分とは違う性格でいて変だったの」

しかし、そうとは言えないのが現状であった。だから、俺はこう言ったのだ。

「あのさ、ユカリ。それって――」

その夜。

返された十字架のペンダントがジーンズのポケットにあったのに、今更ながら気づく。

ユカリに渡しそびれたことが判明。そして結局、何一つユカリの変化が分からなかったことも判明。

だから、飯を食って風呂に入って歯を磨いて、妹に宿題は自分でやりなさいと言って、枕投げもパスをして、貰った手紙に何かヒントがあるのかと読んでみても何も分からないままであって、ならば芥川の『藪の中』でも読んで気を紛らわそうとして、しかしどうにも抗えないような眠気が襲ってきて、何もかも投げ捨てるようにして床に入ってしまったのだった。

4-1 加速的初春の陰謀

——なぜ夢は自分が寝ている最中の出来事でありながらも、夢だと感知することができのだろうか。しかし、意識だけが覚めたままこれが夢であることは誰もが知っているのに、そのすべは誰も知ることができないのだろうか。そんな不思議なことは意外と沢山あるのかもしれない。

羊が一匹、羊が二匹。オリーブの匂い。

やけに角ばった方舟はこぶねに吸い込まれそうになって変に躊躇する。ここから見える景色はやけに青白い景色だ。

「起きろ、起きるんだ」

なぜかこんなセリフを発してしまう。自分の頬をべしべしと叩くのは、寝てしまったら凍え死ぬような気がしていたからだだった。

「ニライカナイはどこ？ シャングリアはあるの？ ユートピアはいずこ？」

女の子の声が聞こえて、

「だいじょーぶ」

また女の子の声が聞こえて、

「サブリミナルをかけました」

今度は男の声が聞こえた。そして、

「構ってくれないと怒るんだからね!」

これは、よく知っている俺の幼馴染の声だ。胸中で呆れ吐息をつく。

「ナルは弱弱しいんだから、あたしが鍛えてあげるのよ」

あーそうだよ。昔からそうだった。

小早川はおまえの母ちゃんですーみたいなガキ大将風を吹かしていたさ、俺にだけ。

他人としてはハタ迷惑な義務感を胸に秘め逞しく風の子元氣な子に育てようとしていたのか、はたまた舎弟的な扱いができる存在が欲しかったからなのかは分からない。

ある時はこんなことがあった。

まだランドセルに傷一つ付けていないあの頃、俺がクラスメートの誰かと言い争いになり、でも腕っ節の弱さが露呈してやられているときに小早川がサッカーボールを蹴っ飛ばして戦場にかけてくれたことがあった。

まったくだな。少なくともユカリは関ヶ原の亡霊に悩まされた小早川 ひであき 秀秋系列の先祖ではないことは確かだ。あの気の強さは。

まあ、今になって考えてみるとあいつらだって悪くはないとは思ってはいる。だって年端もいかぬガキの時ってあれだ。結局は腕力がものを言う世界だろう。そう、言葉よりも何よりも力である。だから今となっては許せるような気がしていた。

しかし、である。

みんな仲良く平等にしなさい。手を出すのは良くないことですよ。そんなことをいう大人達。なのにあんたらは法の下でもなんでも平気で鉄槌てつゐを下すし、その合わない人とは互いに無視し合うじゃないか。大人だから構わないってなんとなく世の中の不条理を感じた、子供心に。すっれからしな性格にならなかったものだな。いや、さ

すがにそこまでは思わなかったけど。

でも、ホントはそんなことどうでもよくって、なによりも俺を助けた小早川の心情のほうが一番の重大ごとだった。もしかしたらこの時から、力がないことに託^かつけてしまい、お姫様のナイトにならないか弱い自分に匙を投げていただけなのかもしれない。そうだ、ただ単に情けなく思ってしまっただけで男としての矜持^{きやうじ}を捨ててしまったんだ。あるいは、男のプライドを踏みにじるぐらいに力を持つ小早川がおかしいんだと、強迫観念的に思い込んでしまったのだろう。

悔しくて虚勢を張ってきたんだ、きつと。

「なんでおれを助けたりしたんだよ」

あのととき心の中ではそう叫んでいた。

だから今では見せかけだけのナルシストだったりとか、文学要素を盛り込んだ詩的な雰囲気^{ふんいき}をだして人と違うことを目指したりとか、夢なんて言い張ってありえない絵空事に終始したりとか、いろんなことを小賢しく考え過ぎて思い通りにならない現実から目をそむけてきたのだろう。劣等感に苛^{さい}まれながらも、なんとか体裁だけをつけて日々を過ごしてきただけだ。でもそれは、取るに足らないかなよとしたことで、ほんと些細^{さいさい}でとてもつまらないことなのかもしれないのにな。

方舟^{はこぶね}に乗り込んだ瞬間に、世界はぐるぐると回り出した。というのは、今置かれている状況を正確に切り取って表現することができていないたちの悪い比喻であって、実際には遊園地なんかにあるコ―ヒカップみたく船が揺れているのであった。

ぐらぐら、ぐらら。

「ハルくん」

「えっ?!」

すると、誰もいなかったはずのこの方舟にユカリがいたのだ。
宵闇よいやみの景色に幽玄のごとく浮かび上がった小早川は、別段変りはないふうであつたがその黒い瞳の奥がいつもと違う気がしてならなかった。

「ねえ」

「あつ」

俺は小さく声を漏らした。それはなんでここにユカリがいるんだ、
と思つたからである。さっきまでは確かに誰もいなかったはずだ。

「あたしはここにいるよ」

ユカリが言葉を続けた。

「小早川、いつもと雰囲気が変わらないか？」

「そう？　あたしはいつも一緒、変わらないよ」

「そうには見えないぜ。だってまだ春なのに、しかもこの場所は冬
みたいに寒い場所じゃないか。なんで夏みたいな格好しているんだ
？」

「そう？　別におかしくないよ」

「いいや、おかしいって」

「大丈夫だってハルくん。平気だから」

「いや、」

それにしても、と思う。不思議なことでやけにサイズが小さいのだ。どこもかしかもすべてが。

「おまえ、なんか変わったか？」

「なに言っているのハルくん、あたしはあたしなんだから。何の説明にもなってないんだけどあたしはずっとあたしのまんま」

「あっ……、まったく同じ言葉を、まったく同じ意味で繰り返すレトリック表現。どこかで聞いたことがある」

「ほらっ、それは入学式の日に食べていたさくらんぼのことだよ」

「そうか。あの時の俺は、サクランボが赤いのはトートロジーがなんとかかんとかなんて言ってたっけ」

「そうだよ」

「あー、思い出した。あの時のユカリはやたらぱくついていたもんな。もうこっちが呆けているにも関わらずでかいジャンボパヘエなんかを食いやがって」

「ん、もうー、そんなこと言わなくていいの、ハルくん。だってあの時はお腹がすいていたんだから」

「だからってあれは食いすぎだろーが」

「あゝ、たしかにそうだけど……面と向かっていわないでよー」

小早川が口を尖らして笑った。俺もにへら笑う。なんとも安寧とした雰囲気は漂う展開になっていた。

「ねえハルくん」

「なんだ？」

「ちょっと恥ずかしい事を聞くけどいい？」

「なんだ、それ」

「ハルくんは初恋ってあった？」

「えっ？ 初恋？ 考えたことがないが」

「そうなんだ」

といって少し首をかしげた小早川だったが、やがてなにかを思いついたようにいたずらっぽく笑いこう言ったのだ。

「ねえ、まさかお母さんとかじゃないよね」

「はっ？ なに無粋なこと言っているんだ。そんなわけ——ってなにまたくすくす笑っているんだユカリ！」

「だって、だってそのうろたえ方が面白いんだもの」

「まったくそんなわけないだろうーが。だったらまだどっかの幼馴染の方がマシだ」

「ふーん」

「なんだよ」

「べっつにー」

「なんだよそれ……」

「あっ、そういえばハルくん。どうしてハルくんがここにいるの？」

「ん？ どうしてって言われても……」

「だってハルくんは——」

ふいにサブリミナルな光線が夜霧とともに過ぎさる。

目の前が強い光に包まれ、気づけば夜なのに昼間のように明るい。そもそもさっきまでの青白かった景色を夜と定義してよかったのだろうか、とふと思う。ところどころに濃い霧がかかり始めて前方の視界が悪くなる。けれども十字架のような太陽柱が辺りを照らしだし、ガラス玉よりも水素よりも光っている丸の粒が輝き、赤色と黄色と白色が輝くチューリップの詩に出^{うた}てくる色の虹が見えてくる、そしてさらに、しっかりと裸眼で確認できるのはゆっくりと通過していく大きな流星群。しし座流星群の衝動。この神^{かみ}さびた光景に心を奪われ、なにか願い事を叶えるべきかほんの少しだけ逡巡^{しゆんじゆん}する。銀河鉄道に乗ったジヨバンニとカンパネルラもこんな光景を見ていたのだろうか。しかし、独特の淡く美しい色彩、その幻想的な世界が闇に覆われていって、隣にいた小早川が消えていたのだった。

「――ちゃん。――てば」

誰かが揺する。

「おにーちゃん地震だつてばー」

ん？ やはり俺の体がゆらゆらと動かされる。

だけど、なんていうか……。

俺自身が第三者の視点であつてその様子を俯瞰ふかんしてみているのだ。ありていに言えば、俺は幽体離脱をしている状態であつた。もしかして、もしかするとエクトプラズムみたいにどこへでも流動できる目に見えないヘンテコな物質なのか。

しかも、少しばかりだるそうにして横たわっている自分の体は、自由意思がまるで利かずだるく感じて動けない。おそらく金縛りだろうか、それとも抜け殻状態なのだろうか。うむ、後者の可能性が高い。

「ほーらあー」

妹がぐらぐらとまた体を揺すり、それを眺めて思う。

まったく、アキのやつはなんだよ。人の体を動かすだけで地震だあーなんて。クオリティの低さに関していえば、最高級クラスの秀逸なネタを仕込んできたな。このアホ兄貴はそんな程度のネタしか仕込めなかったのかと考えてしまい、ちょっとだけがっかりである。ところが、そこまでいって思考が停止したのだ。

俺は先ほどのアキのセリフをリピートしてみる。

我が妹はおにーちゃんと呼ばなかったか？ と。

そうだ。確かに第一声はおにーちゃんであった。

この耳で間違いなく聞いた。って今は変な丸い物体なんだけど。
しかし。あの、あの妹が、母さんに変で危ない人になっちゃうからおにーちゃんって呼ばないことって厳命されたアキが、兄貴を慕^{した}っておにーちゃんなんて。

自然と口元が、しゅると笑いの形を司っていく。なんていうか、できそこないの悪魔みたいな形になる。

「じいーしいーん！」

「……」

「ねえ、おにーちゃん！ 起きてよー。寝顔激写しちゃうよっ」

それでも俺は起きられない。浮遊してアキのところまでいって何らかのアクションを起こしてみるが何の反応もない。あー靈感ないなこいつ。残念ながら、将来巫女さんにはなれないだろう。誠に残念のようなそうでもないような感じだ。

「ねえーってば。地震！ 地震、カミナリ、カジだって。あっ、急におもちがたべたくなってきたやつた」

脈絡性のない話にとうとう堪えられなくなった俺の体はだるそうに背を向けていた。だけど体は動いたようである。起きたいという意志とは真逆だけど。

「えっ?! なにそのたいどはー、おにーちゃん、てばー」

アキは一旦距離置いて、はてどうしたらいいものかと思案し始め

たらしい。いつちよまえに胡坐あぐらなんか掻いている。

しかし、うーんと、えーとっ、どうしよう。あっそうだおにーちやんが喜ぶことをすればいいんだ。ってそれさ。安政二年建築かというぐらいの家で、そこで雨漏れをしている屋根よりもっと酷い
ただ漏れの声を聞こせてどうするんだ。

ただ、それでもいい案が浮かんだのか、くしゅくしゅと自分のパイナップルヘアーを撫でパサパサと音を立てて、

「しょうがないなあー。じゃあ地球が第三小惑星と接触して隕石ができてしまうシミュレーションをするよ？」

何を言っているんだ我が妹は。ついにあの禁断の奇小説にでも手を出しちゃったか。あれだけは触るなっていたのに、あの『ドグラ・マグラ』のチャカポコ行進曲か、『黒死館殺人事件』か『虚無への供物』か。それとも、俺が中二の時に書いた門外不出で永久不滅の読本、『殺愛デストラクティブ』なのか。って読めるわけねえーよな。

「だいさんしょうわくせーせつきんちゅー」

しかし、そうやって俺が混乱している間にも、わが妹の様子は相変わらずおかしいのだ。

まるで機械のシュミレーターを真似た口調のたどたどしさ。いや、むしろわれわれはウチュージンだ、みたいな言い方である。

「そんでもって、せっぷんちゅー」

ガバッ。気がつけば瞬時に飛び跳ねていた。

「おい！」

「えっ、おにーちゃん唇が良かったの？　それは駄目だってばー」

「なっ、アキ。冷蔵庫に冷えたウォーターメロンがあるから……」

俺はなぜこの言葉を発しているのか分からない。そしてなぜか頬が緩んでいる。

「あ——っ！　その単語は嫌だって言ったでしょ。すいかって言ってよね、おにーちゃん。メロンなんてひどいつ。それ、あたしに向かってひんにようつて言いたいのを揶揄している言葉だよ、おにーちゃんのばか——っ」

「……」

なんだそれ……、我が妹はいつからこんなにもブラコン気味になったんだ。しかも、老人ホームに十年間ぐらいは住まわれている偉大なる人生の先輩であるおばあちゃんでも言わなそうなセリフを吐いたな。

『あたしに向かって頻尿って言いたいのを揶揄している言葉かね？　んーあ？　あたしゃーまだまだ若いものにはまだまだ負けんよ。ほら若造、この胸だって——』

なぜだ？　俺がこう思考を遊ばせていた瞬間に、虚乳ばーさんが降臨して子猫よろしくと寝ころんで俺の上でゴロニャーゴをしていた。

いや、それはともかく（ともかくではない）。
だいたい揶揄なんて難解な言葉を使っている癖に頻尿とはなんぞや。

よもや、おまえは貧乳といたかったのか。そうならしつかりと
そう言え。

おにーちゃんとしてそこは情けなく思うぞ。
ていうよりか、まだ九歳の、数え年でも九歳のアキが何を言っ
てるんだーか。

ってなんでアキがいなくなっているんだ？ しかも登場したばー
さんですら消えていたのだ。誰もいなくなったのはなぜなんだろう
か。

性懲りもなく、昨日の夜に知恵熱がでてしまった俺はファラオの呪いかなんて考えつつも、妹に取り計らってもらった氷枕がボートを叩く波のように鼓膜に伝わってくるのを起きてから今の今までずっと感じていた。気まぐれに寝がえりを打てばプカンプカンと音を立ててくる。横を向けばご丁寧にも氷嚢ひょうのうまで乗せてくれたらしく隣には氷袋が置いてあった。

それにしても……泥のように眠っておかしな夢を見たような気がする。が、まぶた瞼の裏に残っていたはずのその残像は影も形もなくなっていた。夢の記憶がほとんどない。ノンレム睡眠の夢パワーは恐ろしい。

「んーっ……」

やがてのっそりと起き上がり、トイレに行って顔を洗って制服を着てうんぬんかんぬん。一段落がついて朝食の準備に取りかかる。妹はテレビのチャンネルをあちゃこっちゃ回していて、そのたびにでる占いの結果に一喜一憂をしていたのだが、機敏に立ち上がりこっちにまでやってきた。なんだろう、別に占いの結果は教えてくれなくてもいいぞ。

「ハルくん様、お加減はよろしいでしょうか？」

どこで覚えてきたんだろうか、その給仕みたいな言い方。それにハルくん様って、お兄様じゃないのか。分かってはいるけど。

「アキ、昨日はありがとな」

「左様でありますか」

アキは口と鼻の部分に手を当てて、かまぐらの形みたいなおんもりとした山を作って小声で言った。まったく、何のアニメを見たんだ？

「では、ハルくン様。体のお具合が宜しいようなのでハルくン様、コーヒを召しあがりますか？　それともアキを召しあがりますか？」

「コーヒ。って、え？」

そんなふうにとどたどしくもかしこまった感じで言うので、俺は突っ込むこともできずにコーヒーと言ってしまったのだ。……まあ、いいじゃないか。アキはとんでもないことを言っているのだがそれに気が付いてはいないのだから。しかし、それは絶対に超えてはいけない一線なんだ。このことは綿密に注意しなくてはいけない、つてなはずはないよな。明日になったらもうその興味は削がれているだろう。

「あっ！」

ふいに聞こえた五十音の一番最初。声の主の方を見ると、今あたしの電球がピカンと光ったのよ、あたしとてもいいことを閃いたのよ、みたいな表情を浮かべている。見ればやかんを持って突っ立っているじゃないか。もしかしてお湯でも沸かすつもりなんだろうか。それはまずい。いいか、やめるんだアキ。熱いお湯で火傷でもして一生消えない傷が顔にでもついたら大変だ。いますぐやかんをガスコンロの上において、ポットに入った昨日の残り湯を使うんだ。それをレンジで温めるだけでいいから。なんならクリップの入れ忘れだって断腸の思いで受け入れてやる。へぼ兄貴はな、妹がコーヒ

ーを入れてくれるだけで心の底から満足だ。だからな、やかんでお湯を沸かすことだけは止めて――って、水道水かいっ！ しかも粉末よりも先にっ！ 俺は諦めて現実逃避をする。わーいわーい、アイスコーヒーばんざーい。

てんやわんやでの勢いで我らの――じゃなくて我が妹にインスタントコーヒを作ってもらった俺は、騎士道でよくありがちな三銃士並みのポーズをしてからうやうやしく受け取り、カップをはしを持ち上げてコーヒをすすずーとすすった。まるで三銃士のダルタニャンな気分だ。しかし、淹れたてのコーヒが泥水のように感じられるのはどうしてだろうか。一仕事を終えて満足げにしている幼子おきなこのせいかな。このさやえんどうをもりもりと食べているこわっばが、水を入れてから粉を入れたせいかな。いや、ただ単に泥のように眠ったことに対する相似的比喻表現を使ってみたかっただけかもしれない。そういうことにしよう。

コーヒを飲んだ後は何か摂取しようと思ったが、目の前にある色どりみどりの朝食が並んでいたのを見て、急に食物のために咀嚼そしやくするなんて行為がとてもまどろっこしく感じられた。結局、それらの食べ物えんかが俺の喉を通して嚥下えんかされることもなく、普段はもっちりとした感触を味わっているこの食パンも、さやえんどうのさや剥き卵付きサラダも、リングヨーグルトも、まったく食べられなかったのだ。なんとなく。

でも、妹はさやえんどうのさやをもりもりむしゃむしゃと食べているのに。テレビの方に足を向けてぶらぶらさせながら、ちゃんちゃかと世話もなくチャンネルを動かしながらだけど。

「ハルくん！ そいえば、今日って、あつめーが降るってさあ」

ふと思いついたようにアキが呟き、なんのてらいもない純粹な視線を投げかけて来た。

「ふん」

そう言われて外を見れば、雨が降る前兆といえそうな朧雲おぼろがこの世界を覆っていた。すりガラスを通したような不透明さは太陽を灰色に見せているようだ。別に悪い気分ではないこの光景。ただ、それは哀愁の空とでも表現できそうな霞んだ色を写し出していたのが気がかりなだけであった。

視線を水平に移動して元に戻すと、我が妹はさっきまで見てた星座占いから、キンカンぬってまたぬって♪ と変な抑揚の節を流れたCMのところで興味深々に反応し、

「変なお、キンカンぬって、またねえ〜ってハルくん。そこでバイバイするなんて、ありったけおかし〜よねえ〜」

そんなありえない勘違いをする。が、やがて程なくして、そのチャンネルはきつと良く分かりもしない経済ニュースで止まった。俺のために気を使ってくれたのだろうか。しかし、腕を組み、うんうんと唸るその姿はどうもそうには見えなかった。

「あははっ、この人もみあげながすぎー、つながってるよ！ ハルくんほら、つながってる〜！」

「……」

がんばれ。日本の将来は常日頃から危機感というか焦燥感というか、そういうある一定の憂いを帯びているが、きつと妹という存在が全てを超越してなんとかしてくれるはずだ、と馬鹿な奴が言っていたぞ。もう少しがんばれ、我が妹よ。

やがて学校に行く時間になって、俺はいつもどおりアキより先に家を出た。しょうがないよな春より先に秋という季節が巡ってくる

ことはない、とか埒も無いことを考えつついつてきますいつてらしい。鍵の戸締りを忘れないことと言って、ハルくん。アキに任せなさいっ、えっへんみたいな感じで言われた。

飯を食えない以外は特に問題もなく、熱が出たのもじんましんにも似た一過性のものだとは判断したのであって最初から学校には行くつもりだった。まあ、新原と落下時に交わした吊り橋効果みたいな約束もあるからな。

そして、しばらく歩いていると霧雨が降ってきた。白っぽい雨は周りの景色をさらに霞んで見せる。薄霧に近い現象だ。この灰色の世界にぼかしたアクセントをつけていたんだろう、と思う。

折り畳み傘を取り出そうとしている最中、ふと脳裏をよぎった言葉があった。

水はね、生命の源なんですよ。誰かがそう言っていたのを思い出した。誰だろうか。そこまでは思い出せなかった。でも構わないか。ともかく、今日は四月二十日、木曜日。

この世界に対するスタンスを変えなくてはいけないらしい俺は、訳の分からない何かにまた悩んでいたらしく、ローテンションにチューニングをしたままだ。

——カンカンカンカン。

すっかり慣れ親しんでしまった遮断機の音が耳朶じだに轟き、ほどなくしてギョインギョインという電車音が聞こえてくる。今日もまた変わらずにタイムイズマネー達を乗せて走り去っていくのだろうか、とふと思う。

昨日、学校はちょっとした騒ぎだったらしい。

とはいっても、この話題が学校中を席巻したわけではない。

学校は、ではなく主に一年B組が、ちょっとした騒ぎになったのだ。

まあ、たやすく言えばうちのクラスである。

気がついたのは昼休みのことだった。

数字と記号と公式の魔術が襲い、弥生時代の猛者達の武勇伝に困惑させられ、運動という名の拷問が極度の疲労を促し、そして解読不可能の文字が懸想文として成り立っていることに慄きながらも、やがてこくりこくり。

「なるせさん？」

どうやら首から上がボートを漕いでいたのを見咎められてしまったようで、はっと気が付き見上げてみれば、気の良さそうなおばあちゃん先生が目と鼻の先にいた。トイレ掃除の、ではなくて古典担当のおばあちゃん先生。すいません、ぜったい定年退職していますよね、と思っているのは心の奥深い触れてはいけないところに閉まっている秘め事だ。

危うくおばあちゃんと言いきりになるのをすんでのところでこらえ、くどくどと授業に対する態度の諸注意を受けている間にチャイムがなってくれた。あー助かったぜ。余計な懸案事項が増えちまうことだった。やれやれ。

ということは自動的に昼休みである。そうなった途端に、

「やっほ——————い」

斎藤だった。

俺はなぜか重苦しい雰囲気をまき散らすこともなく、かといってむやみに吹き払うわけでなしに、その鬱屈とした気持ちに萎んでいき晴れやかな気分になっていくのが分かる。

「やつほ————う！　なあ、成瀬、おまえ中休みはどこいつていたんだあー？！　話しかけようとしたらさー、さっさと教室から出ちゃって、チャイムがなるまでさー帰ってこないことはないだろ！」

その理由はいいつがこんなにもハイテンションだからであろう。当社比十割増ぐらいで、その成分はこっちの暗鬱とした気分まで吹っ飛ばしてしまうらしい。

ちなみに斎藤が言っていた中休みにいなかった理由は、新原から手渡された本を解読しようと文学室にいつて試みたからである。しかし、さわりだけしか読む時間がなくて肝心な事は何も分からなかった。あの本はなんだか途轍もなく危ないものかもしれない。それこそあるまじき爆発オチみたいな雰囲気かプンプンと漂ってくる気がしたのだ。

とりあえず内容はこうだった。

本書取扱い——一ページも一行も一文字も飛ばさずに読んでください。そうしないと取り返しのつかない事になってしまいます。そんな滅相もないくんだりから始まり、似たような注意書きがえんえんと書かれてあって、だからといって読み飛ばすわけにもいかずに読みとおしたのだった。まったく、黒魔術でもかけられているのだろうか。

ん……、斎藤の話に戻ろう。

「だから俺さ、昨日電話したんだぜー。今、クラス中の益荒男達が大変な事になっているって知らないだろー。昨日から凄いことにな

ますらお

っているんだよー」

斎藤が事細かに語ってくれたのは、担任の角川が一身上の都合で休職するらしいことと、「しかーしっ！　それがメインの本題じゃないんだ！」と妙に英語と日本語の意味が一緒のような気がするもったいつけた前置きを付けてから、その角川先公の休職に伴って臨時で配属された雇い教師の話を始めた。その人物とは――

『えっ、あの人が先生？　なんかあたしよりかわいいんだけどお』

『あーウインクしたらおもわず両目つぶっちゃいそうなタイプだな』

『なんかなでなでしたくなるよねー。よしよしって』

『常に瞳に涙をためていそうだよな』

『あー童謡とか口ずさんでそう。ある日、森の中あー（それ童謡か？）』

『世界は何でできているのかというと、あの方のような天然の癒しでできているのだろうか』

『並んで歩いたら姉妹に間違われそうだわ。もちろんせんせーが妹』

『ふむふむ、これをロリ教師というのかな』

『あつ、何もない所で転んだ。躓く事すくから始まるドジっ子の華麗な一日ってかんじい？』

『せんせー、もの真似してー。もちろんあーんちゃあんって！』

『せんせーぬいぐるみという付属物はどれぐらい常時してありますこと？ 参考までにお聞かせ願えませんか？』

『くちゅんだって、あつ、しかも鼻血だしてるよー（うげっ！ そ、それはトラウマだ）』

『せんせー自分の頭をコンって叩いててへっ、って言うって』

『せんせーなはなはしてー（そこに何の意味が見いだせるのか？）』

これはクラスメートの諸々の反応である。こりゃ教師を舐め過ぎである。まあ、まだ見知らぬ先生を拝ませてもらったら、そのイメージは変わってしまうかもしれないが、特に男子、半分以上はあんたらの発言に肯定できるが、見事なまでの**おの**ばかばっか。益荒男というよりもむさくるしいむくつけき男達の空集合だ。

でもふと思う。俺の见えている世界とやらはなんとも平和だったんだろうか。

だから、今置かれている現実を危うくおいてきぼりにしてしまいたいそうだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1234e/>

幼馴染との付き合い方

2010年10月9日00時59分発行